
王子

KMY

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子

【Nコード】

N5006B

【作者名】

KMY

【あらすじ】

高校生の零時治はある日異世界の王女ハルス姫に召喚されてしまう。召喚された人は必ず召喚した人と結婚しなければならず、1年以内に結婚しなければ死刑というとてもない決まりの下で、召喚したハルス姫に虐待を受けながらも治は力強く生きていく。小説家になろう史上最大最悪の駄作「居候」を書いてしまったKMYの、第2作ファンタジー小説！

第01話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」1（前書き）

僕は、濁点が苦手です。濁点をいらないところに置いたり、足りなかったり、とにかく、難聴であるために濁点がある時とない時の区別がつかない為、よく間違えます。「日本語がおかしい」という苦情がよく寄せられています、そこそこは我慢してください。

この物語でも、校正などしていないので、例外ではありません。あちこちに濁点の間違いがあっても、いちいち指摘しては日がくれます。なので、ご了承ください。その点を承知の上で、お読みください。

アンケートでは、濁点が間違っていることも考査に含めて結構です。でもって、間違いはいちいち指摘しないでください。指摘されても、大抵の場合直しません。そゆことをお願いします。

それからこの作品は「居候」の登場人物名と同じキャラクターが出てきますが、

「居候」内の同盟人物と何らかの関係はありません。

また、「居候」最終回で死んだはずの治とハルスが生き返った訳でもありません^^;

あくまで別の話です。

第01話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」1

彼の名は零時治と言った。彼は一ノ谷高校1年生。今日は5月のまっただ中。夏への準備が進んでいる時期である。その治が部屋のベットで寝ている有様を見て、母は困憊した顔で立っている。

母はついにしびれを切らし、治の布団をかばりとめくり上げる。

「治！起きなさい！」

母が怒鳴ると、治は驚いた顔をして起き上がる。

「びつくりしたじゃねえか。」

「まったくあんたは、高校生になってもそんな様なんだから。顔がいいだけで悪いところばかりじゃないの。」

治は、稀代の美麗な顔の持ち主であり、顔自体からかっこいいものは感じられないのだが、女みたいにかわいく、愛嬌のある顔であった。特に笑った時の顔は絶世の美女に勝る顔つきであり、男性も流石に惹かれるほどの様であった。街中で異性とすれちがう毎に、その異性がみんな顔を真っ赤にしてそっぽを向くので、治は人前を歩く事を避けている。

「さあ、早く準備しなさい。」

母が促すと、治は渋々立ち上がり、部屋を出て行く。

「んたく、治は……。」

母はため息をつく。

治はいつものように登校し、学校の教室に入る。

「おはよう！」

と言うと、みんなも一斉に治に向かっておはようと言う。

「今日の治もクールだな。」

と、一人だけ違う返答をするものがある。

「なあ、蛭崎、いい加減そんな答えはやめないか？」

と、蛭崎惇ほたるさきくんに対し、治の友達のまえだあゆむ前田渉が言う。

「いいじゃないか、ねえ、真ん中分けさん。」

と、惇がとなりにいる少女に同意を求める。

「ちよつと、あたしも巻き添えにしないでよ！」

と、羽生^{はせ}かおるが怒る。彼女は極端な几帳面であるが、こうやってあやすことが簡単にできるのが長所であった。

かおるは治の方へ歩み寄る。

「ちよつとするいわよ！」

と、後ろからまだもや女性の声がする。五十嵐^{いからしめみ}由美である。かおるは反論する。

「何よ！治の生活態度を注意に行っただけなのに！」

「あんたの行動がおかしいのよ！」

と由美は怒鳴り、それから傍らにいる女性に、

「よね？」

と、同意を求める。しかし彼女は黙って由美の顔を見つめているだけ。無言の長谷川^{はせかわれいこ}玲子である。

「ちよつと零時君！」

と、かおるが治に怒鳴る。

「何だよ？」

「ドアはきつちり閉める！」

「だからさ、お前の性格何とかならないか？」

そう言う治の後ろから幽霊の如くそろつと声がする。

「会いたくなければ一緒に死ぬ？」

その声に治はビクツとした。

「なんだよ、そんな方角から話しかけるなよ、冲本！」

治の後ろから冲本^{おきもともしと}守人がそろつと顔を出す。

「それにそんなことわざはないわよ！」

と、かおるもつつこむ。

「ねえ、かおる一人占めにするつもり？治を。」

と、岡田^{おかたれもん}檸檬^{れもん}がかおるの頬をたたく。そのたたかれた頬を押さえて、かおるは逆上した。

「何よ！あんたこそ、治にいろいろ注意していたでしょ！」

と、先程の音に勝るほど強く檸檬の頬をたたく。

「やったわね！」

と、檸檬がかおるを殴る。それから二人は喧嘩を始める。止めようと伊勢田由香が仲裁に入るが、彼女も二人に一齐に殴られ逆鱗に触れ、3人揃って仲良く喧嘩が再開した。これを阻止せんと小池正志こいけまさしが割り込むが同じ結果だった。これを阻止せんと次々と多くの生徒達が投入されるが、ついには教室規模の大喧嘩に発展するのだった。机は教室の隅っこに除け、掃除道具箱はからっぽ、ほうきやちりとリ諸々を持つてお互いを打ち合うのだった。

「やめさせないと！」

と、そこを大場馬子おおばうまこが突く。彼女の父は元暴力団幹部であり、爆弾の作り方には精通していた。火薬がなくでも、威力は若干劣るが、他の器具を使ってそれを再現する事が出来るのだった。彼女は早速作つておいた爆弾に火をつける。

たちまち教室規模の大きい爆発が起こり、生徒達は全員黒い煤を顔に塗つて静止する。同時に富岡藤男先生とみおかふじおが教室に入る。

「おはよう。今日も爆発か。」

彼は平然と言った。これはいつものことなので、毎朝爆発が起こつて然るべき事である、とのようにこれまだ平然と教壇に立つ。

「では、机を片付けなさい。朝のHRを始めます。」

第01話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」1（後書き）

お待たせ、居候の次回作「王子」

書いてしまいました。

一部分1000字はちよつと少なすぎますので、

1500〜2500の広い範囲内に見えました。はい。

召喚はまだちよつと先です。第3話辺り？

それは僕にも分からないんです^^；

小説の続きを知っているのは、僕の指だけです^^；

第02話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」2

彼女の名はハルス・トルエンディング・ド・モルデスと言った。

彼女はモルデス国王の娘、モルデス国の王女。モルデス国はかつてはその世界を統治していたのだが、100年前の39世の暴虐政治により多くの反乱が一齐に起こり、今では反乱国に囲まれ、唯一の同盟国ベールマルズ国と連携してかろうじて生きている有様であった。

「起きてくださいませ、ハルス姫様。」

一人の黒いスーツみたいなものを着た老人、ハルス姫の執事ごとケンジ・ザルロディエ・ド・ハセカワが、ハルスの寝ているベットの横前に立ち、静かに声をかける。ハルスは目をぱちつと開け、むくつと起き上がる。

「おはよう、じい。」

「おはようございます、ハルス姫様。」

ハルスはピンク色の寝巻きを着ていた。ハルスはしばらく空気を見てから、言った。

「ねえ、じい。」

「何でございますか、ハルス姫様。」

「召喚の儀式はいつ？」

「明日でございます。」

「明日……。」

「心配なされている御気持ち、御察し致します。」

「少なくとも片方は満足する、っていう言い方ね。」

「……。」

ハルスは、稀代の美麗な顔の持ち主であり、非常にかわいく黄金がいくらあっても足りないというほどのかかやきであった。特に笑った時の顔は絶世の美女に勝る顔つきであり、女性も流石に惹かれるほどの様であった。彼女の顔を見て、心臓の弱い人は鼻血を出す

人がほとんどで、中には倒れて死んでしまうものもいた。また、心臓が弱くなくても気の弱い人もめまいがする。それほどかわいらしい愛嬌のある動き方であった。

「じい。」

ハルスは、傍らにいる男の人に言った。

「もうちよつと寝ていい？」

「だめでございます、お嬢様。予定は予定でございます。」

「そう……。」

「御気持ち、御察し致します。しかしそれだけは出来かねます。」

「精神を集中したいの。絶対あのウィルソン王子がひっかかるように……。」

「国王の王命でございます。」

「そう……。」

ハルスはそれだけ言うと、心配した顔つきでベットから立ち上がる。

「モルデス国王様、一人の男が面会を願ひ出ております。」

ここはハルスの父、モルデス45世の部屋である。そこには、かつての世界統一国であるということを象徴するように、多くの装飾があった。モルデス45世は、一つの机に向かった一つの椅子に座っており、本を読んでいる間に目の前のドアが不意に開き、不意に家来が入ってきた形となった。モルデス45世は黙って本を閉じる。

「ここへ通せ。」

「はっ。」

しばらくして、家来数人と、一人のみすばらしいなりをした男が部屋に入ってくる。

「お前か、あの時以来だな。で、何だ？」

モルデス45世は、机のすぐ前にみすばらしいなりをした男が立つと、質問を浴びせた。彼は答えた。

「ハルス姫様が今度結婚相手の召喚の儀式をやるのは本当でございますか？」

「ああ、明日な。」

「いますぐやめていただきたいのです。」

「なぜだ？」

「姫様は生まれつき実に膨大な魔力をお持ちでございます。それがため幼少の時分その魔力が暴走して大変な事になられ、私が封印の印を付けました。」

「ああ、その印は今でも手のひらにあるよ。それがどうした？」

「その時、私があなたに警告したことを覚えてらっしゃっていますか？」

「なんだ？」

モルデス45世がそう言うと、男は目を丸くした。

「本当に御存じでござらないのですか？」

「ああ、忘れた。」

「それは・・・、彼女に杖を持たせてはいけないということでございます。」

「うむ、なぜだ？」

「ハルス姫様に魔法を使わせると言う事は、城一つを吹っ飛ばすくらい覚悟が必要でございます。」

「・・・しかしハルスも楽しみにしている。それにハルスの運命を決める儀式だ。やめるわけにはいかない。」

「・・・それほどまでに申し上げるのでしたら、従来の城の中庭ではなく、さらに広い草原でやることをお勧め致します。」

「そんなに危険なのか。」

「はい。」

「しかし、そのような所はこの近くにはないぞ。あるとしても敵国と隣接しているラヴェート草原しか・・・。」

「それがございます。」

「どこだ？」

「イパバート池でございます。」

男がそう言うと、モルデス45世は小さく微笑む。

「分かった。イババート池でやる。それでいいな？」

「はっ、さようございます。」

「そうか。」

「では、これにて。」

と、男は部屋から出て行く。

第02話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」2（後書き）

いよいよ明日召喚です。

・・・それにしても、心臓の弱い人が鼻血を流すって・・・
治はどうなんでしょうね^^；

第03話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」3

その日は土曜日だった。治は、一人の少女檸檬と、駅前を歩いていた。

檸檬は治の恋人であつたが、その関係は伏せている。檸檬に命の危険が及びかねないからである。

檸檬にはおしとやかなところがあり、治はそこを気に入っていたのである。よくもてる人ほどおとなしく気の弱い人を好むと言うのが恋愛道の法則であるとかいった本が売られていた時分もあつたが、二人の現はその内容とほとんど似ていた。

「ねえ、まずどこに行く？」

と、檸檬は治に尋ねる。

「まずレストランで昼食を取って、」

と、治は檸檬の手をつなぐ。檸檬の顔が真っ赤になっているのに気付いた治は、尋ねる。

「どこのレストランにする？」

「・・・・・・そ、そ、そば・・・・」

「そばがいい？」

「・・・・う、うん・・・・」

「じゃ、そばにする？」

治が言くと、檸檬はゆっくりうなずく。

「あ、あれにしない？」

「うん、そうしよう。」

治も同調し、二人はとあるそば屋に入った。

一方、こちらでは、イパバート池のほとりで、一人の少女、そしてその付き添い達が集まっていた。

少女、ハルス・トルエンディング・ド・モルデスは、池のほとりで一番広い草原の中心に立ち、付き添い達はそれを囲むように、で

きるだけはじつこへ下がり、円状にハルスを囲んでいた。

「呪文を、」

付き添いの一人、モルデス45世はハルスに促す。ハルスは決心したようにうなずく。

ハルスには、どうしても好きでたまらない人がいた。ウィルソン王子である。ウィルソン・ラヴァルト・ド・ザディアムは、モルデス44世とザディアム11世の親睦の会合の時、初めて顔をあわせ、隠れてこっそり話したりしていた。そのうちハルスはウィルソンの性格が気に入ったのである。なので、ハルスはウィルソンと結婚したいと望んでいた。

ハルスは、ウィルソンを召喚し自らの結婚相手にする事を望んでいた。召喚の儀式は、昔結婚相手を選びあぐねていたどこぞの国のお姫さまがしたのがはじまりで、今ではほとんどの王族が、15歳の誕生日に10歳台の未婚の異性を召喚する事になっていた。召喚されたものは召喚した人と1年以内に結婚しなければならず、さもないと死刑というとてもない掟を決めたのは、何回も否定され何回も召喚するのをめんどくさかったどこぞの王子が取り決め、全国に広がった。

ハルスは、しばらく何か言いたげにもじもじしていたが、ようやく意を決したように唇をかむ。それでいて、杖を目の前の虚無の空間に掲げる。

ラヴァ・オレガム・ワウェイオ・ファクアムダ・・・

ハルスは目を瞑り、呪文を唱えはじめる。

「きつねそば、ください。」

「あたしもきつねそばです。」

治と檸檬は、そば屋の一席に座り、来た店員に注文をしていた。

「はい、承りました。しばらくお待ちください。」

と、店員が行ってしまった後、窓ガラスから外の、道路に車が行き違っている景色を眺めていた檸檬は、やがて景色を見たまま治に言

う。

「おなか、すいたね。」

「うん、」

と、治も檸檬につられて外の景色を眺める。

「昔はここもきれいだっただのにね、」

と、檸檬が寂しげにつぶやく。

「もし俺が市長だったら緑豊かな町をモットーに、」

と治もつぶやく。

「緑が足りないの？それでも。」

と、突然前から不機嫌そうな女の声が聞こえる。

「何だよ、檸檬、お前も……。」

と、治が振り向く。

「……えっ？」

治はびっくりして立ち上がる。治の目の前には、一人の少女がいた。

「誰、あんた。」

その少女に言われるが、治は大声で怒鳴る。

「檸檬はどこだ？ここはどこだ？」

と、治は周りを見回しながら言う。周りには、ただ木。そして少女の後ろには池。そして人がここを囲んでいたが、全ての人が倒れていた。

「それはこっちのセリフよ。」

と少女は治の股間を蹴る。

「いてえよ、」

と治は股間を手で押さえ、少女に抗議する。

「あたしはハルス・トルエンディング・ド・モルデス。あんたは？」

突然そう言われるが、治はたじろいだ様子もなく、怒鳴る。

「その前にここはどこなんだよ？」

そう言うと、ハルスは治の頭を殴った。

「少なくともウィルソンじゃないのね。」

第03話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」3（後書き）

ついに召喚されてしまいました。

これからどうなるのか・・・???

それは、僕にも分かりません。

僕の指に聞いてください。

第04話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」4

「こ、これは・・・？」

二人を囲んでいたたくさんの倒れていた人々が少しずつ起き上がり、輪の中心を見る。そこに一人の見知らぬ少年の姿を認めた一人のマントをした男が、立ち上がりその男の子のほうへ歩み寄る。

「ち、近づくな！」

治は後すさりをするが、その男の人は治の方へ近づく。

「私は、ラルノス・レファキング・ド・モルデスと申します。あなたは？」

いきなり名前を尋ねられ、治は困憊する。

「あ、あのさ、ここはどこなんだよ？」

「モルデス王国です。」

「モルデスって・・・聞いた事ありませんか、」

「何をご冗談を・・・かつての世界統一国ではありませんか。」

「だからモルデスって何ですか。ここはアフリカ？アメリカ？アマゾン？それとも、」

「そのような地名は聞いた事はありません。」

「はい？アメリカですよ、アメリカ・・・。」

モルデス45世はしばらく考え、近くににいる側近に言った。

「シヨックによる記憶喪失の可能性がある。医者に見てもらえ。」

「ちよつと、それ以前にする事があるでしょう？」

と、ハルスはモルデス45に怒鳴る。

「何だ？」

「やり直してください！」

「何を？」

「召喚を。」

ハルスがそう言うが、モルデス45世は首を横に振る。

「無理だ。」

「そこをなんとか。」

「だめだ。ハルスの気持ちは分かるが掟は掟だ。1年我慢しなさい。」

「そんな……。」

かわいい少女がうつむいているのを見て、数人の男に引つ張られて抗っている治は、これが親子の拮抗なのかとひどく感心した。

「来い！」

と、数人の男に何回も怒鳴られ、治は、

「離せ！」

と、何回も抗う。

「待ちなさい。」

ハルスがそう言い、治の方へ歩み寄り、治の顔を一目見る。

「あんた……、よくも……。」

そのハルスの顔は、激怒していた。

「だからさ、俺の所為じゃねえよ。」

治がそっぽを向いてぼそつと言う。しかしハルスは治の股間を強くけり上げる。

「死ぬ。」

その一言と共に、治は気絶する。

「はっ……ここは!？」

治は眼を覚ますなり起き上がる。まわりには黄金の装飾が施された壁、そして右には肖像画、左には風景画、正面にはドア、後ろには窓があった。治はこの部屋で、窓際のベットに座っていた。治は立ち上がる。やわらかいじゅうたんにふわっと治の足が乗る。

はっとして前を向くと、ドアが開いているのに気付いた。そこに立っていたのは、先ほどの少女、ハルスであった。

「気付いたみたいね。」

「ここはどこなんだよ?」

治が言うが、ハルスはそれを無視して、ドアの傍らにかけてあった

棍棒を握ると、ドアを閉め、治の方へ歩み寄る。

「な、何だよ、近寄るなよ、」

治が言うが、ハルスはその棍棒を振り上げる。

「な、な、なんだよ？」

「問答無用。」

と、ハルスは棍棒を振り下ろす。棍棒は治の頭に命中する。

「あたたつ、」

治は頭を抑える。

「いきなり何だよ？」

治はそう言うが、ハルスは次いで第二の殴棒を振り下ろす。

「い、い、で、で、でえ、」

治は慌てて手を下に引つ込める。しかしハルスは治に棍棒を突き付ける。

「エロ。あたしに会いたいからのこのこ現れたのね。」

「ち、違、俺はエロじゃ、」

しかしハルスはさらに兇刃を治に殴りつける。

「エロ。ウサイ。死ぬ。あんたさえいなければ、」

「いてえよ、」

と治はくるとドアの方へ退る。しかしハルスはさらに治の方へ近づく。

「エロ。」

「誰がお前に触ったんだよ？」

「あんだがこのこ召喚されたんじゃないの。」

と、ハルスはさらに治を棍棒で殴る。治はだまらずドアを開け部屋から逃げ込む。

「あ、待ちなさい！あんたが死ねばもう一回召喚できるんだから、」
とハルスはその後を追う。

かろうじてハルスをまいた治は、さてこれからどうするかと城内の廊下を歩いていた。すると前から白髪の人が来るのに気付いた。

治は慌てて向きを変え退らんとするが、後ろから声をかけられる。

「日本の？」

「えっ？」

突然日本といわれた治は、びっくりして再度老爺の方を振り向く。

「・・・・・・なつかしい。」

と、その老人は涙を流す。

「大丈夫ですか？」

と、治はその老人をあやす。

「だ、大丈夫じゃよ・・・・、」

と、その老人は涙にまみれて答えた。

「君は零時治かね？」

「はい。」

「わたしは長谷川健治だ・・・・、玲子には会っているかね？私の孫だ。」

「えっ、あの長谷川さんにおじいさんがいたんですか？玲子には死んだと言われていたんですか・・・・。」

治がそう尋ねると、老人は首を振る。

「私が知っている限りのことを全て話そうか・・・・。」

第04話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」4（後書き）

次から第2節に入ります。

早速ですが前作の居候で酷評が来ました。

これを真摯に受け止め、もっと酷評が来るように

もっと読みにくい文章を書いていく所存でございます。

とんとか酷評をくださいなw

第05話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」5

「まず、この世界は、君が住んでいる世界ではございません。」
「えっ？」

とつぜん目の前の老人にそんな事を言われ、治は目を丸くする。

「冗談がお上手ですね。」

治が言うが、老人は黙って首を横に振る。

「この世界には、日本など存在しない。もちろんアメリカも、フランスも、イギリスも、ロシアも、そして地球もね……。」

「これはいい冗談で、」

「冗談などではない。」

老人が剣幕を見せたので、治は慌てて口を閉じる。老人はため息をついてから続ける。

「この世界には、魔法使いが存在します。」

「はい？」

「但し魔法が使えるのは王族だけでございますか。」

「王族だけ……なんだ、」

「君がさつき会ったハルス姫様は王族です。」

「はい？」

「王族だから魔法が使えるのです。」

「はい？ そんな非科学的な、」

「信じたくない気持ちは分かりますが、これは現実です。」

老人はそれだけ言うと、再度ため息をつき、横を眺める。治も横を眺める。そこには大きな一枚の地図が入った額ふちがかけてあった。
「これはこの世界の地図です。」

「えっ？」

「その地図に書いている文字は、全て地球上には存在しません。」

「はい？」

そう言われ、治はその地図に何歩か近づき、書かれている地名の文

字に目を凝らす。それは記号の羅列であつた。

「記号・・・ですね？」

「それがこの世界の文字です。」

「はい？」

地図を見上げている治に対し、老人は後ろから説明する。

「この国、トルエンディング王国は、かつてこの地図に描かれている全ての大陸を統一していました。しかしモルデス39世様の暴虐政治のために一斉に多くの反乱が起き、今ではモルデス国は瀕死の小国でございます。」

「・・・・・・・・。」

「そのうち、モルデス44世様は反乱国の一つベールマルズ国と親交を結びました。」

「・・・・・・・・。」

「現在即位なされておりますモルデス45世様は現在この多くの勢力が乱立する大陸を統一せんと軍備を整えているのです。」

「・・・・・・・・。」

「ちなみに・・・、モルデス45世様からあなたへ本を頂きました。」

「本を？俺に？」

治が振り向きさまに、老人、健治は一冊の本を治に差し出す。

「これは兵法の本でございます。」

「俺まで巻き添えかよ。」

「さようでございます。」

「・・・・・・・・どうやって帰れるんだ？」

「私を見れば分かりますよう。」

「・・・・・・・・。」

治は重い顔でその本を受け取る。

「あなたのお気持ちは分かりますが・・・・。実のところハルス姫様の魔力が実に膨大との噂を聞きまして、私も執事として仕官しました。」

「・・・・・・・・。」

「しかし、その魔力が余りにも膨大すぎてかえって使えないと分かりました。」

「・・・・・・・・。」

「なので、私はハルス姫様が魔法を操れるようになる日を待ち望んでおります。」

「・・・・・・・・。」

治は黙ってぶいとその場を離れた。後ろから老人は声をかける。

「私の正式な名称は、ケンジ・ザルロディエ・ド・ハセカワといいます。」

治は、目の前の部屋のドアを開ける。目の前のベットには一人の少女が座っていた。ハルス。泣いているようであった。治はドアを閉めると、ベットの方へ歩み寄る。

「来ないで！」

ハルスは顔を手で押さえて、さめざめと泣いていた。治は立ち止まる。

「あたしね、ベールマルズ国のウィルソン王子と結婚したかったのに・・、なのに、あんたが来るんだから・・。」

「・・・・・・・・少なくとも俺に選ぶ権利はない。」

「そうね、あんたの選択肢はただ一つ、一年後の死。」
「・・・・・・・・。」

「一年経つまで余生を楽しみなさいね。」

と、ハルスは立ち上がり、背中に隠し持っていた一枚の布切れを治に投げつける。それは治の顔に命中した。顔から取った布をみて、治は言った。

「これ、何だよ？」

「雑巾。」

「へ？」

「ちようどいいわ、じいがない間あんたが代わりにこの部屋を掃

除するのよ。」

「ち、ちよつと、余生を楽しむって話は、」

「あたしの召し使いになつて上等でしょ？ね？」

「はい？」

治は悪寒を覚えた。

第05話 第1節「長いトンネルを抜けると殴られた」5（後書き）

前回「次から第2節です」とか言っていました、

僕の指はいう事を聞きません^^;

ということですから・・・

ここからがつまらないです。

これからつまらなくなるのです。

覚悟してください

第06話 第2節「100万回ごまかされた猫」 1

治は命の危険を感じていた。

先ほどまで治はハルスの不在の折、ハルスの部屋に雑巾をかけていた。その時、治はとんでもない大失態を犯したのである。たんすの上に置いてあった花瓶を落として割ってしまったのである。たんすは治の胸ほどの高さで、花瓶はその上に置かれて赤い花などが飾られていた。たたてさえハルスは自分に毛嫌いをしている態度だったので、これが口実は何をされるかわからない。そんな状況であった。

おまけに、少し前に、ハルスの執事のケンジにささやかれたのである。ハルスは本来ベールマルズ国の王子ウィルソンを召喚し結婚したかったということである。これが故にハルスは怒っていたのかと思うと、治の逃げ腰に拍車をかけたのである。

ハルスのいぬうちにこの城を脱出せんと、広大な城内を治はかけまわっていた。しかし設計図のひとかけらも見えていない広大な城中を走るにも疲れた。立ち止まって息をついている時、目の前に一人の女性が立っているのを感じた。慌てて治は顔を上げる。

「あらあ、はじめまして。」

そこには見知らぬ女性が立っていた。治はその女性に対し、
「ごめん、」

と、彼女と壁の隙間をゆって逃げ出さんとした。すると走って行く治の後ろから意味不明な言葉の羅列が聞こえ、治が10歩は走ったところで、体が後ろに引っ張られていった。ついには前へ行く力がついにそれに負け、治はますます後ろに引っ張られてゆく。

やがてその女性の目の前まで引っ張られた後、急に肩の力が抜け治はどずんと地べたにひじもちをついた。

「失礼なごあいさつねえ、」

とその女性は治を見下ろす。

「い、今俺を引つ張ったのは、」

治が尋ねる。その女性は平然と答える。

「魔法じゃないの、」

「えっ？」

「だから、魔法が引つ張ったのよ。それくらいわからないの？」

女性は高慢な態度であつた。

「お前は一体誰なんだよ、」

治が怒鳴ると、その女性はわけもなく違う話題を持ち出す。

「あんた、この前召喚された人じゃない。なのになんで雑巾なんか、」

「

「ハルスに召し使いにされてんだよ。」

「おもちゃみたいなやつ。」

「俺はおもちゃ以下に扱われているんだよ。」

「妙な待遇ね。」

とその女性は言う。

「で、それが嫌で城を抜け出そうと？」

治は自分が思っていたこととほとんど同じことを言われ、目を丸く

する。

「やっぱりそうなのね。」

「いや、ちよつとだけ違う。」

「何が？」

「俺さ、ハルスのたんすの上の花瓶を割っちゃってさ、」

「えっ？あれはハルスのお気に入り花瓶じゃないの。」

「えっ？やっぱり・・・。」

「あれを割ったんじゃないあ、死んでも済まされないわよ。あんたの遺

体袋に入られて川に流されるわよ。」

「そんな伍子胥みたいにされて・・・。」

「ごしぞつて誰？」

「だからさ、」

と治は立ち上がる。

「とにかくさ、出口教えてくれよ。」

「出口・・・その前に仲直りをした方がいいわよ。あんたどこたん探されてしまいいは磔にされるわよ。」

「ひい・・・」

「あの女の子ね、きちんとあやかればうまくごまかせるわよ。」

「えっ？」

「そのうまいごまかしがた、教えてあげる。」

「あのさ、ちなみにおねえさんの名前、」

「その前に仲直りよ。」

「・・・あ、なんかごまかされたような・・・。」

治は言いが、女性は説明を始める。

一方、ハルスは散歩から帰って、自分の部屋で、自分お気に入り
の花瓶が割れている事に気付いた。しかも近くには治に持たせた雑
巾、そして治の姿はない、証拠過多である。ハルスは激怒し、その
部屋のドアをぱっと開ける。

「！」

ドアの向こうには、治が立っていた。

「ねえ、この花瓶はどういうこと？」

と、ハルスは治と出会いさまに襟を引っ張ってドアを閉め、花瓶を
人差し指で指し治に怒鳴る。

「ねえ、答えなさいよ、」

とハルスが治の方を振り向く。

「ははは、ちよつとさ、」

と治は笑顔を振りまく。

「・・・！！」

ハルスは治の笑顔をまともに見てしまい、慌ててそっぽを向く。

「そ、それでさ、えっと、あの、ど、どうして、」

と、恥ずかしそうな声でおしゃべりを続ける。

「ハルス姫様の嫌いな虫が沢山入っていたのです。」

「そ、そう・・・。」

ハルスはやっぱ頬を染めて、そっぱを向いていた。

「虫の卵も沢山あって、これはもう駄目だと思ったのです、ハルス姫様。」

治がニコニコして言うが、ハルスはそんな治の顔をまともに見れなかった。

「そ、そう・・・、なら、れ、例外で、そ、そ、掃除を、その、つ、続けて・・・。」

とハルスは目を瞑って治に人差し指を立て、指図とは思えない指図をする。

第06話 第2節「100万回ごまかされた猫」1（後書き）

第2節は、

治とハルスの片方がとんでもないことをしてしまい
お互いに弁解をする、
小話の繰り返しにしていきます。はい。

しかし、こんな平和な日々も、

—— によつて・・・なおちもあるのですが、
とりあえず今はこれを楽しんでください。

そして、一生懸命欠点を探して苦情をください。
待っていますw
できるだけ鋭い苦情をお願いしますw

第07話 第2節「100万回ごまかされた猫」2

ハルスは狼狽していた。

先ほどまでハルスは普通にベットで寝ていた。治に起こされ起きた候、治が厠に行っている時に、朝食の盆を持ってケンジが部屋に入ってきた。その時ケンジが、治の食べる黒パンを載せた皿を小さなテーブルに置く際、ハルスがちよつとしたはずみでテーブルに触ったら、がたとテーブルが斜めになり黒パンを載せた皿が落ち、しかもそのパンのちょうどいい所を踏んでしまったのである。黒パンは完全に原形を留めない重焉を喫したのである。

この前治の笑顔を見て以来治の顔を見るたび心拍が高くなるようになったハルスは、治の激怒した顔が想像しきれず、もしそうなたらどうしようと、少し動揺してケンジに尋ねる。

「じい、」

「わかっております、ハルス姫様。お代わりの黒パンですな。」

と、じいはべっちゃんこになった黒パンを拾い、慌てて一礼して部屋から出て行った。残ったハルスは、自分の食べる肉のスープを目の前にする。便を済ませた治の足音が、時を追う毎に大きくなる。ハルスはその足音を聞きつつ、自らの肉のスープを眺める。

治はなにも言わずに部屋に入ってきた。そして何も言わずに自らのテーブルにつく。ハルスはそれより一回り大きなテーブルで、スープ、サラダなど諸々の品々の揃った朝食を取るのであった。

「・・・あれ？」

治は気付いたかのように、後ろ向こうに鎮座しているハルスに尋ねる。

「ねえ、俺何かした？」

治の、黒パンの入っているはずの皿には、ハルスがいつも飲むはずの肉のスープが入っていたのである。ハルスのテーブルの、本来肉のスープが入っているはずの皿が空っぽなのを認め、治は再度言っ

た。

「皿、間違っているんじゃない？」

「・・・今日だよ。」

「俺、何かした？昨日？」

「黙ってて。黒パンはちゃんと後から持ってくるから。」

「えっ？ま、まあ・・・。」

治は恐縮した顔をして、前を向き目の前のスープを眺める。

「遅れて申し訳ございません、ハルス姫様！ハルス姫様のお踏みになった黒パンの代わりを、」

と突然その場に、ケンジが新しい黒パンをティッシュで包んで持ってきた。

「えっ・・・？」

治の目は点になった。

「踏んだ？」

「あ、いや、それは、」

ハルスは顔を真っ赤にして、怒鳴る。

「じい、復唱する癖はいいかげんやめてよね。」

「は、はい、申し訳ございません、ハルス姫様・・・。」

と、ケンジは恐縮して部屋から出る。

ドアが閉まると、治はハルスに尋ねる。

「俺、そんなに悪い事した？」

「・・・してない。」

「じゃ、これは？」

と治は、目の前の肉のスープに乗せられた黒パンを指差して言う。

「そ、それは、間違っただけだよ・・・。」

「なんだ。」

と治はそれだけ言い、黒パンをわしづかみにする。

「待ちなさい！」

と、治のそっけない態度にハルスが激怒して立ち上がったのと、
「おはよう！」

と、ドアを開けて若い女性が部屋に入ってきたのと、ほぼ同時であつた。

「あ、あなたは、」

治は驚いて、その女性の方を見る。

「この前の、」

「あら、久しぶりじゃないの、」

と、女性はドアを閉めると、治の前へ歩み寄る。

「お姉ちゃん、」

と、ハルスがその女性に言う。

「えっ？お姉さんがいたのか？」

治が驚いてハルスを見る。

「なにもあたしのお姉ちゃん、ウイリエじゃないの。」

「ごめん、名前言つてなかった。」

と、ウイリエは笑つた。

「言つてなかったんだ、」

とハルスもほんの少し安堵する。その隙にウイリエは治の皿に肉のスープが入っているのを見つけ、ハルスに尋ねる。

「ねえ、この肉のスープはどうしたの？」

と、ついでにハルスの肉のスープが空っぽなのを見る。

「だ、から、黒パンを落としちゃつて、」

「新しい黒パンがあるじゃない。」

「だ、だつて……。」

ハルスが言うと、ウイリエは一区切り置いて言う。

「ウイルソン王子と治とどっちが好きなの？」

そう言われ、ハルスの顔は真っ赤になる。

「う、ういる……。」

「自分に嘘をつきたいなら、気が済むまでつきなさい。」

と、ウイリエは、ハルスの言葉を一蹴した末、

「じゃね、」

と、すばやくドアを開け部屋から出る。

「待ちなさい、」

と、ハルスが真っ赤になって怒鳴った頃には、ドアはもう閉まっていた。見ると、治がこっちを見ていた。

「何よ、そんなにじろじろ見て、気持ち悪い。」

ハルスはそう言い、再度座った。

第07話 第2節「100万回ごまかされた猫」2（後書き）

バレンタインです。

バレンタインデー、新たな悲劇が・・・

この世に希望はありません。あるのは絶望だけです。
この世に本命はありません。あるのは義理だけです。

というわけで、

この小説にも義理チョコをください。

いやいや、義理チョコでも駄目だ、

機械的献上用のチョコにしてください。

機械的にください、はい。

第08話 第2節「100万回ごまかされた猫」3

ハルスは、治に部屋の掃除を任せると、ふらりと部屋から出、城内の廊下を歩いていた。

「なんだろう・・・、あたしはウィルソン王子が好きなはずなのに・・・。」

ハルスはそう言い、呆然と上を向いていた。

「あら、どうしたの、そんなところで。」

突然前からウイリエの声がし、ハルスは慌ててそちらを見る。

「恋わずらい？」

いきなりそんなことを言われ、ハルスはムカツとする。

「そんなわけないでしょ！」

「顔に書いてあるわよ？」

ハルスの顔は真っ赤であった。

「だから、あたしはウィルソン王子が好きなの！ウィ・ル・ソン」

「自分に嘘をついているの？それとも一度決めたことを貫きたいの？」

「貫く。あたし、治なんか嫌いなんだもん。」

「治が嫌いなら、ぼかぼか殴らないとねえ、」

と、ウイリエが挑発を含んだ声で言ったのでハルスは激怒した。

「するわよ、殴りもなんでも、死ぬまで！」

そう言い、ハルスはどすどすと歩き、部屋へ戻った。

部屋では、治が雑巾をかけていた。ハルスは床をふいている治の方へずんずん行き、怒鳴る。

「棒でも持つてきなさい！」

「何で？」

「いいから、棒を持つてきなさい！」

「わ、わかったよ、」

美少女の剣幕に押され、治は慌てて部屋の中から棒と思しき物をハルスに差し出す。ハルスはそれを掴みさまに、治の頭に力いっぱいぶつける。

今朝のことで、ハルスも自分を好きではないかと思っていた治にとつては、不意打ちであつた。いきなりハルスに棒で殴られたのである。

「あんななか、だつきらい！」

そう言い、ハルスは第二の凶刃を振り上げる。治は慌てて横へよけるも、ハルスは棒を横にバットの如く治の脇に力いっぱいぶつける。「がががぎづ？」

治はそれ以上言うよしもなく、その場に倒れてしまった。ハルスは治を縛り上げて壁に放り投げ、さらに凶刃を振るう。治の体はとんとん痛めつけられ……。

しかしちょうどいいところで棒は折れてしまった。ハルスは二本になった棒をそこに放り投げると、棒の代わりを取りに部屋から出て行けばたとドアを閉める。それとすれちがいさまにウィリエは部屋に入ってきた。

「こんにちは。」

ウィリエは治の前に立ち、声をかける。しかし治は返事をしない。

「こんにちは。」

ウィリエはしゃがみ、治に再度声をかける。しかし治は返事をしない。

「ねえ、」

とウィリエは、治の額に手を当てる。そして、そつと治の唇に、自らのそれをつける。

「あつ……。」

はつとしてウィリエが振り返ると、ドアにはハルスが新しい棍棒を持って立っていた。

「ね、ねえちゃん、」

ハルスは真っ白になっていた。

「やっぱり、これが本当の恋なのね。」

ウィリエはそう言い、立ち上がる。

「なに言ってるの、姉ちゃん。だから、あ、あたしは、ウィルソンが好きなの！」

「まーた、そんな事言っちゃって。」

と、ウィリエはハルスの肩をボンと叩くと、部屋から出て行きさまに、

「もしあたしと治と一緒にになれるなら、治に甘い言葉をかけるわよ。あんたはどうなの？」

と、挑発口調で言ったものだからハルスはたまらない。

「待ってよ！」

「なーに？」

「いいかげん、そういうところやめてよ！」

「だーめ。」

と、ウィリエはドアを閉め、部屋から出ていってしまふ。足音が少しずつ小さくなっていく。ゆっくり歩いている。揶揄しているのだろう。そう思うと、ハルスはすっかり真っ赤になり、治の前に行きしゃがむ。そうしてハルスはゆっくりと治の額に手を当て、治の意識がない事を確認すると、

「ほ、本命じゃないからね、」

と、ゆっくり、治の唇に自らのそれを合わせる。

治が起きたのは、その日の深夜であつた。

治は目を覚ましざまに、はっと起き上がる。隣にはハルスが寝ていた。胴体のあちこちがずきずきしてくる。その痛みを感じているうちに、治の中で一つの思考が出た。

逃げよう。城から脱出しよう。暴力を振るわれるなら、乏しい営みをするほうがましである。治はこっそりベットから抜け出、部屋のドアを静かに開け、閉め、部屋から出て行く。治は城内の廊下を慎重に歩いて行き、やっとのことで下りる階段を見つける。

「待て！」

そう怒鳴られ、治はビクツとして後ろを向く。そこには、こちらに槍を向けた兵士が立っていた。

「君はこの前姫様に召喚された若者ではないか。こんなところでどうした？」

「あ、すいません、ちょっとハルスの許可を得て、散歩に行くところですよ。」

「散歩？こんな深夜に？」

「はい、俺、夜に散歩すると気持ちが落ち着くんです。」

治がそう言つと、兵士は、

「ウモライ国の工作員がいるかもしれない。そうやって人目に触れないところで、彼らは、」

「ちょっと待つてください、ウモライ国って何ですか？」

「知らないのか？モルデス国と何回も戦争をしている国ではないか。」

「はい？」

治は目を丸くする。兵士は更に続ける。

「モルデス45世様は、あさつてにもこちらから攻撃をしかけている。あ、いや、もう1時・・・明日だな。」

「そ、そんな・・・。」

「そして、その御大将として、治を試してみようとおっしゃっている。」

「そ、そんな・・・。」

治はますます逃げたい気持ち募ってきた。

「明日は早い。早く寝なさい。」

「は、はい・・・。」

「モルデス45世様からのお告げでな、城外に出る事は許さん。」

「は、はい・・・。」

治はすっかり動揺していた。

第08話 第2節「100万回ごまかされた猫」3（後書き）

次から第3節です。

毎週金曜日を休載にしたかったのですが、

運営している三国志NET KMY Versionで、
そろそろ第5期が始まるんです。

土曜日夜9時リセットの準備のため大忙しです。

・・・でも今鯖落ちしていますので日曜日になるかも・・・
とりあえず、三国志NETサーバーの状態によっては
土曜日も休止になるかもしれません。

第09話 第3節「思い出と共に去りぬ」1

ウモライ国はザディウム国に侵攻を開始した。

前はザディウム国一の英雄ザファロ將軍、20万。中はザディウム王ナスオ、20万。後は用心深いウィリアム將軍、10万。累加武將数十人。合計50万の兵を率いて、ザディウム国は、モルデス国より一日早く大陸統一遠征を開始したのである。

「た、大変でございます、国王さま！」

兵士が、ザディウム国王ザディウム11世の部屋に、ノックの一同もせずに入ってくる。

「火急の用かな？」

と、しわかれた声で、一人の老人、ザディウム11世は落ち着いて答える。

「ウモライ国がわが国へ遠征を開始しております！その数はおよそ50万と予想されます！」

「何！？」

ザディウム11世は、驚いて立ち上がる。

「い、いますぐモルデス国に使者を送るのじゃ、使者を！」

落ち着きのない声であった。

「は、はい。」

「それからウィルソンを呼べ。」

「はっ。」

「お父様、何でございますか。」

すっかり成人になったウィルソン王子が、数人の付き添いを背後に置き、ザディウム11世の部屋に入る。

「ウモライ国が大陸を統一せんと遠征を開始した。そして、その最初の標的がわが国なのだ。」

「はい。」

「ウモライ国にとって、モルデス国を滅ぼすにはここを通るのが最短距離。致し方あるまい。」

「はい。」

「お前は落ち着いているようだが、50万の兵力と聞くと？」

「・・・・・・。」

「それが理由ではないのだが、お前に10万の兵を預ける。モルデス国に援軍をお願いした。モルデス国の援軍が来るまで時間を稼いでくれ。」

「はっ、わかりました、お父様。」

ウィルソンはそれだけ言うと、一礼して部屋から出た。

一方、使者は馬に乗り、モルデス国へ向かっていた。

「あれがザディウム国の首都か。」

ウモライ国王ナスオ21世は、山に登りザディウム国の城を望む。城は四方から山で囲まれており、守るには絶好であったが、敵から城を一望されるほど高い山が多く、それがデメリットとも言える。

「ザファロ。」

「はっ、」

と、ナスオ21世の傍らにいたザファロ將軍が返事をする。

「帝王軍8万を分ける。28万の兵である城を攻め落としてくれ。」

「はっ、承りました。」

と、ザファロ將軍は返事をし、一礼して下がると、兵士たちが休憩しているところへ行く。

「出陣だ。あの、ザディウム国の首都となる城を、制圧するのだ！皆、ついてまいれ！」

と、一喝すると、兵士たちは立ち上がり、それぞれ騎馬に乗って弓を整える。ザファロ將軍も騎馬に乗ると、

「いさ出陣！」

と怒鳴る。

28万の怒濤の音が、山しゅうに響き渡る。それを見計らい、ウィルソン王子も、10万の兵力を率いて迎撃に行った。

ウィルソンの兵士はウィルソンの騎馬を除き歩兵、ザファロの兵士は全て騎馬、そして兵力の差もあり、勝ち負けは一目瞭然であった。ただ、モルデス国からの援軍に間に合うよう、それだけでウィルソン軍は動いた。

二軍は平原で激突した。まず兵種がものを言った。ウィルソン軍ははじめから不利で然るべきである。

「何、ウモライ国がザディウム国へ侵攻を開始した？」

モルデス45世は、自らの部屋で、ザディウム国から来た使者の報を聞き、驚いて立ち上がる。そして、しばらく考える。

「その者！」

「はっ、」

と、一人のモルデス国の兵士が姿を表す。

「モルデス国の遠征を一日早める。全ての兵士に召集命令を取れ！」

「はっ！」

と、兵士は一礼すると、走って部屋から出て行った。それを見届け、
「ありがとうございます！」

と、使者も一礼すると、部屋から出ていく。

「ついに始まったか……。」

モルデス45世は、その使者が部屋から出て行くのを見届けてつぶやいた。

「そこにいるのは敵の御大将と見受けたり！」

ザファロ將軍は、敵の中で一人だけ騎馬に乗っているウィルソンを見つけ、槍をウィルソンの方へ向け、ウィルソン目かけて走って怒鳴った。

「ああ！我こそはザディウム11世の息子、ウィルソン・ラヴァル

ト・ド・ザディウムなり！」

と、ウィルソンも槍をザファロに向けて応じた。

「我こそはウモライ国の家来ザファロ將軍なり！」
と、ザファロ將軍も怒鳴る。

二人の槍が、お互いの首へ向かって行つた。

一瞬だつた。

一方の首、ウィルソン・ラヴァルト・ド・ザディウムの首は、胴体から離れ、浮遊した。

ザファロ將軍は、その首の根っこを槍で刺して高く掲げる。

「ザディウム国の王子、ウィルソン・ラヴァルト・ド・ザディウムの首、このザファロ・ベラーミグン・ド・レゲが打ち取つたり！」

第09話 第3節「思い出と共に去りぬ」1（後書き）

ウィルソン王子、戦死。

第10話 第3節「思い出と共に去りぬ」2

ザディアム11世は、自らの部屋で、そわそわしていた。モルデス国からの援軍を待っていたのである。

「王様！」

と、まだしも兵士がノックなしで入ってくる。

「今度は何だ？」

ザディアム11世は、落ち着いて答える。兵士は、動揺して答える。

「ウィルソン王子様、打ち取られてございます！」

「何！？」

「敵勢はもうすでに城の破壊をはじめております！早くどこかに避難なさいませ！」

ザディアム11世は、目を丸くして立ち上がる。

「ウィルソン・・・ウィルソンが・・・。」

「そんなことをぼやいている場合ではございません！速やかに避難なさいませ！」

「だ、誰を非難すれば、」

「こんな時にじやれという場合ではありません！」

兵士は動揺していた。

「う、うむ、わ、わかった・・・。」

ザディアム11世も、老体を押し部屋から出る。

「いたぞ、こつちだ！」

と、廊下の向かいからザファロ將軍が、ザディアム11世の老体を見つけて怒鳴る。後続の兵士たちも続いて走りこむ。

「ここは私に任せてください！王様はすぐに、」

と、兵士がザディアム11世の盾になり、向かう兵士たちを懸命になぎ倒していった。ザディアム11世は、走って廊下から脱出しようとする。

ザディアム11世の背中に、一本の弓が刺さる。そして、さらに

二本、三本、四本・・・無数の矢が、ザディウム11世目かけて降りかかる。

ザディウム11世は、ハリネズミのようになって死んだ。その、背中に沢山の矢の刺さってうつぶせになっている老体を見下ろし、ザファロ將軍は傍らの兵士に言った。

「さあ、ザディウムの兵を掃討するのだ。」

「はっ。」

その兵士は後ろへ駆け込み、他の兵士たちに指令を伝える。兵士たちがその廊下からはなれ、老体の前にいるのはザファロ將軍のみになった。ザファロ將軍は、ザディウム11世の死体を見下ろし、つぶやいた。

「これで、ザディウム国も滅んだか・・・。」

治は、ハルスの部屋を掃除していた。

しかし、治はこの掃除について、違和感を二つ持っていた。第一に、ハルスは「じいがない間あんたが代わりに」掃除するはずだったのに、その「じい」が、「私がやりましょうか。」と尋ねるもハルスは拒否しじいを部屋から出して治に掃除を任せた。第二に、掃除を任されるのはいつもハルスがない時なのに、今回はハルスが部屋に同居して、自分を眺めている。

治は、とうとうこの違和感に耐え切れず、ベットに座っているハルスに怒鳴る。

「何なんだよ、お前！何で俺が掃除をしなければいけないんだよ！」

「あら？掃除してもいいのはあんただけでしょ？」

「だからさ、なんでじいに任せないんだよ！」

「なんとなく。」

と、ハルスはそう言い、立ち上がると治の股間をける。

「続けて。」

「二人とも、」

と、同時にモルデス45世が、ドアを開けて入ってくる。

「何ですか、お父様。」

ハルスは再度ベットに座り、モルデス45世に尋ねる。

「ああ・・・、」

と、モルデス45世は重い声で答える。

「戦争なのね。」

ハルスが言う。

「ああ・・・、お手並み拝見として、その少年に、」

「ちよつと待つてください！俺は戦争なんで・・・。」

治が反論するが、モルデス45世は、今度は厳しく言った。

「だまりなさい。戦争が嫌いな気持ちは分かるが、モルデス国で有力な武将は私しかないのだよ。武将を増殖するいい機会だ。」

「だから、なぜ俺なんです？大臣にでもまかせて、」

「大臣は大抵賄賂三昧だ。」

「そんなに信用できないのですか？」

「ああ。」

と、モルデス45世は答える。

「とうしても俺が行かなければいけないのか？」

「ああ。」

モルデス45世が答えると、治は重い顔をする。

「あ、あたしは？」

ハルスがモルデス45世に声をかける。しかしモルデス45世は短く答えた。

「待機。」

かくして、モルデス国はザディウム国に援護進軍を開始した。

前は零時治、30万。後はモルデス国王ラヴァリン、30万。軍馬80万、弓矢100万本。合計60万の兵を率いて、モルデス国は、ザディウム国の援護とついでに大陸統一へ遠征を開始した。

第10話 第3節「思い出と共に去りぬ」2（後書き）

2桁です。

血の2桁です。

本当に申し訳ございません。

これ、軍記になりそうです。

シャンル、ファンタジーと歴史とどっちにします？

うーん・・・。

第11話 第3節「思い出と共に去りぬ」3

ハルスは、ハルスの部屋で、ベットから窓を眺め、城から出ていくたくさんの兵達を眺めていた。

ハルスが一番心配な人は、自分でも分かっていた。しかし、あえて他の人をつぶやかなければいけない。

「ウィルソン……。」

それをつぶやく、どれほど重い決断だったのか。ハルスは、自分で決めた事は最後までやりとおす性格であった。それが故に、約束は全て最後まで守る、そう言う人であり、いまさら好きな人を変更する事はできなかったのである。

「あたしが大好きなのは、ウィルソン王子なんだから！」

ハルスはベットの上で立ち、怒鳴る。

「おはよう、」

と、いきなりうしろからドアの開く音と共に、ウィリエが部屋に入ってくる。

「おはよう。」

ハルスは振り向きもせずに答える。

「まだウィルソンがすきなのか？」

と、ウィリエは尋ねる。

「当たり前よ、姉さん。」

「無理していない？」

「していないわよ！あたしが大好きなのは……。」

「あのね、ハルス。嘘をつくのはそれくらいにしたら？」

「えっ？」

ハルスは後ろを向く。

「さもないと、治が死刑になるくらいだったらあたしが結婚してあげる。とう？」

「そんな！姉さんが召喚したわけでもないのに、」

「だって、あんたウイルソン王子が好きなんですよ。」

と、ウイリエはにやけて部屋から出て行く。ハルスはぎつとしてベツトから降りる。

「ウイルソンが大好き。でも治は渡さないからね！」

廊下から、くすくすと笑う声が聞こえた。それがハルスを挑発させた。

ザディアムの首都であるはずの城を近くの高山から見下ろして、すでにウモライ国の旗があることをモルデス45世は認めた。

「ザディアム国も滅んでしまったか……。オサム。」

「はい？」

傍らにいた治が返事をする。

「あの城を攻め落とせ。」

「はい？俺は兵法になんか……。知恵は一応あるのですが、こんなのに使うほどだったら、」

「王命だ。」

モルデス45世は、威厳を以って言った。

「は、はい……。」

治は自信なげに答え、下がる。

治は、大きなくぼみの一番高いところで、自らの兵30万を前にして、叫ぶ。

「あの城を、せ、攻め落とす！」

治が叫ぶと、兵士たちは整列して治の前に立つ。それを見て治は緊張した。第一、戦争で大将になる事は、日本では極端にまれな例である。治は当然そんな事は経験しているはずがなかった。治は史記を愛読していた時分があつたのだが、そんなことも今になっては自信がない。

「そ、そこで待機してください！」

兵士たちは座る。そうして治ははつと後悔した。兵士たちに丁寧な口調を使うなんて……。負ける。俺は絶対負ける。そういう恐怖

を抱えながら、治はその場を離れる。

治は、しばらく近くを散策していた。何かヒントになりそうなものがあるかもしれないからである。治は、細長い谷を歩いていった。そして、谷の出口を見つけ、そこから外を見回すと、標的の城があった。その城を見て、治は一策を案じた。

治は、再度大きくぼみの一番高いところに立ち、兵士たちを前にして叫ぶ。

「30万の兵をそれぞれ10万の3つに分ける。1つは・・・、」

と、治は、さきほどのくぼみの東西にあつた絶壁の東の方の山を指差し、言った。

「あの山に登り、もう1つは反対側の山に登る。それで、3日後の夜に問答無用でくぼみに矢を放つ。」

「はっ、」

と、10万の兵と10万の兵はその場を離れた。

「残る10万は俺と一緒にあの城を落とす。」

「はっ、」

と兵士たちは答えた。

かくして、1日目の夜、治は10万の兵と共に出撃した。そして、夜のうちに城の近くに一つの陣をこしらえた。

2日目の朝、城内で寝ていたザファロ將軍は、兵士たちが騒いでいる声を聞き、起きた。

「何の騒ぎだ？」

と、ザファロ將軍は寢室近くの廊下の兵士を捕まえて尋ねる。

「それが、敵陣が出来ましてございます。」

「何？見せる。」

ザファロ將軍がそう言うと、兵士はザファロ將軍を、窓の方へ案内した。

「おお！」

ザファロ將軍は、窓の向こうに、「モルデス」と書かれた旗が掲げられている、一つの陣を見つけた。ザファロ將軍はしばらく考えてから言った。

「迎撃だ。あの陣を潰す。」

「はっ、」

と、兵士は去った。

第11話 第3節「思い出と共に去りぬ」3（後書き）

わかりにくいかも・・・^^；
ごめんなさい。

第12話 第3節「思い出と共に去りぬ」4

ザファロ將軍は、10万の兵を城に残し、10万の騎馬兵を率いて、零時治の陣を潰しにかかった。

「オサム様！」

兵士が、陣のテントの中で寝ていた治を大声を以って起こす。
「何？」

治が眼をこすりながら起き、テントから出る。

「敵襲でございます！城から多数の兵士が確認されました！」

「そうか・・・、兵士たちはどこに集まっている？」

「あちらでございます、」

と、兵士は治を兵士のとむろしている所に案内する。治はたくさんの兵士の前の、少し高いところに立ち、怒鳴る。

「これから君達を2つに分ける。」

治が言くと、兵士たちはきれいに、治の目前を境として二つに分かれた。それを確認すると、治は再び怒鳴る。

「右は騎馬に乗りあの兵と戦う。俺が合図したら左右に分かれなさい。再び合図したら敵兵を挟みこむ。そして左は陣払いをする。」

「は、」

と、兵士たちは左右に分かれ、右の5万は馬に乗り槍を整え、左の5万は陣の柵の撤去を開始する。

激戦だった。しかし、兵士の差もありザファロ將軍の軍隊は治の軍隊を押しつけていった。そして、もうすぐ陣まで迫ろうとしていた。それを認めた治は、陣払いを済ませて待機していた兵士たちに言う。

「弓を構え。」

そう言くと、兵士たちは弓を構える。

「よし、騎馬兵に合図を。」

治が言うと、数人の兵士が銅鑼を鳴らす。それを聞いた騎馬兵達は、右に左に分かれる。そうしてできた前への進路を兵士たちは突き進んだ。

「射よ。」

治が合図をすると、弓兵は一斉に前に対して弓を射た。怯んだ前兵を見て、治は言った。

「銅鑼を。」

そう言うと、数人の兵士が銅鑼を鳴らす。すると左右に退けていた騎馬兵が一気に弓で攪乱された兵士たちを挟みうちにする。

10万の兵士たちの前方は混乱した。前方は道案内の役も担っていて、道案内がいなければ後方はそれ以上進めない。

「ええい、前方を全滅させるな！続け！」

ザファロ將軍はそう言い、前に騎馬を進める。後方の兵士達も一斉に馬を進める。その様子を見て、治は言った。

「攻撃、やめい。退け！」

そう言うと、モルデス国の兵士達は一気に合流し、山の方へ逃げていった。山の登り道辺りになってから、治は馬を止めた。兵士達も一緒に馬を止める。

ここは、昨日兵士たちに待ち伏せをさせた、こちらから一番近い場所に当たる。治は言った。

「やぶに隠れる。弓兵は俺の指示に従え。」

ザファロ將軍の軍勢は、混乱して前に進むことが出来なかった。

「ええい、静まれ！敵はあんなに遠くに逃げた！」

ザファロ將軍が一喝すると、兵士達はまばらにザファロ將軍の方に視線を集める。それを認めたザファロ將軍は、言った。

「進め。」

「君は3、君は1・・・」

治は、兵士達の一人一人に、ばらばらに番号を付けていった。番

号付けが終わると、治は全ての兵士たちに対して言った。

「俺が1から5まで数えるから、俺がさっき言った番号を言ったら弓を一本放つ。」

治はそれだけ言うと、弓兵より更に奥の騎馬兵に対して怒鳴る。

「俺が8まで数えたら一斉に出る。」

「は、」

と、兵士達は言った。

ザファロ將軍の軍勢は、進軍が混乱の故に遅れ、山の登り道辺りに差しかかった。ザファロ將軍の軍勢は、左右にあるやぶを無視して前方に進んでいった。

「1!」

突然横から声がして、兵士達はびっくりする。と、同時に、まばらな方向から数百本の矢が飛んでくる。油断していた兵士達は矢に刺され倒れる。

「2!」

まだ声がし、兵士達は怯んだ。まばらな、先程とは違う方向から数百本の矢が飛んでくる。数百人の兵士たちがまた、倒れる。

「3!」

兵士達はもう逃げるしかなかった。そして、いろんな方向から矢が飛んできて、兵士達は後ろへ逃げ出そうとする。

「4!」

もう混乱してしまい、逃げることさえ出来ない。どこから矢が飛んでくるかわからない。そうしている間にまだもや矢が飛んでくる。

「5!」

矢が飛ぶ。

「6!7!」

治はそこまで数え、それから一呼吸置いて念をこめて怒鳴る。

「8!」

同時に、騎馬兵が突然出てきて、混乱していた前方は更に混乱する。

騎馬兵はついに前方を壊滅させ、後方めかけて進軍する。

前の心配ばかりする前方とは違い、後方は前ではなく後ろの心配をするものだから、いきなり前から敵が進んできて、後方の前方は混乱した。

「ひけ！」

治が怒鳴ると、騎馬兵は全員引き揚げた。

「ここに陣を作れ。」

山の入り口付近に、兵士達は陣を作り始めた。

混乱したザファロ將軍の軍勢は、城への退却を開始した。

ザファロ將軍は、後ろを見つつ思った。

「モルデス国にいつからあんな策士がいたのだろう・・・、明日はこちらも策を立てて臨まねばならぬだろう——・・・」

第12話 第3節「思い出と共に去りぬ」 4（後書き）

ちよつと理屈が分かりにくいとは思いますが、

第13話 第3節「思い出と共に去りぬ」5

ザファロ將軍は、翌日の朝、3日目の朝に、昨日失った5万の兵を悼み、城に1万の兵を残し14万の兵で城を打って出た。

治は陣で寝ていたテントから出ると、たむろしていた兵士たちに怒鳴る。

「いいか、足音を立ててはならぬ。全員陣から出る。」
治がそう言つと、兵達はこっくりとうなずいた。

「普通参謀として連れて行くべきでは？」

モルデス45世の傍らで、モルデス45世の弟シユースベルトが、モルデス45世に言う。

「何を言う。彼は信頼を置くために20万もの兵を残してくれた。もつとも何か作戦のために置いているようだが。」

「・・・・・・・・。」

シユースベルトは、口をつぐむか、言う。

「彼に単独で30万もの兵を任せるくらいなら、いつそ私が・・・。」

「

何を言う。」

モルデス45世は、それから一区切り置いて、続ける。

「契約を召喚から1年以内にしなければ、彼の体は消滅する――。」

。。

「でも、それを彼に教えた事はないでしょう！」

シユースベルトがそう言つと、モルデス45世はにっこりと笑つて、短く言つた。

「黙れ。」

「敵は陣の中にいるのか。」

敵陣を目前にして、ザファロ將軍はつぶやく。それから、後ろにいる兵達に言う。

「擲擧せよ。彼らを陣からおびき出すのだ。」

「は、」

と、兵士達はそう言い、陣を取り囲む。

「やあーい、このばーか、ばかばか大ばか者ー」

擲擧の聲が一気にその陣中にこたます。

「た、大変でございます！」

後ろからかすれた声がして、ザファロ將軍は騎馬に乗ったまま振り向く。そこには、一人の疲れきった兵士がこちらへ走ってきていた。

「何だ？その服装は城の兵の、」

ザファロ將軍が応対する。しかし、その兵士は疲れきったような真っ青なような顔になっていた。

「し、城が、落とされてございます！」

「なに！？」

ザファロ將軍は驚いた。そして、自軍の兵士達に命令する。

「陣に入れ！敵の兵士を探すのだ！」

兵士達は、陣に入って人影を調べた。しかし、陣の中には怪しい人影や物音など、一切しなかった。

「まさか・・・！みな、引き返すのだ！城を取り返す！」

ザファロ將軍は真っ青になって、兵士たちに怒鳴る。

一方、城を手に入れた治は、その城郭に立ち、敵軍の動きを見ていた。そして、敵軍がこちらに向かっているのを確認すると、後ろで休憩させていた兵士達に怒鳴る。

「出陣の準備だ。」

治がそう言つと、兵士達は休憩をやめ、武装していく。武装している兵士たちを見て、治は自分が召喚された時と全く同じ服装である事に気付いた。

「よろしければ武装を・・・。」

いつのまにか治の傍らに兵士が、もう一つの鎧を持ってやってきた。治はしばらく考えてから、言った。

「遠慮しておくよ。」

兵士達の支度が整ったのを確認し、治は騎馬にまたがり、同じく騎馬にまたがった兵士達に言う。

「出撃だ。」

治の軍勢が城から出てくると、いきなりザファロ將軍の軍勢にぶつかった。治は、軍勢の後ろで兵士達に指示した。

「敵は士気を失せている。全力を挙げて戦おう。」

治がそう言うのと、兵士達は気合を入れ、走り、敵軍に突っ込んでいった。

兵士の差はあったのだが、士気の差が痛く、しかも昨日混乱した軍勢でもある。ザファロ將軍の軍勢は次第に押しのけられていった。そうしている間に、夕方になった。

日没まで後30分くらい。そう認めた治は、兵士達に怒鳴る。

「押し上げよ、さつき陣を張った所まで！」

治が言うと、兵士達は怒涛の声を上げて、ザファロ將軍の兵士達を押しつけていった。

しばらくたち、例の山道の近くまでいった。日没まで後わずか。

ザファロ將軍の軍勢は既に滑走してしまった。治の軍勢は、陣に留まり休息を取った。

治は、休息を取っている兵士達を背に、山道を眺めていた。ああ、今頃敵軍は上からの矢では壊滅状態になっているだろう。平和な日本で過ごしていた治にとっては、想像しにくかった。史記で兵法もどきを勉強し、早く戦乱の世になって欲しいと願っていた時もあったのだが、これはつけなんだ。平和ボケの日本人は、戦争をしたがるが、いさとなると戦争を憎む。地球人は、みんなそうなのか。そう思うと、涙がこみ上げてきた。

ハルスに召喚される前の、日本での生活を思い出した。お母さん、

檸檬、それから……。あの時健治からこの世界のことを言われ、ショックだった治の心は、この回想により更に沈んだ。

はっとして、治は前から、数騎を見つけた。一番前の馬に乗っているのは、モルデス45世であった。

「あんた……。」

治は言った。モルデス45世は、陣の中に入り、兵士達の敬礼に息苦しそうに応じながら、治の方に近づいた。

「これで終わりか？」

「少しは王様に対してわきまえよ。」

「……………、俺はいつ帰れるのですか。」

「帰れない。」

「はい？」

モルデス45世の一言を聞き、治は真っ白になった。

「本題に入るか……、城の攻略、ご苦労であった。残りの兵士達は全て捕まえ、敵の指揮を取っていたザファロ將軍も捕らえた。」

「はい……。」

「早速ハルスをここに連れてくる。」

「あ、いや、それだけのご勘弁を、」

「オサムとかいったね。私は一国の王だ。命令には従ってもらっ。」

「……………」

治はうつむいていた。

第13話 第3節「思い出と共に去りぬ」5（後書き）

第14話から、第4節です。

治が落とした城で、ハルスと治は

別にどこでもいい再会をしたりします。

期待しないでください。はい。

また、最近忙しいです。

なので、小説執筆さえ芳しくなさそうです。

・・・・・・なるべく時間を取ってまいりますので。

その時はお気に入りから消していただきますよう宜しくお願いしますw

第14話 第4節「我輩はエロである。エロした事はまだない」 1

ハルスは、治が落とした城に、モルデス45世の使者と共に入った。

ハルスは、新しい自分の部屋を見て、あまり驚かなかった。ハルスが心配なのは、ウィルソン王子が生きているという、ただそれだけであった。ウィルソン王子が生きていれば、これ以上の喜びはない。

「お父様。」

ハルスは、モルデス45世の部屋のドアをノックする。

「入りなさい。」

中から声がすると、ハルスは静かにドアを開け、部屋に入る。

「ハルスか。何だね。」

モルデス45世は、問う。ハルスは心配そうに答える。

「あの、ウィルソン王子は……。」

「死んだよ。」

モルデス45世は、言いたくなかったような、重い声で言った。

「えっ……。」

ハルスは絶句した。

ハルスが自らの部屋に戻ると、そこにはこの前一目惚れした治が掃除をしていた。この部屋は長い間使われていなかったらしく、治は積もった埃をふいていた。

何よ。一目惚れなんで、してない。あたしは、生まれてこのかたずっとウィルソン王子が好きなんだから。ウィルソン王子以外の人を好きになつてたまるもんか。そう思い、ハルスははっと、治のおでこにキスした事を思い出す。ハルスの憤りは、慕ってゆく。ハルスはバンとドアを閉め、びっくりしてこちらを見ている治をけり上げる。

「エロ！」

その単語に尽きた。ハルスは更に、くるくる転がった治を再び蹴る。
「この前あたしのお尻を触ったのは、あんたでしょ？」

謂れもない前科を押し付けられ、治は立ち上がると怒鳴る。

「そんなことしてねえよ。」

「嘘ばかり！」

憤りの募っていたハルスは、さらに治に、誰にもされていない前科を次々と押し付ける。

「あたしが寝ている途中におっぱい触ったでしょ！」

そう言われ、治は更に蹴られる。治は後ろの壁に押さえつけられる。

「もともとお前の胸は平らじゃないか、」

と治は反論するが、

「お尻の谷間に手を挟んだでしょ。」

と、ハルスは一蹴する。

「そんなことするわけ、」

「ある。」

と、ハルスは治の首を強く絞る。

「うっ……。」

息が苦しくなった治は、あえぐ。

「ゆ、ゆる、して、」

「許さない。」

「た、たず、け、て、」

「殺す。今すぐお前を殺す。」

「な、なんで、」

「あたしね、本当はウィルソン王子が好きはずだったのに、あんたが出てきた所為であんたに惚れちゃったじゃないの。あれもこれも全部あんたの所為よ。だから殺すのよ。」

いくらなんでもむちゃくちゃな理由である。治はハルスの、自らの首を絞める手に手をかける。

「は、話せば分かる、」

ハルスは黙って治の股間を蹴る。

「あなたの選択肢は二つ、あたしに殺されるか、自分で死ぬかのどつちよ。」

「う、うっ、」

「どっちがいい？」

「ひ、ひっ、」

「答えてくれないならあたしが殺す。今日はほぼ確実にあなたの命日だから、」

「たす、け、け、て、」

ハルスは、治の首を更に強く締め付ける。

「何やってるの。」

と、突如部屋のドアが開き、中から一人の女性が顔を出す。ウィリエであった。

「姉さん。手伝って。」

「何を。」

「このエロ殺すの。」

「殺すんだったらあたしがもらっていい？」

と、ウィリエは二人に近づき、治の首を絞めていたハルスの手をばつと払いのけるなり、治の唇に自らのそれを押し付ける。

「ち、ちよっ、」

後ろから見ていたハルスは、真っ赤になってウィリエに怒鳴る。

「あんた、本気だったの？」

「当然じゃないの。」

と、ウィリエはそう言つと、

「あっ、」

と言う治の腕を引っ張り部屋から出る。その二人の姿を、ハルスは呆然として眺めていた。

ウィリエは、治を自らの部屋に入れると、治に言った。
「ごめんね、これは空くまで芝居だから。」

「そうですか。俺だって気にしてませんよ。」

治から返答をもらい、ウイリエは少しためらっている様子だったが、短く付け加えた。

「・・・でも、あなたが好きなのは本命だから。」

「えっ？」

治は目を丸くする。なんとなく悪寒がした。

「ねえ、もう一回キスしてくれる？」

「えっ・・・。」

治は顔を真っ赤にする。

「そ、それよりさ、俺の話を聞いてくれよ、」

「何の話。」

「えっとさ、俺、ハルスに召喚される前ね、こことは違う世界に・・・。」

「聞いている。」

「えっ？」

「ハルスの執事さんに。」

ウイリエは寂しそうにそっぽを向く。

「お父様、あたしじゃなくてハルスに執事をつけるの。あたし、お姉ちゃんなのに・・・。」

「なぜですか？」

「・・・。。。」

ウイリエは、手で自らの顔を覆う。

「理由は分かっているんだけど、でも、でも・・・。」

その手と手の間から涙が漏れる。

「理由って何だよ？」

治があわててウイリエに問う。

「エロじじい！こんなどこにいたのね！」

と、いきなりドアが開き、ハルスが姿を表す。ウイリエは慌てて濡れた顔を腕でふきハルスの方を見る。その目元が赤くなっているのに気付き、ハルスは激怒して治に怒鳴る。

「あんだ、姉ちゃんにまで手を出したのね！」

「いや、だから、そういうわけでは、」

治は真っ青になって退る。ハルスは更に治に近づく。

「ち、近づくなよ、」

「姉ちゃんに手を出すなんて、相当の罰を与えないとね。」

そのハルスの顔は、かわいいながら、もはや小悪魔であった。

「ご、誤解だよ、」

治は慌てて弁解するが、ハルスの影がだんだん大きくなってきているのに気付いた。

第14話 第4節「我輩はエロである。エロした事はまだない」 1（後書き）

メール上の友人にろくに返事を書くことも出来ないほど多忙です。
本人がこの文を見ていましたら、許してください。

第15話 第4節「我輩はエロである。エロした事はまだない」2

治は、痛快な朝を迎えた。

ハルスの暴力により怪我を賜り、非情にありがた迷惑であった。そんなでもって、寝床は床の上。しかもじゅうたんの上で寝てはいけないとくる。ハルスはちゃんとベットの上で寝ている。治は立ち上がると、ベットで寝ているハルスの横に来る。窓から光が差し込んできているが、薄暗い上ハルスはまだ起きていないようであった。

治は、昨夜の仕返しをしようとハルスの横に立ったのだが、いさ目前にすると、ハルスの寝顔のあまりのかわいさに、治は頬を赤らめる。何だよ、こいつ。檸檬よりかわいいじゃないか。でも、俺が大好きなのは、ハルスじゃなくて檸檬なんだ、と自らを必死で納得させる。しかもハルスは暴力ばかり。でも、その澄んだ寝顔を見て、治はしゃがみ、ハルスの顔を真横から見ると、見下ろした時とは違い、くうくうとした寝言が治の耳に痛く伝わってきた。

「ん……。」「

突然ハルスが、起きたような口ぶりを見せたので、治は慌てて退る。しかし、ハルスが寝返りを打っただけとわかり、治は再びハルスの方へ近づく。その顔を見ているうち、治はもう耐えられなくなった。治は、そっとハルスの顔に自らの顔を近づける。治の心拍が、どんどん速くなってゆく。

「ん……。」「

ハルスが声を出したのに気付き、治は再び退る。

「行かないで……。」「

ハルスにそう言われ、治はためらいながら、ハルスの方へ近づく。

「あ……。谷間に手をいれなくて……。」「

「谷？」「

治は真面目な性格であり、この「谷間」の意味が分からず、この世界にはたくさんの谷があるのかなあと、窓の方を眺める。

「キス、して・・・。」

ハルスにそう言われ、治は顔を真っ赤にし、少しためらいながらもハルスの唇に自らのそれを押し付けてやる。

「ん・・・。」

ハルスは起きた。目を覚ました。そして、今日真っ先に見た風景が、治の顔であつた。純粹な治の顔。ハルスは真っ赤になり、慌てて唇を離れた治を治より速く立ち一蹴り。さらに背を向ける治に再び股間蹴り。二発で治は倒れ、ハルスは倒れた治の背中にドンと座ると、言つた。

「昨日のうちに殺しておけばよかった。」

「何の夢を見ていたんだよ。ってか谷間って何だよ。」

治にいきなりこんなことを言われ、ハルスは顔を真っ赤にする。が、すぐに治の頭を殴り、言つた。

「ウィルソン王子と付き合っていたのよ！」

「死んだんじゃない？」

治がそう言つと、ハルスは再び治の頭を殴る。

「と、とりあえず、夢を見ていたのよ！」

「誰と付き合っていた？」

「えっ？」

「誰と付き合っていたんだよ？」

「ウィルソンに決まっているじゃない。」

「じゃ、谷間ってどこの谷？」

治がこう言つと、ハルスは顔を真っ赤にする。

「どっかを観光してたの？人前でキスをするなんて、」

治がそう言つと、ハルスは再び治の頭を殴る。

「それ以上言うな。」

「何でだよ。」

と、ドアのノックの音がする。

「入って。」

ハルスがそう言つと、ドアが開き、中から健治が出てくる。

「じい。ちょうどよかった。早急にこの燃えるごみを処分してちょうだい。」

「燃えるごみでございますか。」

「そうよ、じい。早く処分してやって。」

「承りました。」

と、健治が言くと、ハルスは立ち上がり治の股間を蹴る。

「さあ、じいがあんたを天国に連れてってくれるそうよ。案内してくださいに感謝して。」

ハルスは、軽蔑したように、治を見下ろす。

治と健治が部屋から出ていったあと、ハルスは再びベットに座り、うつむく。ハルスがさつき見ていた夢は、ウィルソン王子ではなく治と性的な行為をしている夢であった。その夢を思い出すたびいらいだちが募る。その夢を何回も思い出し、ハルスは嫌な気持ちになり、それを吹っ切る気持ちで、立ち上がり怒鳴る。

「あたしは治じゃなくてウィルソン王子が好きなのよっ!」

「何の騒ぎ?」

ハルスははつと前を見る。いつの間にかドアは開き、ウィリエが顔を覗かせていた。

「姉さん!」

ハルスは顔を真っ赤にし、ウィリエを見る。

「おはよう。」

ウィリエが言った。

「な、何の用よ。」

ハルスは恥ずかしそうに言った。

「さつさと告白しないとあたしがもらっちゃうし、心だって離れるわよ?」

「違うの!あたしはウィルソン王子が好きで、」

「死んだでしょ。」

ウィリエに一蹴され、ハルスは涙をぼろぼろこぼし、ひざをかくん

と折る。

「そ、そんな事言わないでよ……。」

ハルスは涙を流し、言う。

「それじゃ、まだ後ほど。」

と、ウイリエは早々にドアを閉め部屋から去って行く。ハルスはしばらく泣いた後、ウイリエがばたと閉めたドアを眺める。

第15話 第4節「我輩はエロである。エロした事はまだない」2（後書き）

退る：すさる と読みます。

軽蔑：けいべつ です。

ごめんなさい、漢検1級は早すぎたようです。

変換にも反映されるようになりました、難読漢字。

この前は、たんぽぽがどうやっても蒲公英になります。

ほこうえい？ほこうえいって何だ？当て字です。

読めない漢字があれば、それは全部僕の所為^{せい}ですので、
恥ずかしからずに調べてください。

恥ずかしがるべきは全て僕なのですから。

第16話 第4節「我輩はエロである。エロした事はまだない」 3

「ねえ、長谷川さん、」

治は、健治の部屋にいた。健治の部屋は城の端っこ辺りにあり、かび臭く、まさに召し使いの部屋としてふさわしい部屋であった。「治様。」

健治は丁寧な、治に言った。

「あの・・・、孫の友達に様付けをしないと思います、普通。」

「すみません、癖でございます。」

「そうですね・・・。」

そう言い、治は小さな窓から外を見る。

「寂しゅうございますか？」

そう健治に言われ、治は感傷的になる。涙がぼろぼろこぼれてくる。「私も、はじめは寂しかったです。家に帰りたい気持ちは、私も同じです・・・。」

そう言われ、治は切ない気持ちになった。

「そういえば、さつきハルスに谷のことを言ったら怒られたんですけと。」

「谷？といますと？」

「谷間に手をいれなくて、と言ってましたし、ハルスはどこか気に入っている谷とかあるんですか？」

「あの・・・、治様。谷間とは、女性の胸のことでございます。」

「はい？」

「正確に言いますと、おっぱいとおっぱいの間でございます。」

「はい？」

治は目を丸くする。

「そんな意味付けはややこしいのでは？」

「しかし・・・。」

そう言い、健治も窓の方を向いた。

治のいない部屋は、幾度か広くなったように感じた。ハルスは、着替えもせずに、ベットに座り、後ろの窓から外の景色を眺めていた。ふと、ハルスは立ち上がり、たんすの抽斗を開ける。そこから一本の杖を取り出し、握る。

「なぜ、あたしは魔法が使えない……。」

その一言で忘れようとしたが、やはり頭から離れない。ウィルソン王子ではなく治のことばかり考えている自分に対し、憤りを感じた。「まだ一人だったの？」

ウィリエが黙ってドアを開けて入ってくる。

「ノック、しなさい。」

「あら？ 仮にもあたしは姉さんよ。」

「そう。」

ハルスはそれだけ返すと、再び杖を見てつぶやく。

「なぜ、あたしは魔法が使えない……。」

「そりゃ、魔力が余りにも高すぎで、暴走するからでしょ。」

ウィリエはあっさりと答える。

「じゃ、どうすればきちんと使えるの？」

ハルスが問うが、ウィリエはしばらく考えてから短く言った。

「分からない。」

「そう……。」

「それよりさ、忘れようとしていたんでしょ？」

「えっ？」

「治を忘れたい気持ちは分かるわよ。」

「えっ？」

ハルスは目を丸くする。

「やっぱりね、最近のハルスの行動は分かりやすくなったわ。」

「どういう意味よ？」

「ふふ……それはとりあえず。」

ウィリエは、くすくす笑いながら、ベットの、ハルスの横に座ると、

ハルスの肩を叩く。

「心配ご無用。あたしが代わりに恋人になつてあげるから。」
「……………」

「さつき、じいと治が話しているのを聞いたけれど、今朝の夢で治とキスしていたでしょ？」

「えっ？」

ハルスは真っ青になる。

「やはりね……、嬉しい夢が本当になったら嬉しいでしょ？」

ハルスは一瞬にして顔を真っ赤に染める。

「そ、そんなこと、な、ないよ……。」

そう言いながらも、口はあわあわとうごめいている。ウィリエは、そんな顔を見てくすつと噴出す。

「じゃ、さつきお父様に聞いたけれど、明日また遠足に行くそうよ。」

「遠足……………」

ハルスは下をうつむく。ウィリエは、笑いながら続ける。

「なんでウィルソン王子の墓に参らないか、その理由はみんなにばれればよ。」

ハルスは一気に顔を上げ、立ち上がる。

「参る。」

「無理しなくてもいいのよ。」

ハルスはその言葉を見殺してドアに向かう。ウィリエは杖を構えると、ハルスに向ける。後ろから気配を感じたハルスは、ドアノブに手をかけたまま後ろを向く。こちらに杖を向けたウィリエを見て、ハルスは驚く。

「来なさい。」

ウィリエにそう言われ、ハルスは恐れたように再びベットに座る。

「無理しちゃだめ。」

「……………」

「それじゃ、明日の遠足の心の準備でもしてて。」

「うん・・・。」

ウィリエは、ドアを閉めて部屋から出ていってしまった。その閉まりゆくドアを見て、ハルスはやっと自分の心の中を悟った。悟ったのは悟ったで、どんと涙があふれ、ハルスはベットの枕を掴むと、うつむき枕を顔に押し付けて、さめざめと泣き続けた。

第17話 第4節「我輩はエロである。エロした事はまだない」 4

ハルスは、ぼつりぼつりと、健治の出した昼御飯を口に入れ始めた。

治がいず、この部屋が極端に広くなったような気がするものの悲しく、かといってウィルソン王子を慕わないと忠義に反すると、自分に無理やり言い聞かせる。

「じい。」

ハルスはそれを振り切るような声で言った。

「はい、何でございましょうか、ハルス姫様。」

「ふたつお願いがあるんだけど。」

「何でございましょうか。」

「あたしをお嬢様と呼んで。」

「承りました、お嬢様。それでは、もう一つのお願いは何でしょう？」

「もう一つのお願いはね……。」

ハルスは視線を食べ物に落とし、ためらいの入った声で言った。

「あのバカをね……。」

一方、その頃治は、明日の遠足に向けて軍議につき合わされていた。

「明日ウモライ国に侵攻する。で、ここに貼っているのが地図だ。侵攻方法について何か意見はあるかね。」

モルデス45世は、將軍達に話しかける。

一人の將軍が手を挙げる。

「何だね、ギルモ。」

モルデス45世が名指したギルモは、立ち上がって意見を述べる。

「まず、ザファロ將軍を斬首した方が望ましいと思います。」

「なぜに？」

「逃走したら相手国に隙を与える事になります。」

「ならばお前が監視しろ。」

「はい？」

「お前が監視したらザファロ將軍は逃げる事はないだろうな。」

「は、はい……。」

「ただし殺してはならん。」

「はっ、」

と、ギルモは座る。ギルモが完全に座ったのを見て、モルデス45世は言った。

「では、今回の参謀は、オサムだ。」

モルデス45世がそう言うと、治以外の家来は一斉に立ち上がった。「何だ？」

モルデス45世が問うと、家来達は一斉に言った。

「会ったばかりの人はいくら才があろうと参謀にするのは早すぎではないのでしょうか！」

「座れ。」

モルデス45世が一喝すると、家来達は渋々座る。

「そういえば、君は他の世界から来たそうだな。」

どこから聞いたのか、モルデス45世が治に問うと、治は黙ってうなづく。

「君の世界では、はいも言わないのか。」

「は、はい！」

「あの見事な采配振りから見て、君の世界では戦争がたくさんあるのだね？」

「いいえ、平和な世です。」

「ならなぜあれほどの軍配が出来るのかね？」

「ちよつとした兵法書を読んできました。」

「なぜ戦争がないのに兵法書を？」

「知恵をつけるためです。僕の世界では、戦争ではなく言論で戦います。その時の身構えについて勉強ただけでございます。」

史記は歴史書、とはつきり言つと、ややこしい説明に追い込まれそうなので、治は嘘をついた。

「そうか。……そういえば、この世界での名前は付けていなかったな。」

「はい？」

「なら、君は今から、オサム・トルヴァリング・ド・モルデスだ。」
モルデス45世がそう言つと、家来達は再度一斉に立ち上がる。

「トルヴァリングの身分は、トルエンディングと結婚してから名乗るものです！」

「あの……、」

治も立ち上がる。

「トルヴァリングって何でしょうか？」

治が尋ねると、モルデス45世は答える。

「王子。ちなみにトルエンディングは、王女の意味だ。」

「は、はい。」

治は悪寒がして、座る。見知らぬ世の中で、いきなり一国の王子にされるなど、治は考えもしていなかった。

ハルスと初めて向きあつたあの日、ハルスは「ハルス・トルエンディング・ド・モルデス」と名乗っていた。それをふと思い出し、治はハルスに言いたい事が一斉にふき出てきた。軍議が終わると、治はまっすぐハルスの部屋へ直行した。しかしドアを前にして、治はためらつた。確か、さっきハルスは俺の事燃えるごみつて言つてなかつたつけ？その言葉を思い出すたび、治の心の中では憤りが募つてゆく。

「オサム・トルヴァリング・ド・モルデス様……。」

傍らから健治が来たのに気付き、治は慌てた。

「聞いております、あなたが任命されましたこと……。」

「それについて俺はハルスに聞きたい事があるんだけど……。」

「いえ、名目上でも結婚できます。」

「で？」

「一年以内に契約をしないと、あなたの命は消滅します。」

「はい？結婚は・・・」

「結婚と契約は違います。一般的に契約は結婚の時にするので契約と結婚はまとめて扱われます。」

「で、契約ってどんなことをします？」

治がそう言っていると、健治は急に顔を真っ赤にして、

「し、失礼します！」

と言い、走って逃げた。

「ち、ちよつと、」

治が健治を止めようとするが、健治の姿は既に見えなくなっていた。

治は決心したように、ハルスの部屋のドアを勢いよく開け、前をよく見もせずに怒鳴る。

「契約ってどんな事をするんだよ！」

「こんばんは、」

と、ハルスはベットに座っていた。治はドアをバンと閉めると、ベットの方へ駆け寄り、ハルスを見下ろして再度怒鳴る。

「俺はさ、お前に聞きたいことがある！」

第17話 第4節「我輩はエロである。エロした事はまだない」4（後書き）

そんなわけです。

毎週金曜日は休載です。

で、毎週土曜日は50%休載です。

第18話 第5節「逃げるメロス」1

「何？」

部屋でベットに座っているハルスは、目の前に立っている治に対して語りかける。治はなんのためらいもなく言った。

「契約つてどんな事をするんだよ？」

治がそう言っていると、ハルスの目は大きく見開かれた。ハルスはすいと立ち上がると、治の股間を蹴り上げる。治が股間を抑えてバランスを崩して座りこむと、ハルスは治を見下ろして言った。

「そんな事、誰から聞いたの？」

「いや、だから、モルデス王に……。」

治がそう言っていると、ハルスは治の顔をふむ。その顔は赤くなっていたが、治は目を足で塞がれ気付かなかった。

「うそつけ。」

「いや、だから……。」

「いい？契約は禁句だからね。」

「説明してくれないと協力しないぞ！」

治が抗うと、ハルスは更に治の顔を強く踏む。

「契約のけを言ったら、な、殴るからね！立ちなさい！」

「は、はい……。」

ハルスの足が顔から外れると、治は顔をばつぱと払って立ち上がる。

「俺さ、明日また……。」

「知っているわ。遠足でしょ。あたしもあんたがいなくてせいせいしているわ。」

そう言い、ハルスは平然と再度ベットに座る。それを見下ろして、治は怒鳴る。

「何なんだよ、その態度！」

「あら？言つてなかったっけ？あんたはあたしの召し使いなのよ。」

「そんな！王子なのに差別するなんでえげつない・・・」

治がそう言うと、ハルスは治の頭を力強く殴る。

「契約、言ったわね？」

「そ、そんな、しかも濁点で、」

「だまらっしゃい。」

ハルスは更に治の頭を連打する。治は意識が遠のき、無の世界に入っていく感触を覚えた。

目の前で倒れた治を見て、ハルスは立ち上がる。その顔には、寂しさがこみあげていた。明日は、楽しくない遠足。とつてもつまらない遠足。そう思うと、ハルスの目からぼろぼろ涙が流れる。なんなんだろう、こんな孤独・・・。ハルスは再びベットに座る。生まれて初めて味わったような、とつもない孤独感。その理由は分かっている。でも・・・、あたしはウィルソン王子が好きだから・・・、そう自分に無理やりいい聞かせ、ハルスは少々のためらいは持ちつつも、気絶したままの治の胴体を何回も蹴る。しかし蹴る毎にさらにいやみが増えていくのを感じ、ある程度蹴ってからハルスは治の前に座りこむ。

モルデス王ラヴァリンは、残りを此度落とした城の守備に回し、50万の兵と大量の兵糧、そして大量の騎馬、弩を運搬した。そして、参謀として、オサム・トルヴァリング・ド・モルデス、他にも將軍を数十人引き連れた。ギルモは、留守番役として、城に残り、ザファロ將軍を見張っていた。

ウモライ国は、6つの城を持っていた。6つの城はペンタゴンの如く中央の1つの城を囲んでいる。しかしこの配置には欠点があり、中央の城をペンタゴン状に囲んでいる5つの城は、規模がとても小さく、住民もほとんどが城の外に住んでおり、ほぼ皆当然ものであった。その中で、モルデス軍が向かっているのは、5つの城（これからは便宜上砦と呼んだ方がいいかもしれない）のうち、一番手

薄なライアン砦であつた。

モルデス45世は、ライアンの砦を目の前にして、偵察の報告を待っていた。そのモルデス45世の後ろに、多数の兵が控えていた。治はモルデス45世の傍らに控えていた。

治は、まさか更に戦争に参加するなど思つてもいなかった。そして、自分の指揮が見破られる日、それも不安だったが・・・、自分が住んでいる平和な国日本国で、今まで命の危機を感じた事はなかった。この世界にいる限り自分は常に命の危機に直面している。それが一番の不安であつた。

夜になつてようやく偵察は歸つてきた。モルデス45世は、すでに陣を張り、テントの中に偵察をいれると、言つた。

「兵力は？」

偵察は答えた。

「1000程度と思われます。」

「よし、そこには治を入れるまでもないな、・・・タナトス將軍を呼べ。」

「は。」

偵察はテントから出、しばらくして一人の男性をテントに導いた。

タナトス將軍は、モルデス45世に一礼する。

「どのようなご用で？」

モルデス45世は、即答えた。

「ライアン城には1000足らずの兵がいるようだ。ここには万を入れるまでもない、明日の朝にでも5000の兵士を引き連れて鎮圧してまいれ。」

「はっ。」

タナトス將軍は再度一礼し、テントから出ていった。

第19話 第5節「逃げるメロス」2

その次の朝、タナトス將軍はモルデス45世の命令により、早朝5000の兵を引き連れ、ライアン砦に向かった。

その頃、ハルスは、ザディアムの城の自分の部屋で、ぼんやりと朝食を食べていた。ドアのノックの音がし、

「とうそ。」

と、ハルスが言うと、ドアが開き、執事とウイリエが現れた。

「何、じい。」

「はい、まだ食べてらっしゃっていたのですか、多ければ・・・」

「別に多くない。味わって食べていただけ。」

「は、はあ・・・。失礼しました。」

ハルスが食べるのがいつもより遅く、尋ねに来た健治は、恐縮極まった顔つきをして、部屋から出てドアを静かに閉める。

「何。」

ハルスは、ドアの脇の壁にもたれていたウイリエに言う。

「おはよう。」

ウイリエは、いつもの挨拶を返す。

「おはようってなによ。」

「そんなちびちび食べるなんで、ハルスらしくないわね。」

「味わって食べてただけ。」

「治が心配？」

ウイリエがそう言うと、ハルスは口の中の食べ物をぶつと吐き出す。その口を腕でふき、ハルスはウイリエに怒鳴る。

「そんなことない！」

「あーら、吐く位じゃあなつかないわよ？」

「そんなわけない！だって・・・。」

ハルスがそう言うと、ウイリエは調子に乗って言った。

「治がこの部屋に帰ってきて、まずハルスが好きにしてと言って、治がハルスにキスをするでしょ。」

ハルスの顔は真っ赤になった。

「それで、今夜は満月でしょ。治とハルスがベットに座って月を見ながら、治がハルスにプロポーズ・・・」

ハルスの顔は以前にもまして真っ赤になり、反逆の形相が出来始めた。

「そして、無事結婚よ。まあ、まずありえないと思うけど。」

ウイリエはハルスを揶揄するような口ぶりでそう言い、部屋をしばらく散策したのち、ベットに腰掛ける。

「こんな汚い部屋じゃあね。」

ウイリエがそう言うと、ハルスは言った。

「い、今からきれいにするもん・・・。」

「そう?」

ウイリエはくすつと笑った。

「な、何笑ってるの? あたしはね、魔法が使えなくて、」

「あんたの言い訳はいつもそれね。」

「言い訳じゃない!」

ハルスが怒鳴ったので、ウイリエはちょっとびっくりした仕草をして、立ち上がる。

「じゃあ、練習する?」

「何の?」

「魔法の。」

タナトス將軍の軍勢は、目の前にある1000足らずの兵士のいる砦に、力攻めを決行した。

5000の兵と1000の兵であり、仮に相手が精鋭であろうとも結果は最初から決まっている物であった。誰もがそう確信していた。

タナトスは、余裕の表情で、敵軍と闘っている前線の兵士達を眺

めていた。と、タナトスの目の前で、前線がじりじりこちらに押されている。

「何事だ？」

タナトスが兵士達に問いかける。一人の兵士が答えた。

「これ、1000じゃありません！」

「何？」

治は、陣の一番高い所からこの戦の様子を見ていた。やはり、あの物見はすりかえられたんだ、と治は思い、モルデス45世のいるテントに駆け寄る。

「失礼します！」

「何だ？」

モルデス45世は、何か書物を読んでいたらしく、その本を閉じてから治の方を向く。

「俺に1万の兵を預けてください。」

「何？1万？何の用途に使うのだ？」

「ライアン城の鎮圧です。」

「何？ライアン城には1000足らずの兵士がいて、その倍の5000の兵が鎮圧しているのだ。」

「だけれども、万事には万事を乗して、」

「ならぬ。」

モルデス45世は、権威をもった顔で言う。

「そこを何とかお願いします。」

治は土下座をした。それにはモルデス45世にも流石に事の異様さを感じたらしく、

「8000で我慢しなさい。」

と言った。治は立ちあがり何度も礼をすると、テントから出た。

敵兵士からの矢が多く飛び舞う。その数を見て、敵は千ではないと悟ったタナトスは、怒鳴る。

「引き上げだ、引けい！」

しかし前線の兵士達はそれを聞く前に槍を突かれた。

一本の矢が、タナトス將軍の騎馬の方へ向かう。

「うん？」

タナトスが気付く前に、その矢はタナトスの首に命中した。

第20話 第5節「逃げるメロス」3

イパバート池に、二人の影があつた。

一人は、ウイリエ。そして、もう一人はハルス。

二人は、たいぶ歩いた。ザディアムの城からは少し遠いのだが、イパバート池のほとりで、ハルスは自信なさげにイパバート池の水を眺め、ウイリエは周りの森や景色などを眺めていた。

この世界はちょうど夏に当たり、暑い時季であつた。しかしイパバート池の近くは涼しいのであつた。このあたりにいると、特に夏は落ち着けると言うのが、ハルスの言い分であつた。

「で、どうするの？」

ウイリエが、近くの木などを見まわしながら言う。

「魔法の第一歩、浮遊。」

ハルスは自信なさげな声で答える。

「足元の石で試せば。」

ウイリエが、ぼそりとつぶやくと、ハルスはこくりとうなづく。そして足元の、自らの握りこぶしほどはある石を見つけ、それに杖を構える。

「フライ」

念を込めた、大きく重い声であつた。しかしハルスがそう唱えるなり、イパバート池の水が全部逆流した滝の如く上に登り、そして再び空っぽになった大きなくぼみの中へ一斉に、滝の如く落ちた。その水しぶきをあびびしょぬれになったウイリエは、しばらくぼんやりとしていたが、つぶやいた。

「あんだ・・・魔法使いの器はないのでは・・・。」

「そ、そんなことないもん！」

「もしかして、惚れの魔法を使いたいでしょ？」

ウイリエがぼそりとつぶやくと、ハルスは首を一生懸命横に振る。

「そう、ならいいけど。」

ウイリエはぼそりとつぶやく。

それを、城からついて来て、木の影から覗いている者がいた。ギルモ將軍である。ギルモ將軍は、以前からモルデス45世に冷やかされており、反乱を考えていた。その折、この余りにも強大すぎるハルスの力を見て、にやりと笑った。

そうだ、これを使えば・・・、その前にハルスを捕まえておかないとな、とギルモは小さくつぶやき、ささっとその場から離れていった。

ギルモは、ザディアムの城に戻ると、牢屋に直行した。警吏の敬礼を受け、ギルモは牢屋の奥地に入ってしまった。岩の壁、小さな松明。ギルモは薄暗い地下の廊下から、ザファロの檻を見つける。ギルモは、座っているザファロに話しかける。

「なあ・・・。」

「何だ？」

ザファロは、愛想もない返事をした。まあ、当たり前か、とギルモはつぶやき、それから言った。

「なあ、一緒に反乱を起こさないか。」

「えっ？」

ザファロは、目を丸くする。

一方、イパバート池では、ハルスの必死の特訓が続いていた。しかし、結果はいつも水にかかるのであった。石が浮かんだと思えば、水が落ちた時の衝突風であつたり、地鳴りに反応していたりした。それでもハルスは負けずに呪文を唱えて石に魔法をかけていった。

「ねえ、また？」

ふああ、とあくびをしながら木にもたれてハルスの練習をぼんやりと見ているウイリエは、待ちきれなくなりハルスに声をかける。

「また！」

とつくに日は暮れかけており、空は橙になっていた。しかしハ

ルスは練習をやめる様子がない。

「先に帰っていい？」

ウイリエが言うが、ハルスは返事をしない。ただただ杖に念を込めているだけである。

「じゃ、先に帰るね、」

と、ウイリエはそう言い残し、イパバート池から去った。それを見計らったように、隙を見張っていたザファロとギルモは、石にいざ魔法をかけんと呪文を唱えんとしたハルスの背中から、まずザファロがハルスの口を塞ぎ、第二にギルモがハルスの頭を強く殴った。

「あつ……」

ハルスは気を失い、二人の掌中からするりと抜け、――・

「はっはっは、これで反乱の準備は終わった。」

ギルモは、ハルスを入れた檻を目の前にし、大きな笑い声を上げる。

「ああ、全くだございますな。」

ザファロも、機嫌がよく、ギルモの肩を叩く。

「はっはっは、いつかはモルデス45世を殺して、わしがモルデス王になってやる！」

「そして、わたしは側近ですな。」

ギルモとザファロは、男の約束と称して、お互いの小指を固く結ぶ。その小指を背景として、ザディアムの城のモルデスの旗は下ろされ、代わりに独立を宣言したギルモの旗がずるずると大空に舞った。

「はあ、はあ……」

ウイリエは、森の中を走っていった。もう、身も体もぼろぼろであったが、それでもモルデスの遠征軍の陣目かけて走っていった。ザディアムの城の旗が「ギルモ」になっているのに気付き、反乱、そしてハルスは人質になった――・、その旨を伝えに、走りに走っていった。

真っ黒な空に、満月が登っていた。

この昼、ライアンの砦では、治とライアン砦を守護する將軍の間で、必死の戦いが繰り広げられていた。

第20話 第5節「逃げるメロス」3（後書き）

反乱が起こってしまいましたね・・・^^；

とりあえず、この反乱の続きは第22話にして、

第21話では、治とライアン砦の將軍との戦いの様子を
伝えます。

・・・戦争はいやですか。はい。

第21話 第5節「逃げるメロス」4

タナトスの軍勢は、タナトス將軍の落馬により滑走を始めた。落馬したタナトスは、まだ息はあったのだが、敵兵達に踏まれ、泥まみれになり、一目ばつと地面を見ただけでは気付かないほど体中茶色になっていた。

滑走したタナトスの兵士達を見て、八千の兵を率いた治は、予感の的中を感じた。そして、馬に乗り前を向いたまま、言った。

「陣を守る。ここで踏み止まれ。」

「はっ、」

と、兵士達は小さく敬礼をすると、それぞれ槍を構える。

治の軍勢や陣は、ライアン城を目の前にした、小さな丘の上にあった。ライアン城の兵士達は、勢いに乗り丘を駆け上り陣に迫らんとする。

治は、その時を待っていた。また前を向いたまま、

「つつこめ!」

と、怒鳴る。治の馬以外は、全て槍を構えてライアン城の兵士達を上から襲う。上から槍を突き付けられ、中には槍を投げるものもいて、丘の斜面の土は血に染まった。

治は、それを見るのがつらくなっただが、口を手で押さえ、目をきゅつとつぶった。

空では、もうすでに日は傾き始めていた。

「起きてください、將軍様!」

いきなりこんな声がして、治ははつと目を覚ます。

「ここは・・・?」

治は辺りを見回す。どこぞやの建物の中のベットに寝かされていた。傍らには兵士が二人ほどいた。黄土色の土の壁を見て、治は兵士達に尋ねる。

「ライアン城の中でございます。」

「そうか……。」

「將軍様はあの後、あの丘の上で、馬にもたれたまま寝てしまっ
てございました。」

「そうか。」

治は恥ずかしそうに答える。はっと治は立ち上がり、兵士達に尋ね
る。

「今、何時？」

「何時……その言葉はどういう意味でございしますか？」

「はい？だから時間を……。」

「時間とは何でございましょう？」

「はい？」

いきなり兵士達にこのようなことを尋ねられ、治はびっくりした。

そして、同時に感じた。ここは自分が生きている世界とは違う、そ
ういった現実を押し付けられた感じだった。今までの事は全て夢と
して処理していた。しかし、もはや夢として処理する事は出来ない
かもしれない。治は自らのほつぺたを引っ張る。痛い。この世界に
来た事、全てが夢でないと悟った。治は、ほつぺたを引っ張った手
を下ろし、窓辺の方へ歩く。外では、もう真っ暗になり、満月がさ
していた。治は、涙を流した。孤独感を感じた。これは現実かもし
れないと今まで思っていたが、確信することをためらっていた。し
かし、これは現実であった。そう思うと、肩の力が抜けた。治は、
窓枠に額を当て、泣き出した。

「い、如何致しましたか？ジカンが將軍様にとってそんな大事に、」
いきなり後ろから兵士に話しかけられ、治ははっとして顔を上げる。
しかし、治は振り向きもせず、月を見たまま言った。

「しばらく、一人にしてくれる？」

「し、しかし、私達の次の指令は、」

「待機して下さい。」

「は、はあ……。」

二人の兵士達は恐縮きわまった顔をして、部屋のドアを閉め去る。ドアが閉まった音がすると、治は更に涙を流し、満月を見上げる。帰ろう。治は立ち上がった。帰ろう、家へ。いや、どうやって……。ふと、ケンジに「帰れない」と言われたことを思い出した。あれは現実なんだろう、現実——・・・

「將軍様？」

傍らから兵士に話しかけられ、治ははっと飛び起きる。部屋は明るい。白い。朝になったのだろう。

「あ、まだ安静にしてください、」

と、二人の兵士は治の胸を押さえる。治は兵士の顔を見る。昨日と同じ兵士である。

「あのまま窓際で寝てしまい、風邪を御引きになったようです。」

「はい……。」

言われてみれば頭がくらくらする。治はおでこを平手で触る。いつもよりあったかい。熱い。そう感じ、治は

「ありがとう。」

と言い、再び体を寝かせる。兵士がそつと毛布をかけてくれた。

ドアのノックがし、ドアが開く。二人の兵士が敬礼をし、二人の間からモルデス45世が姿を表した。

「おはよう。オサム、昨夜はご苦勞であつた。」

「はい……。」

治は寝たまま返事をする。その声に何か重さを感じたモルデス45世は、問う。

「寂しいか？」

「はい……。」

「そうか……、ならば、あの子をお前の妃に、」

「はい？」

治は顔を真っ赤にし、目を丸くする。この赤は絶対に風邪じゃない。ふとそういったことで頭が更にくらくらして意識が朦朧とした頃、

ドアのノックの音がし、ドアがゆっくりと開く。中から、一人の兵士がでて、敬礼をする。

「王様。」

「何だ？」

モルデス45世は、兵士に問う。

「一人の少女が、王様に火急の用でございます。」

「通せ。」

「はっ。」

兵士は礼をすると、部屋から出ていく。

第22話 第5節「逃げるメロス」5

数人の兵士に囲まれ、一人のみずばらしいなりをした少女が部屋に入る。その少女が顔を見上げるなり、モルデス45世は驚き、兵士達に、

「これ、下がらぬか。」

と言う。兵士達が下がると、少女はモルデス45世の方を見上げる。

「ウイリエ？」

モルデス45世は、ウイリエに尋ねる。

「なぜここに？」

「…………ザディアムの城が乗っ取られました。」

「何？」

「ギルモの旗が立っています。」

「何？」

その話を聞き、風邪であった治は急に飛び上り、ウイリエの前へ行こうとする。モルデス45世は治の胸を押さえ、

「これ、風邪がうつるぞ。」

と言う。

「ハルスのことでしょ。」

ウイリエはにっこりと、治に言う。治の顔は急に真っ赤になる。

「寝てます。」

治はベットへ戻り、急いで横になった。それを見てくすつと笑ったウイリエは、モルデス45世を見上げる。

「ハルスはどうした？」

モルデス45世がウイリエに尋ねると、ウイリエは重い声で答える。

「行方不明です。」

「何？」

治はこれを聞いていたが、一生懸命寝た振りをしていた。ウイリエは治の傍らに行くと、治を見下ろして立ったまま話しかける。

「治ったら？」

「意地でもいかねえよ、」

治は、真っ赤になった顔を毛布で隠して答えた。

「何でそんなにすねるのよ。」

「・・・・・・・・。」

「わかった、あんた、召喚される前に婚約者がいたんでしょ。」

「なぜそれを・・・・？」

「ハルスも同じような性格だから。」

「えっ？」

治は思わず毛布を除け、顔を出す。

「一度誓った事は、絶対に覆さないの。似てるわね。」

「・・・・・・・・。」

治はうつむいたまま起き上がる。

「俺さ・・・、ハルスのことが好きになってしまつて・・・。」

「そう、それくらいがいいわね。」

「でもさ・・・、ハルスの顔を見るたび檸檬・・・恋人の顔を思い出しちゃってさ、」

「分かる、その気持ち。別れてもいないのに新しい異性を素直に好きにはなれないでしょ。」

「・・・・・・・・。」

治は黙って窓の方を見る。ウィリエは、モルデス45世の方を振り向き、尋ねる。

「鎮圧はいつ？」

「治の病気が治ってからだ。」

と、モルデス45世は答え、それから治の横へ歩み寄る。

「治はここを守れ。ハルスは私直々取り返す。」

「え、でも・・・。」

「感情的になつては判断を誤る。」

「・・・・・・・・。」

治はうつむく。モルデス45世は、更に付け加える。

「心配している暇があったら、残り5つの城を全て落とせ。ここには10万ほど軍勢を残しておく。」
「・・・・・・・・。」

ハルスは、地下の牢屋の檻から、向かい合っている檻を眺める。しかしそこには誰もいなかった。ハルスは更に寂しい気持ちになり、窓も何も無い古びた檻の中で、一人壁にもたれ座り、手を顔にあわせて泣き始めた。そして、ハルスは、言ってしまった。絶対に口にするまいと誓ってきた言葉。

「助けて、治・・・・。」

しかしその後ハルスは、恨みなどではなく純粋な涙を流し始めた。ハルスは再度つぶやいた。

「治・・・・・・・・。」

次の日の朝、治の風邪は治った。それに付け加え、モルデス45世は40万ほどの兵を率いて、ザディアムの城の反乱の鎮圧に向かった。治は10万の軍勢で、ウモライの首都をペンタゴン状に囲んでいる残り4つの城（砦）を落とす事になった。

治率いる軍勢は、ペンタゴン状に囲んでいる5つの城を一周して、今夜までにライアンの城へ戻る事になった。そして、明日はウモライの首都を落とす。それは治の独断であった。しかし、治は一生懸命は考えなかった。ハルスのことかと思いがいっぱい、早くここを落としてハルスを助けたい、この手で、と治は思った。

治は的確な指揮で、夜とまでは言わず、夕方までに4つの城を全て落とし、ライアン砦に戻った。

治は、荒野を走っていた。もうすぐ夜になる、夕方で真っ赤になっている空の下で、荒野を走っていた。ふと、目の前の裂け目からうめき声がする。

「助けて・・・・。」

治はその裂け目の方へ駆け寄り、かすかに出ていた手を両手で一生懸命に引っ張る。

「治？治でしょ？」

裂け目から再び声がする。

「ハルス・・・、今助けてやるからな！」

治がそう叫んだと同時に、裂け目からすばと人が、治に引っ張られて出てきた。その少女は顔を上げた。

「ひっ!？」

治は真っ青になった。さっき治が引っ張った少女は、ハルスではなくウイリエであった。

「將軍様・・・？」

兵士達のこの声に反応して、治はベットからばつと起き上がる。

「夢か・・・。」

「將軍様・・・。」

一人の兵士が、治に言う。

「魔されてございます。何か悩みでも・・・。」

「たくさんの人を指揮する人は自分も自分で指揮するから、」

と、治は無理したような顔で言った。そして、窓から空を見上げる。外は薄暗く、治は言った。

「もうすぐ夜か・・・。」

「いいえ、朝でございます。」

後ろから兵士に言われ、治は体を石の如く固くする。それから急に兵士の方を振り向き、怒鳴った。

「何で起こさないんだよ!？」

「いくら起こしても起きないので・・・。」

「・・・支度だ。」

「既に出来ております。後は將軍様でございます。」

兵士にこう言われ、治は真っ赤になった。恥ずかしいのである。最高に恥ずかしいのである。

「わ、分かりました・・・。」
治は小さな声でそう言つと、ベットから降りた。

第23話 第5節「逃げるメロス」6

日の出も間近だった。

治は軍勢を引き連れ、5つの砦には兵を1万程ずつ残し、5万の兵で首都の総攻撃にかかった。

首都は、他の5つの砦とは違い城といえる城で、規模が大きく、一筋縄ではいかなそうであった。その城を目の前にして、治は少し離れて陣を作った。

ああいった頑固な城を落とすには、中から部隊に出てもらうに限る。しかしあちらもそれを分かっているらしく、なかなか出ようとはしなかった。そうしているうちに、太陽が真上まで来た。治は汗ばんだ頭を腕でふき、それからしばらく考えた。

「モルデスの王様が来た？」

一方、ザディアムの城で、ギルモは、見張りの兵士の報告を軽くあじらう。それからザファロ將軍の方を向く。

「なあ、モルデスの王様がここを落とすんだって。笑わせるなあ。」

「ああ。」

ザファロ將軍も、にやりとしてうなずいた。

「あ、相手は40万もの兵が、」

見張りは真っ青になっていた。しかし二人の將軍は平然と口を揃えた。

「なぜならな、こっちにはあの人がいるんだぜ？」

モルデス45世の軍勢は、ザディアムの城を取り囲み、陣を張った。

「要はあそこをどうやって落とすか……。」

モルデス45世は城を仰ぎ見、長考した。それから、こっくりとうなずいた。

「台車の準備を。」

モルデス45世が傍らの兵士に言うと、その兵士はこっくりとうなずき、兵士達のたむろしているほうへ走って行った。

「そうだ！これしかない！」

治は、ウモライの城を目の前にして、一つの作戦を思いついた。力攻め。それしかないのである。治は兵士達のたむろしているところへ行くと、怒鳴る。

「これからあの城を力攻めする！まず、はしごかけからだ！」

治が言うと、兵士達は整列をする。

「はしごも忘れずに・・・、行くよ！」

治が叫ぶと、兵士達は慌てて支度を整え、陣から出て行く。

ザディアムの城では、城郭で守備をしていた兵士達は狼狽していた。いきなり高い車が現れたかと思うと、その車の上に乗っている兵士達がこちらめかけて弓を放つのである。車の頂上は城郭の回廊と同じ位の高さであり、あつという間に兵士達に城郭を乗っ取られ、弓矢ではなく槍で戦う事になった。

この戦況を、ギルモとザファロは、城の頂上に登って見ていた。そして、二人の間には、無理やり杖を持たされたハルスが怯え顔で立っていた。

「さあ、魔法で爆発させるんだ。」

ギルモが、ボンとハルスの背中を叩く。

「ハルス、君の魔法が必要なんだよ、」

と、ザファロも同調する。

戦争に魔法の力が使われた事は、今まで一度もなかった。当然である。魔法の規模はその場に居合わせた数人の人々に対して効く物であり、一般的には対人に対して用いられる。戦争規模の、多くの人々を殺すには適していなかった。しかし、今、戦争に使うことが出来るほど大きな魔力を持った少女、ハルスは、杖を持つ右手が

震えているのを感じた。

「さあ、さつさと呪文を唱えるんだ。」

ギルモが刀を抜きハルスの首の方へ持ち、脅す。ハルスは怯え顔で、震えながら無理やり右手を上げた。杖がぼろっとこぼれそうだったので、杖をがしつと強く握った。しかし何をどうしても声帯が動かない。城の屋根に二つついている塔が高すぎるから？少なくとも原因はそれではない。自分の父の軍勢にとって不利なことを、今、強制されているのである。

「ん？あれは？」

台車に乗っているモルデス45世は、塔の頂上に3人の人がいるのに気付いた。周りの数人の護衛の兵士達も見上げる。

「あれは！」

モルデス45世は目を丸くする。なんと、その塔の頂上には、ハルスに刀を突きつけているギルモ、ギルモが監視しているはずのザファロ、そして、こちらの台車に杖を構えているハルスが立っていたのである。

第23話 第5節「逃げるメロス」6（後書き）

最近投稿の時間がほとんど出来ません。

ということとで、王子は予定より早めに終わります。
ごめんなさい。

第24話 第5節「逃げるメロス」7

治の軍勢は、ウモライ城の力攻めを開始した。兵士達ははしごに登り、城郭へ慎重に近づいていく。そして、城郭の回廊に着き、足を下ろす頃には、ある事に気付いた。

誰もいないのである。無人。自分の軍勢のほかには、誰もいないのである。千人ほどの兵士が城郭に降り立つと、上の余りの静けさに治が下から怒鳴る。

「やけに静かだよ？」

すると兵士の一人も上から大きな声でいう。

「誰もいません！」

「何！？」

治は慌ててはしごに登る。残りの兵士たちも続いてはしごをのぼる。それに気付いた治が、壁を見たまま叫ぶ。

「上にいる君達は城門の鍵を開ける！下の人たちは城門の前で待機！」

「は、」

と、治に続いた数千人の兵士達ははしごから降り、城門へ向かう。既に城郭に登った兵士達は、5人くらい残って他は全て城門の鍵を開けに去った。

城郭に登った治は、城郭から城下町を見下ろす。

「いかかいたします？」

治は、傍らで尋ねる兵士の言葉をろくに聞きもせず、城下町を見た。誰もいない。まさか、まさか……。

「してやられた！敵は……。」

治は空を見上げ、したんだ踏んだ。そうだったのか……。治には今、あの5つの砦がペンタゴン状に配置され、そしてそれぞれの砦の耐久が少ない理由が分かったような気がした。

「城門が開きました！」

一人の兵士が報告に上がる。その兵士に対し、治は言った。

「ここでは昼御飯は食べる？」

「はぁ・・・休めればそれで・・・。」

「休んだら最後だ・・・。」

その治の目には、焦りと脅威が映っていた。治は叫んだ。

「全員でライアン砦を総攻撃だ！休息はライアン砦を落としてからだ！」

「はぁ・・・？」

そこに居合わせた6人の兵士達は、皆驚いた。

「まさか・・・、ライアン砦は既に占領して、」

「そのまさかだよ・・・。」

「はぁ？」

兵士が、理由を教えて欲しい声で治に言うが、治は言った。

「とりあえず今すぐ出陣する！」

モルデス45世は、ザディウム城の塔を見上げていた。

塔の頂上には、ギルモ、ザファロがいた。そして、その真ん中に、こちらに杖を向けたハルス。

「さあ、早くするんだ。」

ギルモが刀をハルスの首に突きつけ、脅す。ハルスはぼろぼろ涙をこぼす。

「ごめん・・・！」

「ハルス、まさか・・・！」

モルデス45世は驚き、周りの兵士達に怒鳴る。

「退け、退け、退くんだ——！！！」

目をつぶり、限りあらんほどの声を張り上げるモルデス45世は、塔の方から大きな閃光が走るのを感じた。

ウモライの軍勢は、5つの砦にそれぞれ2万ずつの兵士を送り込み、これを全て鎮圧し、昼前に五方から一斉に中央の城へ向かう要

領であつた。

まとまって戦えば被害は多いが、少しずつ鎮圧して行けば何とか全滅できる。治はそう感じ、まずはライアンから向かった。5万と2万。治は力押しを以てこれを撃退し、ライアン砦を奪還し、休息を取ったのち、3時頃になると隣のアンデス砦へ総攻撃を開始した。そこを鎮圧し、砦の中へ踏み込んだ治と数百人の手勢は、派手に着飾った一人の男を見つける。

「取り押さえよ。」

治が言うと、10人程度の手勢がその男を捕まえる。

「あああ、あああ・・・、命だけは・・・。」

男が真つ青になって言うと、治は言った。

「君がウモライ国の王、だな？」

「ああ・・・。」

男は真つ青になっていた。

「悪いがあなたには、俺の大切な人のためにも・・・。」

「ああ、わかったよ、死ねば。」

「えっ？」

治がびつくりするが、それと同時に男は懷から短剣を取り出すと、自らの首を刺す。

「ああ・・・。」

治は真つ青になった。そして、叫んだ。

「ひ、人の話は最後まで聞けよ！」

その治の眼下で、ウモライ国王ナスオ19世は倒れた。その死体を目の前にし、治はつぶやく。

「こんな臆病な王がザディアム国を滅ぼした・・・。信じられないなあ・・・。」

「さようでございますね。」

傍らの兵士が一人、返事をする。治は首を振り、言った。

「供養して・・・。俺が本当に言いたかったことを言ったら、巫蠱ふこされるから、な・・・。」

「・・・・・・・・。」

傍らの兵士達は口をつぐみ、目を閉じた。それに応じ、治も黙って目を閉じた。

戦乱の世の中は、臆病をも生む。そして……。治は、やりきれなさを感じた。そして、その場にしゃがむ。はっと治の頭に、ハルスの顔が浮かぶ。浮かぶと同時に、治ははっと目を開ける。治は急に立ち上がると、後ろの兵士達の方を向き言う。

「モルデス45世の援軍に行く！」

第24話 第5節「逃げるメロス」7（後書き）

そろそろ名シーンが出て来るのですが、
いや、なにつて・・・治がハルスを助けるシーン。
名シーンです。

いいえ、いえいえいえいえいえいえいえ、
みんなは絶対迷シーンって言つのですから。

第25話 第6節「白馬の変態様」 1

治の軍勢は、ウモライの6つの城を全て鎮圧すると、一睡し、次の日の未明にザディウムへ向かった。

命令に沿っていない行動であり、本来なら慎むべきなのだが、治にはハルスのことばかりで、せめて様子だけでも、と、ウモライに4万の兵を置いて、1万の兵を引き連れてザディウムへ向かった。

治がザディウム付近の山に着いて、真っ先に見た物は、ザディウムの城郭を目の前にしてたくさんの兵士が倒れている風景であった。それは地獄絵巻のようであり、いやそれをはるかに越えるほどすごい風景なのかもしれない。治には基準が分からなかったのだが、これを一見するなりモルデス45世の軍勢が敗北したことがすぐに分かった。

「將軍様！」

一人の兵士が、治の立っている山の頂上付近の丘へ走ってくる。

「何？」

「モルデス45世の兵士と名乗る兵士がたくさん、来ております。」

「敗走兵？」

「おおむねそうでございます。」

「3人くらいここへ通して。事情を知りたい。」

「はっ。」

兵士が去り、まもなく4人の兵士が来る。

「連れて参りました。」

と言う兵士以外は、みな身も心もぼろぼろであった。治はその姿を見るなり、事のすさまじさを感じた。

「何があつた？」

治がいうと、兵士の一人は真っ青になって言った。

「は、は、ハルスが、魔法をお使いに……。」

「それがどうした？人を引っ張るだけじゃあそこまで……。」

治は、ウィリエが自らに使った魔法しか知らないのである。しかし兵士は治の予想に反して、更に真っ青になった。

「いえ、爆発でございます。」

「はい？」

「ハルスが、ギルモに脅されて、こちらへ杖を向けたのでございます。」

「ギルモ……反乱の首謀者でしたっけ？」

「さようでございます。」

「そうか……、君達は何人くらい？」

「二千足らずでございます。」

「そんなに大きいのか。」

「いえ、四方に散っていますので。」

「そうか……、して王様は？」

「モルデス45世様は行方知れずにございますが……。」

「そうか……。」

治は改めてザディアムの城を眺める。そして同時に憤りも感じた。自分がせっかく落とした城を、もう一度落とさねばならないなんて……。人の欲は、どこまで追い求めるのか。底なし沼の如く、底を突き破り、自然が新たに作った底をも突き破り、更に新しく出来た底をも破る鯉のようであった。

窒息。治はこの単語を思いついた。鯉は深入りしすぎで、いつかは窒息して死ぬ。そう、深入りするほど酸素が少なくなる。そして、水圧も――……。

「君達はここで残りなさい。俺は手持ちの1万の兵で攻撃するよ。」
治が言くと、敗走兵は真っ青になった。

「そんな無茶を……、ただでさえ40万もの兵を散らせた魔法ですよ？」

「時と状況によって、結果は大きく変わる。」

「で、でも、あれは例外でございます・・・！」

「・・・・・・でも、あの城の中には、俺の大切な人がいるんだ・・・。」

「はい？」

兵士はひどく躊躇した。

治にとってハルスは、先ほどまでは塵に等しい女だと思っていたが、この状況に置かれると、顔を見てもいないのにハルスのかわいさに惹かれる。そしてあの気の強い性格。怒った時のかわいい顔。寝顔。それらの記憶が、治にひそかな愛情を募らせていたのである。

「將軍様・・・。」

やっとのことで兵士が口を開いた。

「無謀でございます。」

「いや——・・・、望みはある。」

「このような状況で望みなんて、無茶ですよ！」

「とりあえず、君達はここで休憩しなさい。俺の軍勢は攻撃にかか
る。」

「は、はあ・・・。」

兵士は更に躊躇し、後ろへ下がる。

治は一万の兵士を引き連れて、ザディアムの城へ向かった。彼らの姿を、敗走した兵士達は、少しも休んだ気がせず、ただただ心配しながら、山の頂上付近の丘へみんな集まり、眺めていた。

一方、ザディアムの城の中では、兵士達が酒盛りをしていた。ザファロ將軍も、ギルモ將軍も、酒に酔っていた。あの40万もの兵士をたつたの10万で壊滅寸前まで追い込んだことが、彼らに優越感を持たせていたのである。酔いが回り、更に、自分達は無敵だとも錯覚するようになって来た。

これからここが修羅場となる事は夢にも思わずに——・・・

第25話 第6節「白馬の変態様」1（後書き）

言い忘れていましたが、

この小説の中の城は、

三国志や史記とかに出てくるような、

中国の城がモデルです。

つまり、城下町は城郭の中に入っている
な感じです。

もち城郭の外に民家があったりしますw

第26話 第6節「白馬の変態様」2

治率いる1万の騎馬兵は、治の陣中の指示で、なるべく音を立てずに城へ近づいた。しかしこれは杞憂であり、城中は酒盛りの歓声しか聞こえないのであったのだが、治はそれを想定せず、兵士達に慎重な行動を呼びかけた。

治は、城へ向かう道中、ふと今の自分を変に思った。戦争が嫌いだけれとやってみたい自分が、兵士に対してなれなれしい態度をとっている。將軍らしき態度に近づいている。なぜだろうか。治の頭に一つの疑問がかすったが、今はあの人のことを考えるべき局である。治は気を引き締め、目前に近づく城を見る。

城は遠くからみると小さかったが、1^{きくらめえとる}軒くらい距離を置くと大きく見えた。城門は鉄で、壊すべく叩けば大きな音がする。治は少し考え、それから、はしごを使って城郭に登る事にした。しかしそれを一部の兵士達に話すと、兵士達は小さな声で反論した。騎馬をどこに置くか、というのが最大の理由である。しょうがなく、騎馬を一度城門の前においておいて、中を錯乱してから城門を開けて騎馬に乗って改めてなだれこむ事にした。

薄暗い牢の小さな小窓から、外ですっかり宴会気分の兵士達を眺めているハルスは、なぜこの期に及んで治のことしか頭にない自分に憤りを感じた。自分は、ウィルソンが好きなはずである。ウィルソン王子が好きなはずである。しかし現に、治が召喚された。その時の悔しさと今の悔しさとは、全くの別物である事に気付いた。しかしハルスはなおも抗った。しかしそれも無駄で、昨夜の夢にも治が出てきたのである。夢の中で治は、好きと言ってくれた。そんなの嘘よ、絶対嘘よ。ハルスが反論するも、治の手はハルスの体にまきついていく。我慢が出来ずハルスも治の体を、というところで目が覚めた。空しい昨夜の出来事に、ハルスは忘れんとするが、治

のおの字が消えない。それで今に至る。

「どうだ、牢屋の暮らしは。」

酒に酔った真つ赤な顔で、ザファロが檻から小窓を眺めているハルスに、後ろから声をかける。ハルスは振り向きもせず返事をする。

「快適よ。」

「じゃあもつとひどい所に送ろうかな？」

「嫌。」

ザファロは、酔いの勢いで言った。

「俺はな、ウィルソンの首を取った、すごい男なんだぞ！なあ、結婚するなら俺だよな？」

ザファロのこの言葉を聞き、ハルスはビクツとした。そしてばつと後ろを見る。酔っているのか、ザファロは檻の鍵を開け、中に入っ

た。

「なあ、」

と、ザファロがハルスの体に絡みつく。

「胸触らせよ。」

明らかに性的な要求である。ウィルソン王子以外の人には許さない。そう思いつつも、ハルスは更に治とキスしてしまったことを思い出し、更なる憤りを感じる。

「なあ、」

ザファロの要求に、ハルスは一案を思いついた。

「杖を返してくれるなら。」

とうせ相手は酔っている。檻を気軽に開けたことからそのことが伺える。

「どうそ〜。」

あっさりだった。ザファロは、脇から杖を取り出し、酔ったおじさん顔で杖を何の遅延もなく、ハルスに渡してしまったのである。それを受け取ったハルスは、優しい声で言った。

「ありがとう。」

「じゃあ、お礼に触らせよ？」

「その前にね・・・。」

ハルスは杖を握り、呪文を唱え始めた。

「フライ」

浮遊魔法であるが、ここでは爆発と言ってもよかった。小さな建物ならすぐに廃墟と化すほどの爆発が起こり、ハルスのいる牢の部屋から上3階が望めるほど、爆発は天井をつきぬけ、そして、ザファ口を檻にぶつけ、酔いを醒ましたのである。

酔いの覚めたザファ口は、顔を真っ青にして檻から出ようとするが、ハルスが後ろから優しく声をかける。

「ねえ、出たら殺すわよ。」

ザファ口の酔いの醒めた頃、城郭付近の兵士達の酔いも醒めていた。城郭に登りきった治の軍勢が、兵士達にたくさんの弓をお見舞いしたのである。ギルモ軍の兵士達は狼狽し、混乱し、その隙に治の兵士達は城郭から城内へ降り、まっすぐ城門の方へ向かうと、城門を開けてその向こうにいる馬に飛び乗り、改めて城になだれこんだ。

第26話 第6節「白馬の変態様」2（後書き）

治の疑問の答えは、第7節あたりで答えを……。これが終わったらしばらく戦争シーンはなしです。

第27話 第6節「白馬の変態様」3

ハルスとザファロは、対峙していた。

「言っておくが、私は剣術に長けているのでね。」

ザファロが、少し怯み顔をして言った。しかしハルスは一蹴する。

「あんた、ウイルソン王子を殺したと言ってたね？」

「ああ、それが何か？」

「そのウイルソン王子は、あたしの婚約者だった……。」

「えっ!？」

それを聞き、ザファロは後悔した。ハルスは更に続ける。

「あんたを殺したら、仇撃ちが出来るのよ!」

そう強く言いながらも、自分の感情が猛っていない事に気付いたハルスは、声の大きさをそれを紛らす。

「とりあえず、あんたを今ここで殺す!」

「どうやって?」

ザファロは哂笑した。

「大きな魔法を使った直後はそれほど強い魔法は使えないはず。」

「それはなぜ?」

ハルスは問いかける。

「精神を消費するからさ。」

ザファロは答えた。

「そう、」

とハルスは再び一蹴する。

「それじゃ、あたしがちょっと休まないと同じような爆発が起きないって?」

「そうだ。」

「言っておくけれど、あたしがさっき言った呪文は何だと思っ?」

「さあ……?直接的に爆発を誘うような呪文など……。」

考え出したザファロに、ハルスは杖を構え、相手が嫌でも呪文がは

つきり聞き取れるよう、強く言い放った。

「フライ」

再度その場には大きな閃光が走り、今度は牢屋の建物の土台が崩れたとみえて、建物は北と南に大きく二つに割れた。ハルスとザファ口のいるその場所は、露天の場と化した。

「ああ、ああ・・・。」

ザファ口は顔を真っ青にする。なるほど、一般的な魔法では精神は殆ど消費しない。況して失敗して爆発が起きるのを利用していただ・・・。

「フライの魔法で、こ、こんな・・・。」

「失敗もいろんな方面から見ると、決して失敗じゃないのね。」

ハルスがそう言い、ザファ口の方へ一歩、一歩、歩み寄る。

「ひい、近寄るな！」

ザファ口は退る。

「逃げたら殺す。逃げなくても殺す。」

そう言いながら近寄ってきているハルスの顔は、目の前にあるものを全てを打擲殺しせんとする勢いで、後ろに大きな髑髏どくろが見えた。

進むに非ず、逃げるも非ず。ザファ口は、ついにその場にへたりこんだ。

この爆発を見ていたのは、ハルスとザファ口の二人のみではなかった。建物で勤しんでいた人々、そして牢に繋がれていた人々も、その殆どが建物から這い出た。

そして、城を荒らしていた治の軍勢の兵士達も、その場へ集まった。1万を超える人々が取り巻いている大きな円の中には、仰向けになったザファ口の腹に足を乗せているハルスがいた。

「ハルス？」

治は呆然として、少女にこうとしか声をかけられなかった。ハルスも、治がここを見ているのに気付कि、頬を赤らめて怒鳴る。

「帰れ。」

それから治に杖を構える。

「あ、謝りなよ・・・、」

真っ青になっているザファロは、あるだけの声を絞り出して治に言う。

「待て、待て！」

人々をかき分け、一人の男が急いでこちらへ走ってきた。

「ん？」

円の中にいるハルスがそれに気付くのが、少々遅すぎた。ハルスがその男の存在を認めるなり、男がさっとハルスの背中に廻り、首にナイフの刃を近づける。

「あんたは・・・？」

治がその男に尋ねる。

「ギルモだよ、」

その男は、諦めを含めた笑いで答える。

「反乱は俺の負けだ。認めるよ。でもな・・・、」

と、ギルモは、首にナイフをつき付けられ、機はしで杖を落とし、真っ青になったハルスの顔を、円に囲んでいる人々の全員に見せんと、ハルスの体を背中から抱いて位置はそのままに足を回して一回りし、治の目の前で止まった。

「治とかいったな？」

ギルモは、蒼白な顔で、治に言う。

「ああ。」

治は答える。

「お前のヒロインを殺して、俺も死ぬ！」

ギルモは、朗らかに笑いながらこう言い放った。兵士達は、ざわめいた。治は、唇を噛み、そしてギルモに怒鳴った。

「ハルスは関係ない！」

第27話 第6節「白馬の変態様」3（後書き）

まだ物語の途中なのに評価が2つも来ました。
感想じゃなくて評価なんです。

物語の途中なのに評価なんです。

これは絶対

「今まで我慢して読んでいたけれど

これ以上は我慢できないよ。

吐き気がする。トラウマ？アレルギー？

これ以上読むなと親に言われたし・・・。

評価？うーむ・・・とりあえず適当に書いてごまかそう」

とか考えているに決まっています。

小説連載中の評価ができないようにして欲しいのですが
絶対無理でしょうね。

管理者さんは多忙で迷惑がかかりますし。

感想でお願いします。というか命令みたいでごめんなさい。

第28話 第6節「白馬の変態様」4

「ハルスを放せ！」

治は、ギルモに対して怒鳴り、一步踏み込む。

「おっと、それ以上近寄ったら、お前のヒロインの命はないよ？」
ギルモが脅す。

「これはただの脅しじゃない、わかったか……。」

「ギルモ！ハルスは関係ない！」

「まーた、そんなことを言っておるのかね？」

ギルモは、治を翻弄するように言った。

「ハルス……。」

治がハルスの名を言うと、ハルスは言った。

「あんたが代わりに人質になって。」

「はい？」

治は真つ白になった。

「あ、あのさ、この場にふさわしい言葉じゃ……。」

「あたしが思っていることをそのまま言ったらいけないの？」

「あ、のさ……。」

「お父さんからよく言われたの。嘘は言ってはいけないって。」

「時と場合によってすべきことは違う！」

「雑談はそこまでにしてくれるかな？」

非情な声で、ギルモは治に言う。治はこれからどうすればいいのかという恐怖を覚えた。

「ん……？」

一人の男、タナトスは、目を覚ました。

「ここは……？」

タナトスは白いベットに寝ていた。ここは木でできた部屋。横には窓があり、部屋の中央には木のテーブルがあり、木のいすがあり、

ドアも木でできていた。

タナトスは、傍らを見て誰もいないのを確認すると、起き上がるとし、背中に力を入れるが、

「ぐっ……。」

背中を起こそうとすると、体中に激痛が走る。

「ぐ、ぐっ……。」

タナトスがそうやっているのと、ドアが静かに開く。タナトスは、そのドアから入った人に気づいた。

「気づきましたか？」

その人は女性だった。

「は、はぁ……。」

びっくりし、タナトスは問いかける。

「あなたは……？」

「わたし？わたしは……。」

少女がそう云おうとすると……

バサッ バサッ

突然窓から一匹の大きな鳥が部屋に入る。その鳥が部屋いっぱい羽振りをするものだから、黒い羽がたくさん部屋中に散らされる。

「こら！フロート、やめなさい！」

少女は、立ち上がりその鳥に怒鳴る。鳥が鎮まったところ、タナトスは再び少女に声をかける。

「あの……。」

しかし少女はいらたった表情をしていた。

「声を出すと傷が痛むわよ？」

一方、山の奥でも一人の男を背負った二人の男が、川のほとりで水を飲み休んでいた。木にもたれてっていると、二人の男は、一人の男の目がかすかに動いているのに気づいた。

「王様？」

兵士は、寝込んでいるモルデス45世に声をかける。眼がゆっくり

と開き、モルデス45世はゆつくりと腰を起こす。

「お気づきになりましたか。」

兵士がモルデス45世に声をかける。

「ここは？」

「近くの山です。」

「そうか・・・、あの戦争に負けたんだっとな・・・。」

モルデス45世は、そう言うと空を見た。

「鳥は自由だな・・・、ああいった広い空を飛べて。」

「・・・・・・・・。」

「空に果てなんでない。空に戦争なんでない。空に障害なんでない。だから、羽さえあればどこまでも飛べる。」

「・・・・・・・・。」

「ああ、あの碧空は・・・、何で平和なんだろう・・・。」

「・・・・・・・・。」

兵士たちは口をつぐんでしまった。

あれから10分ほど経過した。治はギルモに土下座をしていた。

「お願いだ、ハルスを返してくれ！」

「だめだ。返したら俺を捕まえるつもりなんだろう。」

「そんなことは決してしない！」

「だめなものはだめだ！」

治は涙顔で顔を上げる。そしてぐつと唇を噛み、ギルモの後ろにいる兵士をじつと見る。その兵士は治の意思に気づいたようで、忍び足でギルモに近づく。

治が唇をかんだ意味を単なる悔しさと見たギルモは、さらに揶揄してやろうと、ギルモは口について言った。

「お前はハルスが好きなくせに、いさとなると何もできないんだな。」

それを聞き、治はあわてて立ち上がる。

「違う！」

「じゃあ何だつてんだよ。」

「お、お、俺は・・・、ハルスが好きなんで・・・。」

治の顔は真っ赤になっていた。

「何もできない男っているんだなあ、この世には。」

それを聞き、治は逆上した。

「おっと、俺に一步でも近づいたら、この子は死ぬよ?」

「その前に、卑怯な手段で勝つなら死んだほうがマジだ!」

「はっはっは、負け惜しみかね?」

治は一呼吸置いて、さらに強い声で怒鳴る。

「それはお前に言っているんだよ!」

と同時に、後ろから忍び寄っていた一人の兵士が、ギルモの肩をつかむ。びっくりしたギルモがナイフを持つ手を緩めると、ハルスはその手をがぶりとかむ。

「痛た!」

ギルモが手を離すと同時にハルスは逃げ、治のほうへ駆け寄ると、股間を蹴り上げる。

「余計なことはしないでくれる?」

ハルスは治の腹を踏み、片方のひざにひじを乗せて、治を見下ろして言った。

「ギルモを捕獲しました。」

一人の兵士が傍らに寄るが、治はハルスの誅殺を恐れ、返事する由もなかった。

第28話 第6節「白馬の変態様」4（後書き）

変漢ミスコンテストに、

「内容を知りたい王子には十分に注意」
があつたりします。

「内容を知り対応時には十分に注意」
の間違いなのですが、

ハルスにこの一文を言ったら、

どうなるのでしょうか・・・？

第29話 第6節「白馬の変態様」5

治の母、零時^{れいじしずえ}静江は、弁護士と共に記者会見をしていた。
「誰にも気づかれず、北朝鮮に拉致された人も多いと思います。治もその一人だと思います。」

静江が泣きながら強い声で言い、記者会見は始まった。

「証言がないという理由で拉致被害者指定する日本政府の度胸……誰にも気づかれずに拉致された可能性が極めて大きいです。」
集まっている記者の一人が、静江に尋ねる。

「なぜ北朝鮮に拉致されたと思われたのですか？」

「治のいなくなった次の日、私の隣に住んでいる韓国国籍の人が引っ越していきました。」

まったくの偶然である。しかもこの人は警察がいくら搜索しても見つからなかった。それもそうである。母は名前を覚えていなかったのだ。しかしこの場でこのようなことを言うことは、なんとなくリアリティーがある。

「治は子供の時から活発な子供でした。」

静江は涙ながらに、話し始めた。

「おじいちゃんが死んだときも、治は泣いていました。友達ともいっぱい遊びました。隠れて岡田さんと付き合っていました。中学校ではよくもでる方でした。かわいいところがあれば、反抗的なところもしばしばありました。そんな治を奪うなんて……。」

そう言うなり、静江は手を顔に合わせ、わーっと泣き出した。その背中を、静江の夫、誉^{たかお}帯が撫でる。

この二人は、日本政府に対し、治を拉致して医者にする訴訟を起こし、敗訴していたのである。

「しかし……、また第二審があります。」

母は、涙ながらに続けた。

「絶対……、第二審で治を拉致して医者にしてみせます。」

母は強い声でそう言った。

「まさか付き合っていたとはね。」

学校の教室で、岡田檸檬は五十嵐由美に声をかけられていた。檸檬は気まずそうに答えた。

「う、うん……。」

「あら、別にいいんじゃない？」

と、由美は傍らの長谷川玲子をひじで突き、同意を求める。玲子は無言でうなずく。

この教室は、治がいなくなってから、毎日のようにあつた朝の爆発騒ぎが起こらなくなっていたのである。この引き金が出たからである。

「俺さ……。」

前田渉が檸檬に言う。

「大きくなったらさ、一緒に北朝鮮に行って探さないか？」

渉が言うと、檸檬は涙してうなずく。

檸檬は、治がいなくなった瞬間をみんなに話すことを躊躇していた。

あの時、檸檬が窓から振り向いて、治の方を見ようとした。治がない。辺りを見回してもいない。トイレと思って待って見たが、1時間は軽く過ぎた。不安に思った檸檬は、携帯電話で母に連絡するも未着の返事。その日の夜になっても帰ってこなかったため、母と共に搜索願を警察に出したのである。

つまり、ほんの5秒で、如何にして治を拉致して視界から消えることができたのか説明できず、言うことを躊躇していた。

みんなは、治は北朝鮮に拉致されたばかり思っていた。まさか異世界が存在するなどは思いもせずに――・・

治が召喚されてから、1ヶ月が過ぎた。その後、ギルモとザファ

口は斬首、そしてタナトスは行方不明、事実上の戦死となった。いずれにしろ、いい結果とは言えない。

次の戦争の作戦を練るために、モルデス45世を始め10人ほどの将軍が、一室に集まっていた。

「まず、次の戦争はどこにした方がよいか？」

モルデス45世が言うと、治は即手を上げる。

「王様。」

「何だ？」

「今度の戦いで兵士たちはすっかり疲れております。士気を回復してから次の戦いに望むべきかと思えます。」

「君たちは？」

モルデス45世が他の将軍に尋ねると、皆言った。

「私も同調します。」

それを聞き、モルデス45世は治に尋ねる。

「次の戦いはいつころがいいか？」

「はい、1週間は必要かと思われませんが、個人的には2週間を推奨します。」

「なぜ2週間？」

「兵士たちはハルスの魔法にすっかり戦おのっています。兵士たちのやる気を取り戻させるのにも時間がかかると思われます。」

「そうか・・・、ならば2週間後に再び議論を始める。解散。」

モルデス45世がそう言うと、将軍たちは一斉に立ち上がり、礼をすると部屋から出て行った。

「待て、治。」

モルデス45世が治を呼び止める。

「何でございましょうか？」

治が尋ねると、モルデス45世は、二人しかいない部屋で言った。

「2週間にはもうひとつ意味があると見た。」

「はい、それは何でしょうか？」

「発展か？」

「おつしやるとおりでございます。」

治はモルデス45世に一礼した。

「俺の世界で、昔、管仲という人がいました。その人は、まずは与えることと言いました。」

「与える？」

「まずは民の望むものを与え、民の望まぬことを廃します。」

「そうか・・・、しかし2週間では足りないのでは？」

「2週間で攻撃力を培い、そして、一刻も早く、敵国と隣接しない都市を増やす努力が必要なのです。」

「そうか、あい分かった。下がってよい。」

「は、」

と治は一礼して部屋から出る。

「民の望むものを与え、民の望まぬことを廃す・・・。」

モルデス45世は、一人して部屋で、さっき治の言ったことを反復して言う。

第29話 第6節「白馬の変態様」5（後書き）

次から第7節です。

衝撃の恋の戦争がスタートします。予定です。はい。

ハルスのライバルは・・・、

もうすでにこの小説に登場しています。

さあ、誰でしょう・・・？

まあ、こういうことはみんな興味ないと思いますので。

第30話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」 1

その少女は、端麗であつた。タナトスを車椅子に座らせ、ザディ
アム城の方へ向かつていた。

「ごめんなさいね、足までは治せなくて。」

少女がすまなそうに言うと、タナトスはそれを宥める。

「いいよ、死ななかつたことだけでも。」

それから、タナトスは、頬を赤らめて何か言う。

「そ、そのさ・・・、」

「妻はいます？」

あつさり少女にこう言われ、タナトスは言いにくくなつてきた。

「あたしね、今までにも何回も、助けてきた人から結婚を迫られて
きました。」

「何回もつて・・・、何歳なんだ？」

「18歳・・・。」

「18年にしては短すぎないか？」

「ううん・・・、あたし捨て子だから、旅していました。」

「旅・・・、あの鳥に乗つて？」

「はい・・・。」

少女はそう言うと、孤独な表情を見せた。それを見てタナトスは、
自分まで悲しくなつてきた。

「お母さんとお父さんを探して・・・。」

これがさらに空気を重くした。タナトスはこの雰囲気を除けんと、
話題を転換した。

「あのさ、今まで恋したことはないの？」

「・・・・・・・・ありません。」

「そうか・・・。」

さらに空気が重くなり、タナトスは再び話題を転換する。

「もうすぐ城だよ？」

タナトスがそう言うが、少女は聞いていなかったらしく、少女の傍らを飛んでいるフロートの頭をなでていた。

「そつえばさ、名前を聞くのがまただったんだけと？」

「名前……？」

少女は困窮の表情を見せた。

「親がいなくてどうやって名前を決めるのですか？」

「……、自分で名前を決めたら？」

「自分で……。」

少女は下をうつむいた。さらに空気が重くなり、タナトスは耐え切れなくなった。

「あのさ、もうすぐ城だよ！」

「……。」

返事もなく、タナトスはこれ以上話をする気がなくなった。

モルデス45世の書斎に衛兵が入ってきたのは、昼ごはんを食べ終わったばかりの時であった。

「何だ？」

モルデス45世は、書斎の机の向かいに立っている衛兵に尋ねる。

「タナトス將軍が帰って来ました。」

「何？タナトス將軍は死んだはず……。」

「それが、少女に助けられて一命を取り留めたようです。」

「とりあえず、ここに通せ。」

「はっ。」

部屋から出て行く衛兵とすれ違いに、治が書斎に入ってくる。

「何だ？」

モルデス45世が尋ねると、治は答える。

「少し世間話でもしませんか？」

「ははは……、まだハルスに黽られたな。」

「……。」

治は少し気まずそうな顔をした。

「世間話なら、私でなくても・・・。」

モルデス45世がそこまで言いかけた時、ドアのノックがする。

「治、そこにかけてなさい。入れ。」

モルデス45世は椅子から立ち上がる。ドアが開き、中から一人の衛兵と一人の少女と、車椅子に乗ってきたタナトス将軍が入ってきた。

「タナトス将軍か？死んだはずでは・・・。」

「それが、この少女に助けられて、命を取り留めました。」

最初から何でも知っていると気持ち悪がられるので、無知の姿勢で尋ねる。モルデス45世がいつもする話し方であった。

「この少女が？」

モルデス45世は、タナトスの車椅子を押している少女を見る。

「名前は何？」

「ありません。」

「名前がない？なぜ？」

「・・・あたしは、捨て子です。」

「何？」

「生まれてすぐに捨てられました。」

「何？それでは生きられないはずでは・・・。」

「はい、おばあさんに拾われました。その後、物心がついてから母と父を探す旅に出ました。」

「旅か・・・、大変そうだな。そこにかけてよ。」

「はい。」

と、少女は治の隣の椅子に座る。それを見て、モルデス45世も座る。

「衛兵は下がれ。」

「はっ。」

と、衛兵が部屋から出ると、モルデス45世はさらに少女に問いかける。

「親について力にはなれないかもしれないか。」

「はい・・・、あたし、お母さんとお父さんの他にも、調べている物があります。」

「何だ？」

モルデス45世がそう言うと、少女は、

「あたしがおばあさんに拾われた時に握っていたものだそうです、」
と、脇から一本の杖を取り出した。それを見て、治、モルデス45世、タナトス、そこに居合わせた3人は眼を丸くした。

「王族!？」

モルデス45世は思わず立ち上がる。

「君はこの国の王族か!？」

「王族つて・・・なぜ王様があたしを捨てるのですか？」

「・・・・・・・・。」

「それから、この棒は何か知っていますか？」

「い、いや・・・・・・・・。」

「そうですか・・・・・・・・。」

少女は孤独な顔をして、下をうつむく。モルデス45世は、杖を見ながらゆっくり座り、しばらく考えてから、ひとつの提案をした。

「な、なあ・・・・・・・・、孤独な身では可哀想だろう。しばらくの間、ここに住まないか？」

「いえ・・・・・・・・。」

「君には調べたいことがあるかもしれないが、こっちにも調べなければいけないことができた。」

「・・・・・・・・後で来ます。」

「君・・・・、人生というのは一期一会なんだよ。一度会っても、次にまだ会えるとは限らない。たとえ両方が望んでいてもね。」
「・・・・・・・・。」

「返事は？」

「2週間で結構ですか？」

「2週間・・・・・・・・。」

その数字が、昨日挙げた数字と一致していて、モルデス45世は

しろつと治の方を見る。治は黙って首を振る。それを見て、モルデス45世は言った。

「少し短いが、よかろう。」

第31話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」2

「治、この子を部屋へ案内しなさい。」

タナトスが退席し、モルデス45世は治に言った。

「部屋つて、どこの部屋ですか？」

「ハルスの部屋だ。」

「……………」

「そうか、まだ喧嘩したんだな。」

モルデス45世は微笑する。

「い、いや、送るだけでさつと身を引けば……、」

「ふっ……、任せよう。」

モルデス45世にこう言われ、治は「失礼します。」と頭を下げた後、傍らの少女に話しかける。

「行こう。」

「は、はい……。」

その少女は下を向きながら云った。

「じゃ……………」

「は、はい。」

ハルスの部屋へ向かう廊下で、治は少女に尋ねた。

「自分の名前は自分でつけないの？」

「あ、あの、名前は他の人がつけるものだと思います。」

「名前……………」

反復し、治は上を振り向く。しばし考えた後、急に少女の方を向いて云う。

「俺が決めていい？」

治が言うと、少女は気弱そうにこっくりとうなずく。

「誰でもいいです。名前がないといろいろ不便です。」

それを聞いて、治は嫌われたような気がした。しかしそれを振り切

り、しばらく考えてから少女に云った。

「ヴィーナス……。」

「ヴィーナス？」

「い、いや、君の名前は……。」

「何でもいい。クスと呼んでもいいです。」

その少女の瞳の奥には、大きな孤独感が見えた。治はその少女に対し、何も云えなくなった。しかし気を振り絞り、云った。

「き、君は今からヴィーナス、だから……？いい？」

よく考えもせずに決めた名前なのだが、名前なら何でもいいという孤独に満ちた顔をして、少女はこっくりとうなずく。

「な、なあ、今まで孤独なことってあったの？」

「孤独……。」

少女は治が尋ねると、ぼうつと上を振り向く。

「確かに……。あたしの人生は孤独だったかもしれない。」

そう云うと、ヴィーナスは瞳からぼろりと、涙を流した。その涙を見て、治はヴィーナスの手をぎゅっと握り締めた。

「誰、この人。」

完全にいきり立っていたハルスは、部屋に入ってきた治の後ろに少女が付き添っていたのに気づき、怒鳴る。

「あ、あのさ、」

治が云うが、ハルスは罵詈雑言を始める。

「何なの、この人は。」

「タナトスを助けてくれた」

「連れてくるだけならそれで十分じゃない！」

「あ、いや、それがさ、」

「何よ。」

「杖を持っでいて。」

「えっ？」

ハルスは驚き、立ったままの治の顔を足蹴にして治を倒すと、後ろ

にいたヴィーナスに声をかける。

「名前は？」

「あ、あの、ヴィーナスと云います……。」「

「ヴィーナス……。いい名前じゃないの。」「

「あ、あの、そ、それは……。」「

そう云い、ヴィーナスはハルスの顔を見上げる。笑顔だった。ハルスはにつこりと、自分を見ていた。しかし問題はその笑顔である。あまりにもかわいすぎて、見るだけで頭がくらつとしてくる。

「ねえ？」

ハルスにさらに声をかけられ、ヴィーナスは何で返せばいいのか分からず、頭に血が上った。

「えっ？」

ハルスはヴィーナスの異変に気づき、ヴィーナスの肩に手をかける。

「あつ……。」「

ヴィーナスは、鼻血を流し、ハルスの手元で倒れた。

「ち、ちよつと、どうしたのよ？」

倒れたヴィーナスの体を、ハルスは揺さぶる。しかし反応はなかった。ハルスは周章てて大きな声で叫ぶ。

「じい！」「

ハルスが呼ぶと、部屋に一人の老人が入ってきた。

「じい、この女の子、ベットへ運んで。」「

「はっ、」「

と、じいは云われたままに、少女の体を抱え、ベットまで運び、布団を体にかけてやる。それから後ろの方を向く。一人の男の子が倒れているのに気づき、じいは尋ねる。

「治様は？」

「様をつける必要はなし。というか治を触ったら馬鹿が移るから、あたしが扱う。」「

「は、はっ……。」「

じいは頭を下げる。

第31話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」2（後書き）

第32話、いよいよ宣戦布告です。

第32話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」 3

「はっ……。」

ヴィーナスは、深夜、夜空に月のそびえるところに、ベッドの上で眼を覚ました。隣には少女、あまりにもかわいすぎで鼻血を出した少女が寝ている。再び鼻血を出したらどうしようかと、その少女の寝顔から視線をそらす。

「ん……？」

ヴィーナスは、部屋の隅で寝ている一人の少年に気づいた。ヴィーナスは、金髪の少女を起こさぬように、そっと少女の体をまたいでベットから降りた。そして部屋の隅まで行くと、その少年の前へ立った。

その少年は、年齢は少なからうとも多少の貫禄はあると見える顔をしていた。ヴィーナスは、その顔を見てはっと気づいた。その顔は、ヴィーナスにとって、どこかで見たような気のするものであった。これはデジャヴなのか、それとも偶然なのか——……。ヴィーナスはしゃがみ、少年の顔へ、自分の顔を近づける。

名付け親。ヴィーナスにとって、名付け親の定義はなかったのだが、自分の名前を決めてくれた人に特別な感情を持っていることは確かだった。しかしそれは一方的だったかもしれない。お互いに。お互いに一方的だったのかな、とヴィーナスは思い、そしてはっと気づき眼を大きく開けた。ヴィーナスはいきなり立ち上がると、その少年の寝顔を見る。

「ひゃふ……。」

いきなり後ろから女の子の声がし、ヴィーナスは慌てて振り向く。その少女が起きていたのかと思うと、それは違っていた。寝言だったらしい。窓から差し込む月の光が、その少女の体を照らしていた。それを見て、ヴィーナスは、この少女が自分にとって宿命的な人ではないか、と一瞬感じた。しかしこの心は一時的なものかもしれない

い。ヴィーナスは、うつむく。

「あんだあ……。」

再び声がし、ヴィーナスは再度顔を上げる。しかしまた寝言だったらしく、ヴィーナスは安堵の息をおろす。それから次に、なぜ少女がベットで寝ていて少年が部屋の隅で寝ているかを考察した。女は、おとなしい。ヴィーナスの持論であった。そして男は荒っぽい。仲が悪いとヴィーナスは感じ、先ほどの考察を撤回した。しかしこれを撤回すると言うことは、この少女が自分の宿命的な人ではないと言うことは、いやしかし宿命的な人かもしれない。そういった顔つきを、この少女は持っていたのである。

「分からない！」

ヴィーナスは、いきなり叫んだ。その声にびっくりし、ハルスも治も起き、ハルスはベットから降り、治も立ち上がる。立ち上がったいきなりヴィーナスの後ろ頭に視線が行き、ついて次に吸った空気が天然のやわらかいにおいがし、治は顔を真っ赤にする。

「あ、あっち行けよ！」

「その通りね。」

ハルスも賛同する。

「こんな男のすぐ前にいたら、バカが移るんだもの。」

「バカとは何だよ！」

治が反芻すると、ハルスはベットの近くの小さなテーブルの上においてあった杖を握る。それを治に向けるまでの間に、治はハルスに向かつて土下座をする。

「俺が悪かったんです！」

「へえ……。」

ハルスは、治の方へ歩み寄り、視線の真下に治の頭が来るくらいに近寄ると、治の頭をにらんだままヴィーナスに言う。

「ベットに戻ってて。こいつこれ以上見てたらバカが移るから、ね。」

ハルスがそう言い、杖を構え、呪文を唱えんとした時、ヴィーナス

は言った。

「私は、そうは思わない。」

「えっ？」

ハルスは眼を丸くして、ヴィーナスの顔をじろじろ見る。

「だって・・・、あなたにとっては嫌な人でも、私にとっては・・・、調べたいことが一つ増えたから。」

「何？」

「この男の子、どこかで見たような気がするの。」

「えっ？」

「確か・・・、レイジ・・・、」

ヴィーナスがそこまで言うと、治は顔をあげ、ヴィーナスの方を見る。

「何で俺の名前知ってんだよ？」

「えっ？」

ハルスは困ったように顔を真っ赤にする。それから、何かを絞るように怒鳴った。

「り、理由はそれだけじゃないんでしょ！」

「これだけ。」

「嘘よ。」

「嘘じゃない。」

二人はおでこをあわせた。

「出てって！」

「嫌！王様に、ここにいなさいって言われたから。」

「それが口実？」

「口実じゃない！れっきとした理由よ！」

「へー・・・。」

そうしてハルスが横をチラッと見ると、治は立ち上がっていた。

「あんたは引っ込んでろ。」

ハルスは治の股間を蹴り、治を夢の世界へ強制連行すると、再びヴィーナスの方を向く。

「あんた、名前は？」

「昼、言いました。」

「何だっけ、ブタリンゴねえ……。」

ハルスがそこまで言うのと、ヴィーナスはハルスのほっぺたを叩く。

「やめて。」

「あんたがここにくるから悪いのよ。」

ハルスは、ヴィーナスがハルスのほっぺたを叩いた手を手でつかみ、言った。それに対し、ヴィーナスは、手を引っ張ってハルスの手から抜かして反芻する。

「あんたがここにいるから悪いのよ。」

「それはこっちの言うことじゃないの。」

ハルスが怒鳴ると、ヴィーナスも反論する。

「たいたい、何の話なの？」

それに対し、ハルスは眼を丸くし、当たり前という様に話した。

「あんた、治が好きなんでしょ？」

「勝手に決めないでよ！」

「たいたいね、あんたは、治と手をつないで来たんでしょ！」

「つないでない！」

「つないでた！」

二人が怒鳴りあう傍らでドアが開き、ウィリエが眠そうな顔をして部屋にはいる。

「何の騒ぎ？」

ウィリエが言うと、ハルスが真っ先に怒鳴る。

「こいつが悪いのよ！」

「こいつが悪いのよ！」

ヴィーナスも呼応して怒鳴ると、ウィリエはしばらく考えてから言った。

「とりあえず、わけを話してくれるかしら？」

第32話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」 3（後書き）

最近、BooksForgeといっています、
別にとーでもいいサイトをプログラミングしています。

もしも完成したら、もしもの話ですけど、

ここで簡単な説明をしますが、

もし完成する前にあきらめてしまったら、

小説が速く進みます。

どっちを選びますか？

たぶん読者にとっては、

どっちを選んでも自分の運命に変化はないので

どっちも興味ないと思いますか。

第33話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」 4

この世界に、電気なるものは存在しなかった。それが故に空気はきれいで、人が密集していても汗を吸った気がしないほど透き通っていたのだった。しかし電気がないはないで不便で、王族の場合魔法で杖の先に光を点らせるのだった。

まず、ハルスは、ウィリエに怒鳴る。

「まずね、この女の子が勝手に乗り込んできたの。」
「乗り込んでなんかない！」

ウィーナスが反論すると、ウィリエはハルスに尋ねる。

「まず、最初から聞いていい？ウィーナスはなぜこの部屋で寝ているの？」

「あたしの顔を見たら勝手に倒れただけよ。」

「ハルスの顔を見るまでは？」

「治に連れられて・・・。」

ハルスがそこまで言うのと、ウィリエはウィーナスの方を向き、尋ねる。

「なぜここに来たの？」

ウィーナスは、少ししどろもどろとして答えた。

「は、はい、タナトスさんをここに連れてきて、そしたら王様にここにいろと言われました。」

「へえ。」

ウィリエが相打ちを打つと、ハルスは大きな声で怒鳴った。

「とにかく、こいつをこの部屋から追い出して！」

「なぜ？」

「こいつね、あ、あたしを殺そうとしてるの！」

「殺さない！」

ウィーナスが反論すると、ウィリエは言った。

「ある意味殺しね。治を取られたら寂しくて？」

ハルスは顔を真っ赤にして怒鳴る。

「そ、そんなこと、ないんだから！」

「へー……。」

ウイリエがハルスを横目で見ると、ハルスはさらに顔を真っ赤にした。

「だ、だから、」

「はい、おしまい。で、君は何で言うの？」

ウイリエは、ハルスを無視してヴィーナスに話かける。

「ヴィーナスと言います。」

「ヴィーナス……、素敵な名前ね。」

「素敵じゃない！」

ハルスが怒鳴ると、ウイリエは杖を取り出す。

「人が話しているのにでしゃばったら……。」

ウイリエに言われ、ハルスは激怒した。立ち上がり、杖をウイリエに構える。

「お姉さんに杖を向ける気？」

ウイリエは、しゃかんだまま冷静に対応する。ハルスは怒鳴って反論する。

「うるさい！それに、あんたなんかお姉さんじゃないから！」

ハルスがそう言うと、ウイリエは急に顔をこわばらせる。立ち上がり、ハルスに杖を構える。

「それだけは言わない約束でしょ？」

「あら？赤の他人である以上あんたとなぜ仲良くしなければいけないの？何であんたと顔をあわせなければいけないの？」

「ち、ちよっと、何の話ですか？」

ヴィーナスが横から聞く。ハルスとウイリエははっとお互いの顔を見合わせ、黙って座る。

「とにかく、あれは渡さないから！」

ハルスは、敵対の目つきでヴィーナスに怒鳴る。

「何のこと？」

ヴィーナスは、笑顔でハルスに話しかける。その笑顔を見ると、ハルスは胸がむかむかしてきた。絶対こいつにだけは負けられないという感情が募ってきた。

「絶対、あんたがくたばるまで持ちこたえてみせるから！」

ハルスはそう怒鳴り、傍らで寝ている治を無理やり起こす。治は座ったまま背伸びをして大きなあくびをすると、ハルスに怒鳴りかける。

「何だよ、さっき蹴っておいて起こすなんて・・・。」

治がそう言つと、ハルスは治に、優しい声で語りかける。

「あたし、大好きでしょ？」

「はあ？」

「とぼけたってだめよ？」

ハルスは、笑顔で治の足に自分の頭を乗せる。

「お、おい？」

治は疑問を持った目つきで、ハルスの頭を見つめる。

「ねえ？あたしのこと好き？」

ハルスが尋ねると、治は拒否する。

「何なんだよ、昨日まで蹴っておいてそれはないだろ。たいたいお前はウイルソンが・・・。」

「ウイルソンって誰？」

わざとらしい声で、ハルスは治に尋ねる。

「何だよこれ？ハルス、壊れた？」

治は視線をウィリエに変え、尋ねる。ウィリエは治が尋ねるなりくすつと吹き出した。

「何なんだよ？」

治が尋ねるが、ウィリエは笑いながら言った。

「何でもない。」

「・・・？」

治は、再び自分のあぐらの足に乗せているハルスの頭を見つめる。その様を見て、ヴィーナスは、自分とハルスの感情を悟った。しば

らく考え、それから横目でハルスに言う。

「それじゃ、あたしに勝ったことにはならないわよ？」

勝ち誇っているというか、いつから勝負をしていたのかわからないけれど成り行きで勝負をしているような声であった。

第34話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」 5

治は周章狼狽していた。いつもはあれほど自分に対してのみ猛り狂っていたハルスが、今日はまるであべこべだった。自分に対しては優しく、自分以外の全ての人に敵対の目を向けていた。

治が起きて上半身を起こすと、隣にハルスが寝ていた。治が寝ていたのは、ハルスのベットであった。治は驚き、隣でくうくう寝ているハルスを眺めた。と、ハルスのまた隣にヴィーナスが寝ているのに気づいた。治は、ヴィーナスが床上の自分を可哀想かりこつそり運んでくれたものと心得て、ハルスの起きぬ間に部屋から脱出せんとまずはベットから降りようと、でもハルスとヴィーナスの向こうにある床は遠いものである。治は、これはハルスを起こしてもいいからジャンプしてそのまま逃げようと思い、決行した。治は見事大きくジャンプしてベットから飛び降りると、そのまま逃げようとした。

「おはよう。」

後ろからハルスの声がし、同時にあくびの音も聞こえた。

「えっ？」

いつもなら「こら、待ちなさい」の一つでもかけてくれるはずである。治は驚き、ゆっくりと後ろを向いた。後ろでは、上半身を起こし、治にっこりと笑顔を見せているハルスの姿があった。ヴィーナスはまだ寝ているようで、ハルスは静かに床に下りた。

「ねえ？」

ハルスは、治の肩を叩いた。治は眼を丸くしていた。

「ねえ？」

ハルスが再度、優しく治の肩に自分の頭を乗せる。

「ねえ？」

ハルスに再度、優しい声で問いかけられた治は、一言だけ言った。
「お前、熱でもあるのか？」

「ない……。」

「じゃあ、何で昨日までは……。」

治がそう言いかけるが、ハルスは今度は治に抱きつき、これを阻止する。

「あたし、かわいい……。？」

ハルスは顔を上げ、治の目を見つめる。治は頬を赤らめ、それでも抵抗しながら言った。

「か、かわいい……。」

「本当？」

「本当だよ……。」

治がそこまで言うと、ハルスは強く足を蹴って治を床へ押し倒した。「うっ！」

床に強く背中を打った治は、これは罠ではないかという思いが脳裏をよぎった。しかしハルスは今度は頬を赤らめた顔を隠すように自分の顔を治の胸に押し付けて、再び治に問いかける。

「あたし、世界一かわいいの？」

これを拒否したら殺されると治は直感し、いやその前に自分が思っていることと答えなければいけない内容が同じであるのに気づき、治は顔を真っ赤にして言った。

「かわいい。」

「あたしの悪いところ、いくつあるの？」

「えっ……。」

治の顔の色が、真っ赤から通常の肌色に戻る。悪いところは、枚挙の暇がないほど多い。多すぎるのである。ハルスに暴力を幾度も受けてきた自分にとっては、ハルス以外の人に銃殺されることになってもハルスが許せないのである。しかしこれを拒否したらどうなるのか。そこは治はわきまえていたのだが、答えが見つからないのである。

「早く、答えてよ。」

ハルスが柔らかい声で言うと、治はさらに困憊した。

「んー、ふああ・・・」

突如、ベットからもう一色のおくびがした。ヴィーナスが起きたらしい。治は胸をなでおろし、ヴィーナスの方を向き、言った。

「ねえ、トイレの場所、言ってなかったよね？」

治がそう言うのと、ハルスはいきなり上半身を起こして反駁した。

「あたし以外の人と話したら、殺す。」

「はい？」

治は少し嫌な予感がした。

「話すだけでもだめっぽいわね。あんたと少しでも触ったり少しでも話した女性は、全員殺す。例外なし。」

「はい？」

治は顔を真っ青にした。

「あ、あのさ、それはやりすぎ・・・、」

「浮気対策には、まず根を絶やすことが一番でしょ？」

ハルスにそう言われ、治はハルスの目的に気づいた。

「ちょ、やめろよ！」

治はハルスの体を跳ね除け、立ち上がる。転んでしりをついたハルスは、ゆっくりと立ち上がって治に言った。

「本当は、あたしかわいくないの？」

そのハルスの目からは、いつしか涙がこぼれていた。

第34話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」5（後書き）

なぜか読者が1000人を超えました。

世界一つまらない小説の被害者が、

延べ1000人を超えました。

強い遺憾の意を表します。

第35話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」6

「するいわよ、そんなこと！」

ベツトから降りて、ヴィーナスはハルスに怒鳴る。

「はあ？部屋の主に命令する気？」

ハルスは杖をヴィーナスに向ける。

「魔法を使うなんて卑怯！」

ヴィーナスが怒鳴るが、ハルスはそれを一蹴する。

「あたしに残された唯一の抵抗手段だから。」

「他にもあるじゃない！」

「ない。」

「いや、あると思うよ。」

治がその場に割って入り、ハルスを見つめる。ハルスは黙って治の頬を叩く。

「あんたも男なら、あたしの意見に同調しなさい！」

「い、いや、本当のことだし……。」

「へー……。」

ハルスは意味深長な笑顔を治に見せる。治は嫌な予感がした。治は後退りをし、ドアの方へ近づいていった。ハルスは黙って、杖を治へ構え、呪文を唱えた。

「フロート」

治が爆発すると思いきや、ハルスと治は啞然とした。事情を知らないヴィーナスは、啞然としている二人を見て啞然としていた。治の体は、空中に浮いていた。

「何で……。」

ハルスは、眼を丸くして持っていた杖を見つめる。治は、ドアの上端あたりまで浮いており、何とか降りようとあがいていた。

ハルスはしばらく考え、それからいっと不気味な笑みを出した。
「治！罰を変更！あんた、今日一日あたしの魔法の実験台になって

よ？」

治は真っ青になった。それならば前の方がまじである。これは偶然で、次からすつと失敗で、殺されるかもしれないのである。

「ちよつと、やりすぎじゃないの。」

ヴィーナスが後ろからハルスに怒鳴る。それを黙って聞いたハルス、治の方を向き治に尋ねる。

「ねえ、あんたはあたしとヴィーナスの意見のどっちに賛同する？」
治は真っ青になった。意見に賛同するという事は、女を選ぶことである。いやはやどちらもかわいいのだが、問題は意見の正当性以前に自分の命である。正当性がある意見は、当然ヴィーナスのほうである。しかしヴィーナスの意見に賛同したらハルスに殺されるかもしれない。かといって、逆境に置かれても正義を貫く男に、治はなりたかった時を、この時に限って思い出してしまったのである。

なかなか治が返事しないのを見て、ハルスは黙って杖を小さく振る。治の体が上下逆さまになり、ヴィーナスは真っ青になった。

「とりあえず成功のようね。」

ハルスが微笑を含めた声で言った。

「ち、ちよつとひどすぎます！」

ヴィーナスが怒鳴るが、ハルスは毅然とする。

「さあ、頭に血が全部行ったら、速く決められるわよね？」

「そ、そんなぁ・・・。」

頭に血が全部行ったら、紛れなく死んでしまう。速く決めなければいけない。命にかかわることなのだから。

「また？」

ハルスが聞くが、治は、命の危険に瀕しても思い悩んでいた。しかしそれも長くは続けられなかった。意識がもうろうしてきた。ここはどう考えても命の方が大事である。命の危機に瀕すると、安全な選択をする。その人間の本能がすっぱり出てきてしまった瞬間であった。

「ハルス！」

治は、力を振り絞って叫んだ。

「ありがとう。」

ハルスは優しい声で、杖を軽く振る。治の体の魔法が解け、地面に落ちる。

「あたた・・・。」

腰をさする治に、ハルスは飛びつく。

「治、大好き！」

ハルスのあったかい体に抱かれ、治は頬を赤らめた。悔しそうにグイーナスは、それを見ていた。

「何ですか、これは！きちんと正攻法で行きましょうよ、ハルス！」
グイーナスが怒鳴るが、今のハルスには馬耳東風だったらしく、これっぽっちの反応さえもしない。それところが、治にさらに声をかける。

「ねえ、あたしの魔法の練習に協力してくれる？」

これを聞いたとたん、治は、ハルスの方を選んでしまったことを後悔した。死んでもいいからグイーナスの方がよかった、というかどっちを選んでも死んでしまう。治は顔を真っ青にし、ハルスではなくグイーナスの方を見つめる。グイーナスは、悔しそうな顔をして、終始そこにぼつりと立っていた。

第35話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」6（後書き）

やっとこれで1週間か、と思ったあなた、
小説しつかり読んでくださいよ。

休暇の2週間のうち、2日目なんですよ。

第36話 第7節「君の後ろの戦争は勝った 君の前の戦争は」7

ハルスが「とても危ないから」名目でヴィーナスを部屋から追い出し、ハルスの部屋にいるのはハルスと治の二人だけとなった。治は真っ青になってかくかくふるえている。一方のハルスはつんとした顔で突っ立っている。

「なに震えてんの？」

ハルスが治に尋ねるが、治は真っ青になったまま、がくがく答えた。
「こ、こ、殺すなよ……。」

「殺すかも。」

ハルスはつんと退けた。

「そ、そんな……、さつき好きって、」

「好きな人に協力するのは嬉しいんでしょ？」

ハルスにそういわれ、治はさらに真っ青になる。

「手加減しろよ……。」

「あら、好きだからこそ手加減はしないんでしょ？」

ハルスは嘲笑して答える。治は真っ青になり体中の鳥肌が立っていた。

「さあ、いくわよ。」

ハルスは杖を構え、しばらく目をつむり、それから目をゆっくり開け、治の方へ杖を構え、呪文を3秒ほど言った後、強く大きくこう言った。

「フライ」

浮くか爆発かのどちらかである。治は、浮きにしてほしいと懇親立てて願っていた。しかし結果は無残にもさつきと違っていた。治のいたところは大きな爆煙に包まれ、爆発の轟音がハルスの部屋中に響き渡る。真っ黒になった治は、よろよろと揺れた後倒れた。

「何の音なの？」

ウィリエがノックもせずには部屋のドアをあける。その後ろから執事

の長谷川健治、ヴィーナスも覗いていた。それを見てハルスは恥ずかしそうに頬を赤らめ、それから真つ黒の治を引っ張った。

「立ちなさい。」

治は力を振り絞って立ったのだが、立つのがやっとなほどひどくキスだらけだった。その治の様を見たヴィーナスが、ハルスの方へ近寄り声をかける。

「わたし、看病するのが得意なんです。」

その一言で、ハルスは顔を真つ赤にした。

「何よ！看病くらいあたしにもできる！ていうか勝手に入るな！」

ハルスはヴィーナスの股間を蹴り上げる。ヴィーナスは股間を押さえ、言った。

「看病は練習しないとできないのよ。」

「何よ、とうせおしほりをおでこに乗せるだけでしょ！」

「それからキス・・・」

「なんか言った？」

「いいえ。」

ヴィーナスは嘲笑の目つきでハルスに言う。治はよれっとハルスの肩にもたれつく。

「ちなみに何が原因なの？」

ウイリエがハルスの方へ歩み寄り、尋ねる。ハルスは下をうつむいて答えた。

「えつと、さつき魔法がきちんと使えたから確かめようと思ったら・・・」

「・・・」

「えつ？きちんと使えたの？」

ウイリエは眼を丸くする。

「本当だもん・・・、治が浮いていたんだもん・・・、嘘じゃない・・・」

ハルスは、そこまで言い、そして自分に根拠を証明する力がないのに気づき、慌てて視線をそらす。そらした先がヴィーナスだった。

「何で私の方を向くのでしょうか？」

ヴィーナスはハルスを晒うように言った。ハルスは黙って、治がもたれていないほうの腕でヴィーナスの頭を殴る。

「部屋から出てらっしゃい！お姉さんも！」

ハルスが怒鳴ると、ヴィーナスはしぶしぶ、そしてウィリエはくすくすしながら部屋を出た。二人が退室すると、健治も一礼してその場から離れようとした。

「じい。」

ハルスが健治に声をかける。健治は再びこちらを振り向き、一礼する。

「何でしょう、ハルス姫様。」

「治の掃除は昨日まで。今日からこの掃除お願いね。」

ハルスがそう言いはじめるころには、治はすでに気絶していた。

「はっ、」

と、健治は一礼して、部屋から出た。

治が起きたのは、その日の夕方であった。治はベットで寝ていたのだった。治は上半身を起こし、周りを見回した。ベットの横の椅子で、ハルスは本を読んでいた。その本の字は治には読めなかったのだが、先ほどの出来事から見るとたぶん魔法の本だろうか。ハルスは本に夢中で気づいていない。さらに見回すと、ハルスの隣に小さな丸いテーブルがあり、その上にご飯が乗せてある。スープは冷めたのか、湯気は立っていないかった。

治がしばらくハルスの顔を見つめていると、ハルスも気づいたらしく、本にしおりを挟むとテーブルの余白の上に置いた。

「気づいたの？」

ハルスが優しく話しかける。

「え・・・、ああ、うん。」

その笑顔を見ると、さっきまでの事が嘘みたいである。治は頬を赤らめ、それから布団の上にタオルが乗っているのに気づく。さっき上半身を起こした時に落ちたのだらう。治はそのタオルをつかむ。

まだ水分がついている。

「ハルス……。」

治は顔を真っ赤にするが、ハルスはそれを覆す様に、いじわるっぱく言った。

「そ、それは、治のすすを拭いてんだから。」

「嘘だろ。真っ白だよ。」

「……すすが白かったの。」

「黒だろ。」

「白。」

ハルスがそっぽを向いたので、治も窓の方を見た。ハルスが治の後ろから語りかける。

「魔法は、もういいや。掃除もしなくていい。」

「えっ？」

治は窓を向いたまま答えた。ハルスは続ける。

「今日から掃除はじいがするから。」

「え、でも俺の係りじゃ……、」

「解く。」

「はぁ……。」

治は窓を向いたまま答えた。ハルスにとっては無愛想な態度だったが、自分もそっぽを向いていたので気づいていなかった。治がみている窓の外では、人よりも大きいであろう大きな鳥が一匹、空中に舞っていた。

第37話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」 1

次の日の朝。治ははつと目を覚ました。そしてベットから上半身を起こす。俺は昨夜、床の上で寝たはずである。それがなぜ、ハルスのベットのの上に移動しているのか。治はびっくりし、横でくっすり寝ているハルスを眺める。

「おはようございます。」

ハルスを挟むように横で寝ていたヴィーナスも上半身を起こし、治に挨拶する。

「あ、おはよう……。」

治は躊躇して答えた。ヴィーナスは、治の返事を聞くなり、ベットから降り、治に声をかける。

「ねえ、一緒に散歩しませんか？」

「散歩？」

治はしばらく考え、まあ悪くないかと思い、ベットから静かに降りヴィーナスの方を見る。

「ハルスが起きていたらトイレつてごまかせばいいしね、」

ヴィーナスが蛇足を付け加える。

「行こうか。」

治もにつこりとしてヴィーナスに言う。

ハルスの部屋のドアは、しまった。ハルスの部屋にいるのは、ベツトでただ一人寝ているハルス。

「いるか。」

男は、大きな鳥の上に乗っていた。

「はい。」

鳥がしゃべる。

「そうか。」

男はそう言った。男は紳士の姿をしていた。すなわち紳士服を着て

いたのである。

「ふふ……。」

その男はにやりとする。

「これで、わが王国も安泰だな。ぐぐぐぐぐ……。」

「旦那様、早くしましろう。」

その男の傍らから、一人の少年がぬつと顔を出す。

「はは、そうだな。」

男は憫笑し、それから鳥に命令する。

「あの窓を割れ。ハルス姫を奪うのだ。」

長谷川健治は、ひとつため息をつき、それから水の入ったバケツに雑巾をかけて、モップを肩にかけて、執事の粗末な部屋から出て行った。

「いつになれば帰れるんじやろか……。」

ぼそりと健治は吐いた。それから元気のなさそうな声でハルスの部屋のドアを叩く。

「失礼します。」

しかし反応はない。おかしい。この時間ならもうすでに起きているはずだか。じいはそう思ったが、再度ドアを叩く。

「失礼します、じいです。」

しかし反応はない。まあ、いつか、本来なら姫は今起きていなければいけない時、自分が今部屋にいても別に無礼にはならぬ。健治はそう判断し、再度ドアを叩く。

「失礼ですが、お着替え中でございましょうか？」

しかし返事はない。中から風の音がする。床にある無数のチリが風で舞い上げられるような音がする。じいは悪寒を覚えた。許可を得ず、ドアをバンと開き、部屋の中を見回す。

その部屋の中は、惨状であった。部屋にハルスの姿はなく、窓ガラスは大きく割れ、ガラスの無数のチリが床に散らばって、そしてあちらこちらに茶色の羽が落ちていたのである。自分の足元に落ち

ていた茶色の羽をしゃがんで拾い、じいはその羽根を目を凝らして見た。

「こ・・・、この羽根は・・・!」

じいは顔を真っ青にし、立ち上がる。

「まだ・・・、生きていたのだな。」

「トイレの場所、聞いていませんでしたね?」

ヴィーナスが治の肩に自分の頭を乗せ、治に詰め寄りながら歩く。

「あ、あの、」

治は顔を真っ赤にしてヴィーナスに尋ねる。

「な、何でそんなに抱くのさ?」

「いけないのですか?」

ヴィーナスも頬を赤らめていた。それを見て治はヴィーナスの頭をなで、そして言った。

「ハルスに見つかつたら・・・、」

「別にいいです。トイレはどこですか?」

ヴィーナスが再度治に尋ねると、治はヴィーナスの体なるべく見ないよう前を向き、言った。

「あつちだよ。」

「じゃ、早速行きましょう。」

ヴィーナスと治はトイレの入口に立つ。

「じゃ、俺、ここで待つてるから。」

治がトイレの入口の向かいの壁にもたれると、ヴィーナスは治の腕をくいくい引つ張る。

「何だよ?」

「い、一緒に来てください・・・。」

治は、やれやれという顔で、ヴィーナスに引つ張られるままトイレに入った。治が入ってトイレの入口から姿が見えなくなるのと同時に、廊下に、健治に案内されたモルデス45世が顔色を変えて走っていった。

「あ、あのさ、ここは女の、」

治は、いきなりヴィーナスに女子トイレに案内され、びっくりする。

「ねえ、ここに入ってください。」

ヴィーナスが治の腕を強く引っ張り、トイレのひとつの個室に無理やり入れる。ヴィーナスは、個室に二人しかいないのを何度も目で確かめた後鍵を閉めると、治に言った。

「ま、まず、は、裸になってください。」

「はい？」

治は、耳を疑った。

第37話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」 1

公式サイトを作ってみました。

<http://s2.whss.biz/kmys/novel/ouzi/index.html>

久しぶりにエロシーンに挑戦してみます。

この前（居候の第13話）はパンツしかなかったのですが、
今度は裸で・・・

やっぱり無理がありそうですね^^；

エロに興味がないのにエロを描写しようと
無謀な企みを企てる不肖私であります。

第38話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」

ハルスの部屋で、モルデス45世は床に散らばっている羽根のひとつを拾う。その羽根は茶色であった。その色と羽根の色彩を見て、モルデス45世は顔をしかめて言った。

「間違いない・・・、あいつだ。」

モルデス45世の傍らでは、長谷川健治がいた。

「じい。」

モルデス45世が健治に声をかけると、健治は答えた。

「はっ。」

「治を連れてこい。」

「はっ。」

じいはその返事をする、部屋から出て行った。だんだん小さくなる足音を聞きながら、モルデス45世は改めて羽根を眺める。

「イファガラが動き出したか・・・。」

「はい？」

治は、女子トイレの個室で、ヴィーナスと二人だった。いきなりヴィーナスに裸になれと言われ、治は自らの耳を疑った。

「だ、だから、裸になってください。」

ヴィーナスに再度言われ、治は顔を真っ赤にする。

「あ、あのさ、こんなところで・・・、」

「誰も見ていません。」

「だ、だから・・・。」

真っ赤になっている治の目の前で、ヴィーナスは静かに服をぬき始める。

「ち、ちょっとやめて・・・。」

「やめない。」

頬を赤らめ、ヴィーナスは答えた。ヴィーナスは、抜きながら治に

尋ねる。

「あたしとハルスとどっちが好きなのですか？」

「ハルス。」

「自分の本当の気持ちよりも命の方が大事なのですね？」

そう言われ、治は口をつぐんだ。確かにそういった要素もあるかもしれない。ハルスは乱暴で、わがままで……。治の頭の中は、一気にハルスの欠点でいっぱいになった。

「そ、そんなことはない……。」

治が再度ヴィーナスに言うところには、ヴィーナスはもうすでに抜き終わっていた。

「着ろよ。」

治は、ヴィーナスが下に置いた服を拾い上げ、横を向きヴィーナスに差し出した。

「抜いてください。」

ヴィーナスは、治の差し出した服を、それをつかむ手をちゃんと叩いて落とした。治が再度それを拾おうとしゃがむと、ヴィーナスは治の脾腹をつかむ。

「何だよ？」

治が立ち上がると、ヴィーナスは治の服を抜き出した。

「ち、ちよつと、何を、」

治が顔を真っ赤にして抗うが、ヴィーナスはその手を払いのけて治の服を抜き終わると、スポンに取り掛かった。

「ち、ちよつと、」

治が顔を真っ赤にして、ヴィーナスに怒鳴る。

「やめろよ！」

「やめない。」

ヴィーナスはそう言い、ついに治のスポンを抜いてしまった。治が服を拾おうとするが、ヴィーナスは治の股間を蹴り上げ、パンツまで引張った。

「やめろよ！」

殴打もやむなしと、治はヴィーナスの頭を殴る。しかしもうすでにヴィーナスは治に抱きついていていた。

「あっ……」

と、ヴィーナスは声にもならぬ声を出した。

「だ、だから……」

「あら、こんなところで何をやってるの？」

いきなり傍らから第三の声がし、二人は顔を真っ赤にしてそこを見る。鍵をかけたはずのドアは開き、そこからウィリエが姿を出していた。二人はじりじりと退る。無理もなかった。二人とも全裸だったのだから。ウィリエは、笑みを浮かべて、ヴィーナスの頭を平手で叩く。

「だめでしょ、こんなことをしちゃ。」

「……」

ヴィーナスは黙り、下をうつむいた。

「さあ早く服を着なさいよ。」

ウィリエが、二人に優しく言う。それから、スポンをはき終わった治に声をかける。

「あなたのご主人様が誘拐されたのよ。」

「はい？」

治は耳を疑った。

服を着終わった治は、トイレからかけだし、ハルスの部屋へ走り出した。その後と同じく着終わったヴィーナスが「ちよつと待ちなさいよ、」と言いなから走ってついていく。

治はノックもせずに部屋のドアを開ける。ドアを開くなり、治の目に飛び込んできたのは、たくさんのガラスのちり、大きく割れた窓、そして床に落ちている茶色の羽根。

「おはよう。」

声をかけられ、治は慌てて横を向く。モルデス45世が、ドアの隣の壁にもたれていた。

「王様、おはようございます。」

治は、ちよつと恥ずかしそうに答えた。

「見てのとおりだ。」

モルデス45世に再度言われ、治は下をうつむいた。

「お恥ずかしい限りです。」

「どこにいた？」

「トイレです。」

モルデス45世は一区切りつけて、治に言った。

「ハルスを奪還するまで、2週間の休養は取り消しだ。」

第39話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」

モルデス国の北方に、多くの小勢力の群集があつた。その群集は大陸の半分程度を占めており、この群集が全て組めば大陸の統一国は決まったも当然と言われていた。しかしどうしたことかこの群集の仲は悪かった。毎度毎度戦争を繰り返し、そのたびに弱体化の一端をたどっていた。

大陸の勢力圏は、モルデス国が南方を統一した事により、モルデス国、小勢力の群集、そして北方の匈奴の3つに分かれていた。この大陸の南方にもまだ大陸があり、広い海を隔てて西にも東にも大陸はあるのだが、モルデス国を始め三大勢力圏の人々は、他にも大陸があること自体を知らず、モルデス国などがもくろんでいる世界征服と言つのは、この大陸を統一する事であつた。

しかしモルデス国という名の大国の王女が、零細な勢力に盗まれたという事は、モルデス国に非常に打撃を与える結果となつた。

「これまで遠征に参加させてきた兵士たちは、ここで休ませるべきです。」

治は、荒れ果てたハルスの部屋で、遠征を再開すると宣言したモルデス45世に進言した。

「ならば誰に遠征させよと？」

モルデス45世がそう言うのと、治はしばらく考えてから言つた。

「占領地から募兵するのです。遠征兵と交代するという名目で。」

「しかし民は疲れているのでは？」

「これを暫定的な募兵と定義し、イファガラ国を倒してから解散します。」

「なるほど・・・で、何人くらい必要かね？」

「はい？」

治がモルデス45世に尋ねると、モルデス45世は一区切りつけて

言った。

「イファガラ国の討伐は、お前が主役だよ、オサム。」

「は・・・はい？」

「分かったからには、言われたとおりやりなさい。」

「はい。」

「それから、お前の手先が必要だな、そうだ・・・、タナトスを預けよう。」

「は、はい。」

治は躊躇を顔に隠さなかったが、それでも王の命とあらば、と、一礼してその部屋から出て行った。治の姿が見えなくなるころ、モルデス45世はつぶやいた。

「レイジオサム・・・、その名を聞いた時はびっくりしたか・・・、まさかイファガラ国の貴族があの世界に落ち延びていたとはな・・・。」

その3日後の朝、零時治は、馬に乗り、募兵した兵士たち約5万を引き連れ、副将のタナトスには別に2万の兵を預けさせ、累計7万の兵を連れて城を後にした。

わずか1万しかないイファガラ国の宮内は、騒然となった。

朝廷。イファガラ国王の前で、たくさんの重臣たちが、戦つか降伏か、二つに一つでもめていた。

「ええい、静まれ！」

イファガラ国王は、いきなり怒鳴って玉座から立ち上がった。重臣たちは驚いて国王の方を見た。

「慎重に議論しなければいけないという気持ちは分かるが、最後まで希望を捨てないのが男と言うものではないか！」

国王が言くと、重臣たちはお互いの顔を見合わせ、黙ってしまった。その様子を見て、国王は言った。

「決戦だ。」

「お、お待ちください、王様！」

一人の重臣が、慌てた顔で国王に言う。

「何だ？」

国王は、危険悪そうに問う。

「あ、あまりにも無茶すぎませんか？ここは潔く降伏したほうが、王様の命も安全ですし……」

「何を言う。それよりも勝ったほうがまじであるう。」

「そ、それはそうでございますか……」

「何も申すな。」

王はそう言い、玉座に座った。

「僕は……、降伏をした方がいいと思います。」

突如として、声がした。重臣たちは、声の源の一点を輪にして取り囲んだ。その男は、頭を下げて王に言った。

「君は1万の兵で7倍もの軍勢に勝てると言うのか？」

王がその男に尋ねる。男は冷静に答える。

「はい、勝てます。」

「ふうむ……」

王はしばらく考え、そして男に言った。

「君にこの国の運命をかける。」

「ちよつと！」

重臣が王に言う。

「国の運命を簡単に一人の男に預けるのはどうかと！」

「それなら君がやってくれるか？」

王に言われ、一人の重臣は顔を真っ青にして頭を下げる。王は、男の方を向く。

「名前は？」

「ミライ・ベラーミグン・ド・ミルギグでございます。」

その男は、王に頭を下げた。

第39話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」

新しい小説の構造が固まってしまいましたので、

そろそろ王子も終わりにしたいなと思っております。

短い間ですがいくらなんでも短すぎたかなと思っております。

反省していますw

とりあえずは今を楽しむ事にしました。

ある程度の長さは飽きずにかけるかもしれません。

まとめて書いて投稿しています。

ライバル登場ですねw

これからどうなるのでしょうか。

第40話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」

ミライ・ベラーミグン・ド・ミルギグは、国王の勅命により、1万の兵を引き連れ、7万の軍勢のいるところめかけで進軍を開始した。しかしその兵士たちの顔は、不安でいっぱいであった。その兵士たちの顔を、ミライは百も承知であった。だからこそ、戦う。戦っている兵士たちを、今は沈静する時であった。

ミライ將軍は先ず、城の周りへ1万人全員を布陣した。兵を3つに分け、左翼、右翼それぞれ500として近くのやぶにもぐりこませ、残りの9000は主体として城の守りにつけた。

オサム將軍率いる7万の兵たちは、イファガラを視界に入れるところに陣を張り、その場で一夜を過ごした。オサムは、兵士たちよりも早く早朝に起き、イファガラを見えていた。

「オサム將軍、おはようございます。」

傍らから一人の男がオサムに話かける。

「おはようございます。」

オサムが返事をする。

「で、君は誰でしたっけ？」

「タナトス・ベラーミグン・ド・フォルダムと申します。」

タナトス將軍は一礼する。

「オサム將軍様、何か策を講じていらつしやいますか。」

「うん・・・あの城の周りにはたくさんやぶがあつて、伏兵をするにはいい場所だから、誰に横をつかせようか迷っていたんだけど・・・主体は手薄にして伏兵にたくさん兵をつきこんだを見た。」

「は、はあ・・・。」

「そして、伏兵たちに気を取らせて主体が背後から突撃すると思うんだけど、君は？」

「は、はい、なんとも言えません・・・。」

敗戦の経験をしてきた將軍は、次の戦争の時に怖じ氣つくところがある。

「怖い？」

オサムに優しく問いかけられ、タナトスは退る。

「いいよ、別に怖からなくても。」

治はそう言い、それから再び城の方を向いて言った。

「時間になったら召集を。」

「はっ。」

タナトスは一礼し、その場から去った。

オサムは、7万の兵を2つに分けた。自分は4万を率い、3万はタナトスに引かせ、それぞれやぶの中を荒らし、抜け出したところで城門の前で合流するという作法であった。

かくしてその日の朝のうちに、進軍は開始された。作戦は実行された。やぶの中に忍ばせていた伏兵たちはさっそうに二つの隊に壊滅させられた。そして城門の前に、まずオサムの隊が到着した。

その時、城壁の門が急に開いた。中から九千の兵士たちがオサムの軍勢に切っかかりかかった。隣のやぶばかり見つめていた兵士たちが横から突かれ、城門の近くにいた多くの兵士たちが犠牲になった。同時に、同士打ちが起こった。伏兵たちはオサムの軍勢に紛れ、ミライが城門から打って出ると同時に同士打ちを始める事になっていたのである。兵たちの混乱は極限に達した。同じ頃、タナトス將軍のもぐりこんでいたやぶの中でも、大規模な同士打ちが起こっていた。ここではタイミングを早めに命令していた。やぶの中で、敵か味方が分からぬほど多くの兵士たちが打ちあつた。

この有様を見て、オサムは、ふと横に落ちている自国の旗に気づいた。オサムはその旗を拾い、その場に大きく掲げた。

「この旗の国の者は、直ちに槍尻をこっちへ向けよ！」

オサムが言くと、兵士たちのほとんどが槍尻を治に向けた。

「突進！」

オサムが怒鳴ると、兵士たちはいつせいに城内へなだれ込んだ。

第40話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」4

逆転部分が短すぎですいません。

第41話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」

イファガラ国王は宮内で捕らえられた。治はイファガラ国王の前へ立ち、話しかける。

「今回の戦いの指揮を取ったのは誰です？」

治が国王に尋ねると、国王は黙ったまま首を振った。

「誰ですか？」

治が、傍らの兵士のもっている槍を国王の首につきつける。

「誰ですか？」

しかし国王は黙ったまま首を振った。

「誰ですか？」

治が再度尋ねるが、国王は黙るのみであった。治は、これやむを得なしと見なし、隣の兵に槍を返して言った。

「牢に入れよ。」

「はっ。」

兵が一礼した時であった。

「いました。」

突然後ろから声がし、治は振り向く。そこには、ハルスが一人の兵士に連れられて歩いて来ていた。ハルスは治の顔を認めると、いきなり治の方へ飛び込んできた。

「何をやってるの！」

ハルスは、治のほつぺたを強く叩いた。

「あたしが捕まったの、全部あんたの所為だからね！」

ハルスは治の顔を足蹴にし、イファガラ国王の頭ごと足で押し倒した。ハルスは足を上げ、治に怒鳴る。

「いい？これであんたを殺す口実が出来たんだから！」

ハルスはそう怒鳴り、それから治の顔をつかみ、しゃがんで治の顔に自らの顔を近づける。

「な、何を・・・、」

治が尋ねるが、ハルスは何も言わない。

「ち、ちよつと、」

しかしハルスはやめようとしめない。そのまま・・・、治の唇に自らのそれを押した。

「むぐ・・・。」

ハルスはそのまま顔をぐいっと放し、それから再度治のほつぺたを叩いた。

「怖かったんだから！」

それからハルスは立ち上がった。治も立ち上がる。そして後ろを見る。後ろでは、国王が目を回して倒れていた。

ハルスの部屋は、気まずい雰囲気だった。ハルスはベットに座り、ドアの前に立たせた治をにらむ。

「何であたしを助けない？」

「・・・。。。。。」

治は、答えるすべがなかった。

「何であたしをあんた一人で助けない？」

「・・・。。。。。」

治は口をあける事が出来なかった。ハルスはベットから立ち、ずっと治の方へ歩み寄る。

「あたしが今までに読んできた小説では、ヒーローが一人だけでヒロインを助けるという事なんだけど、それはどうということなの？」

「い、いや、」

「七万の兵を使うなんて卑怯じゃないの？」

ハルスは治の鼻をつんと下から指で押す。

「そ、そんなこと知らなかったから、」

「普通一人で助けるんでしょ？」

「い、いや、だから、」

治がそこまで言うのと、ハルスは治のほつぺたを叩く。

「もう・・・、せつかくお金まで払ってお願いしたのに。」

「はい？」

治はそれを聞くなり、一気に表情を変えてハルスの方を見つめる。

「じ、じゃ、これは……。」

治がそこまで言うつと、ハルスはしまったと言うように手をおでこにあて、それから手を下げて言った。

「い、今のは嘘！」

「嘘じゃないだろ！」

治がそう言うつが、ハルスはつかつかとベットの方へ歩み寄り、ベットに座る。

部屋は、違う意味でさらに気まづくなった。

「今回の戦争、ご苦労であつた。」

モルデス45世は、將軍たちを集め、一室で上席に立つて言う。

「兵たちを休めるがよい。」

「はっ。」

將兵たちは、一斉に起立して一礼した。

「いや、まだ会議は続いている。座れ。」

將兵たちが全員座つたのを確認すると、モルデス45世は一区切り置いて言った。

「今後の戦略はどうするか。」

「はい。」

一人の將軍が手を上げる。

「ヴィラ。」

「はっ。」

ヴィラ將軍は立ち上がり、モルデス45世に進言する。

「北方に大きく勢力を構えている匈奴らとは仲良くすべきです。」

「なぜ？」

「彼らは手怖いからです。」

「禍根を残してもいいのか？」

モルデス45世のこの言葉に、ヴィラ將軍は黙ってしまった。その

まま座る。

「他に意見は？」

モルデス45世が言うと、治は手を上げる。

「オサム。」

「はい。」

治は立ち上がり、発言する。

「俺は、匈奴と結ぶべきと存します。」

「なぜ？」

「今、匈奴では内部から分裂が起こっているときいております。もしこの分裂が小勢力の群衆を全て滅ぼした後も続いているようであれば、俺が一滴の血も流さずに匈奴を屈服してみせます。」

治が言うと、他の將軍たちはびっくりして一斉に立ち上がる。

「発言者以外は控えよ。」

モルデス45世のこの言葉を無視し、將軍たちは一斉に言った。

「こんな少年に任せていいんですか？」

「もし屈服できたとしても反乱を起こすのでは？」

將兵たちの罵詈雑言に、治はしばらく考えてから言った。

「それでは、こちらの手を汚さずに匈奴の指導者をみな殺しにしましょう。」

第41話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」

治の性格好戦的に変わっているかもしれません。

これについての伏線は後でちゃんと説明しますので

安心してくださいw

第42話 第8節「それだから隠すのだ。次いて恋、フィロストラトス以外」6

ハルスの部屋のドアを叩く音がした。

「入って。」

ハルスが許可を出すと、ドアは静かに開き、長谷川健治が入った。

「掃除でございます。」

健治は一礼をし、ドアを閉める。

「ごくろうさま。」

ハルスはベットに座って窓の外を眺めながら、健治の姿を窓ガラスの反射で見ながら言った。

「うつ・・・！」

突然健治が腹をかえ、その場にしゃがみこむ。ハルスは後ろからうめく声がし、驚いて振り向き、立ち上がり、健治へ近寄る。

「じい！大丈夫？」

ハルスが横になった健治の体を揺さぶる。

「うつ、う・・・。」

健治はうめき、そして口から血を吐いた。

「なっ・・・！？」

ハルスは驚き、健治に尋ねる。

「何？」

「は、はい・・・、数年前からこの発作が増えてまいりましたが・・・、ここ最近ひどく・・・。」

「なんでもっと早く言わないの？」

「ふふ・・・、お、お嬢様・・・、お、お、おさ・・・。」

「い、いま何で言ったの？」

ハルスはさらに健治の体を揺さぶる。しかし返事はなかった。

「そ、そんな・・・。」

ハルスはぼろぼろと涙を流し、健治の目を見て言った。

「約束、守れなくてごめん・・・。」

10年前、ハルスは8歳だった。モルデス45世の父、モルデス44世がなくなり、葬儀も済ませた渦中、ハルスは長谷川健治と出会った。イパバート池で、ハルスが池の水面から自分の顔を見つめていた時、健治は背中から尋ねた。健治が最初にハルスに言った言葉はとつぴであつた。

「玲子に……、玲子に会わせてください。」

「レイコ？誰？」

ハルスはそう言いながら振り向く。後ろに見知らぬおじさんが出てきて、ハルスはびつくりして、そのはずみで池に転んでしまった。「大丈夫ですか？」

健治はハルスの手を握り、池から引つ張り出した。呆然としているハルスに、健治はハルスに一礼して言った。

「あなたの魔法で、私が生まれ育つた地、地球に帰らせていただきたいのです。」

「は？」

ハルスはいきなり言われ、何がなんだか分からなかった。

「何の事？」

「失礼……、私はある魔法使いによりこの場に連れて行かれた、長谷川健治と申します。」

「レイコは誰？」

「私の娘……、長谷川玲子でございます。」
「娘。」

ハルスはそう言い、落ちづいたのか再び池の水面から自分の顔を覗く。髪の毛はぬれていてハルスのおでこに張り付いていた。健治は続ける。

「自由に好きなどころへ行ける様な魔法を扱えますね。」

「なぜ私に聞くの？」

「多くの人から聞き、異世界へ転送するには膨大な魔力を持っているあなたしかいないと思ったからです。」

「運が悪いわね。」

ハルスはそう言い、すつくと立ち上がり、杖を取りだして湖へ杖を向ける。

「ゴスト」

突風の魔法であつた。健治も、今までの苦痛の旅からこの呪文の意味はなんとなく推測できたのだが、その意に反して湖の水は大きく爆裂した。

「見てのとおり・・・、あたしはどんな呪文を使つても爆発しかないのよ。」

ハルスはそう言い、ふうつとため息をつき、再びしゃがむ。健治はしばらくとまとつたのだが、ぐつと手を強く握り、再びハルスに一礼する。

「それでは・・・、魔法がうまく使えるようになる日まで・・・、どのような屈辱も甘んじて受けます。」

「あなたを受け入れたら他の人も受け入れなければならない。」

「うつ・・・。」

健治は、そりやそうだね、という顔をし、後ろへ振り返りその場から立ち去ろうとする。

「待つて。」

ハルスが水面を見たまま言う。健治は足を止め、再びハルスの方へ方向転換する。ハルスは続ける。

「ちようどあたしの部屋の掃除係りが欠乏していたの。」

「そうですが・・・。」

健治は嬉しそうな顔をして一礼した。

長谷川健治、享年61歳。ハルスは、長谷川玲子という名の少女、ほぼ100%恒久的に会えないだろうその少女の顔をイメージしてみた。しかしその顔は全て、自分の顔ばかり映っていた。あの時、水面で見つめていた、幼少の時の自分の顔が——・・・

第43話 第9節「もともと地上に道はない 人が歩いて道にならないのだ」

ハルスは健治の墓に手を合わせ、それから涙を流し、傍らの治に声をかける。

「行くの？」

ハルスに尋ねられ、治は黙ってうなづく。

「それじゃ……。」

治は健治の墓とハルスから離れた。その治の背中を見て、ハルスは妙な寂しさを感じた。簡単な事では償い切れない、何かが、とにかく何かをハルスは失ったように思えた。

「それでは、行ってまいります。」

治はモルデス45世の部屋でモルデス45世に一礼すると、そのまま部屋を出た。治は、モルデス45世の用意した馬車に乗って、匈奴の治める北方へ向かった。

治は正直、このやり方があっているかどうか不安であった。しかし、匈奴の力は強大であり、匈奴を制圧すれば零細勢力の群集はモルデス国に降伏する可能性が大きい。治はそう踏み、多くの家臣の反対を押し切って実行に踏み切った。

その馬車の後ろ姿を眺め、ヴィーナスは思わず呼び止めそうになったのだが、ぐつとこらえて城内へ入る。モルデス45世が尋問をするからと、呼ばれていたのである。ヴィーナスが治の馬車の後ろ姿を見ている姿を、ハルスは陰から齒を食いしばって見ていた。

モルデス45世の部屋の入口でヴィーナスは「失礼します。」と言い部屋に入り、モルデス45世の座っている机の前へ立つ。モルデス45世は椅子から立ち、ヴィーナスにいう。

「そこになんか。」

といい、自分もヴィーナスの座った向かいのソファアに座る。モル

デス45世はヴィーナスに尋ねる。

「君の記憶の中で一番古い物は？」

「記憶……。」

ヴィーナスはそうつぶやき、しばらく目をうつろにする。少ししてヴィーナスは口を開く。

「おばあさんに棒をプレゼントされた時……。」

「えっ？その棒はプレゼントされたのか？」

「はい……、私を拾った時に私が握っていたものよ、と……。」

「そのおばあさんの名前は？」

「ラファエル・ル・ド・スイグランといました。」

「スイグラン？」

モルデス45世は眼を丸くする。

「スイグランといえば、100年も前に滅亡した王国じゃないか・

・！」

「でも、物心ついた時の記憶がそれでしたので……。」

ヴィーナスにそう言われ、モルデス45世は悩んだ。なぜ彼女のおばあさんが魔法の事を隠さなければいけないのか、そしてその杖をなぜ引き継がなければいけないのか。

「そういえば、おばあさん……。」

ヴィーナスは口を開いた。

「おばあさん、少し変なところがあります。」

「ほう、それは何だ？」

「おばあさんの話す言葉に、不自然に魔法という語句がたくさん入っていました。」

「……。」

まずは魔法というものに興味を持たせようとしたのか、と、モルデス45世は、極端に単刀直入でないヴィーナスのおばあさんにあきれた。

「君の頭の中でいろいろなもやもやはあるか？」

「はい……、でもおばあさんに相談できないまま死んでしまいま

した。」

「死んだのか・・・では、もしも君が捨て子ではなく、さっきから言っているおばあさんが君の本当のおばあさんだったとしたら、つじつまは合うか？」

「あっ・・・！」

ヴィーナスは眼を丸くし、立ち上がる。

「座りなさい。」

ヴィーナスは座る。モルデス45世はさらに続ける。

「そして、君は魔法使いだ。」

「えっ・・・！」

ヴィーナスはさらに眼を丸くする。脇に治めていた杖が、ぼとりと落ちる。

「その棒は、杖といって、魔法を使う時に使う道具だよ。」

モルデス45世に言われ、ヴィーナスは、落ちた杖を拾う。その様子を見て、そうか、魔法が実在するという事に現実味を帯びさせるために、魔法と言言葉をとくさん入れたのか、とモルデス45世は納得した。

「では、話は戻るが、」

モルデス45世に言われ、ヴィーナスは杖をしまった。

「君の感じたさつきまでのもやもやとは？」

「はい・・・、実は、おばあさんの子供、私のお父さんとお母さんがある日突然そろって行方不明になってしまいました。」

「ほう？うむ・・・、その名前は？」

「はい、お父さんは、レイジ・タロウ・ド・スイグラン、お母さんは・・・。」

「レイジ？」

モルデス45世は、ヴィーナスの話の終わらぬうちに、ヴィーナスに問う。

「レイジ・・・。」

モルデス45世は、窓のほうを見る。これは治にも事情を聞かなけ

ればいけない。治の苗字という物である「れいじ」と同じものであった。

「あ、いや、続けて。」

モルデス45世はヴィーナスに言う。ヴィーナスは答えた。

「は、はい……。」

第43話 第9節「もともと地上に道はない 人が歩いて道にならないのだ」

第10節を最後に王子の連載を終了します。

とゆわけですw

最終話は、第50話にしておきます。

前回作より少し短いですが我慢してくださいな^^;

次回作は、前もってマンガを描いておいて

そのマンガの内容を下に文章を書く形式にします。

でもって僕はもとも絵が苦手なので

文章書き終わったら即廃棄ですねw

と、次回作の前に、

短期集中連載としてミステリーを書いてみたいと思います。

第44話 第9節「もともと地上に道はない 人が歩いて道にならないのだ」

「タナトスを呼んでこい。」

モルデス45世は、書斎へ一人の使いを呼び、命令する。使いが書斎から出て行った後、モルデス45世は再度ヴィーナスに尋ねる。

「君は恋をしているか？」

「えっ？」

いきなりそんな事を尋ねられ、ヴィーナスは答える術がなかった。

モルデス45世は微笑を浮かべ、それからヴィーナスに言った。

「君の生きたいように生きなさい。君の運命は君が決める。他の人に決められることもない。」

モルデス45世はそう言い、椅子から立ち上がり、ゆっくりと歩き出す。

「しかし、時と場合によっては、他の人に制約されることもあるのだから。」

モルデス45世はこう付け加え、同時にドアのノックの音がする。

「入りなさい。」

モルデス45世は再度座って、言う。ドアが開き、中からタナトスが出る。

「お呼びですか。」

タナトスが一礼し、ドアを閉める。

「来なさい。」

モルデス45世に言われ、タナトスはモルデス45世の傍らへ歩み寄る。

「治を呼んでこい。」

「はい？」

「出発は明日に変更だ。」

「は、はい。」

タナトスは命を受け、一礼して部屋から出た。ドアが閉まると、ヴ

イーナスも言った。

「そろそろ、よろしいでしょうか？」

「いや、また聞きたい事がある。」

「何ですか？」

「君は、今までに恋した事はないのか？」

「あります。」

「誰だね？」

「私が家に住んでいた時の近所の男の子です。」

「名前は？」

「マルクスと言っていました。」

「マルクスか・・・。」

「おばあさんが死んでしまい旅に行く時に別れました。」

「そうか・・・。」

ここで、モルデス45世は、ヴィーナスが孤独の笑みを浮かべているのに気づいた。これ以上悲しい気持ちにさせることもあるまい。

モルデス45世は言った。

「もういいよ。」

「はい、では。」

ヴィーナスは立ち上がって一礼すると、部屋から出た。ドアが閉まると、モルデス45世は、ソファから立ち上がり机へ行こうとした。

「ん・・・？」

モルデス45世は、体の痛みを覚えた。

「ぐわっ・・・」

モルデス45世は、口を手で押さえる。しかし指の間から血が漏れる。

「うつっ・・・。」

モルデス45世は、なんとかして椅子に座って楽に、と、力を振り絞り椅子に座る。しかし椅子に座っても楽にはなれなかった。

「うつっ・・・！」

モルデス45世は、もはや口を手で押さえる気力もなかった。口から大量の血が一気に出た。モルデス45世の頭は、机の上に落ちた。

「オサム様！」

馬に乗ったタナトスは、街から出て行ってしまった治の乗る馬車を追っていた。

「ん？」

自分への呼び声に気づき、治は後ろを振り向く。後ろには、タナトスが馬に乗ってこちらへ向かっていた。

「馬車を止めて。」

「はっ。」

治に言われた従者が馬を止めると同時に、タナトスは治の二人用の馬車の横へ追いつき、馬を止めた。

「何？」

治に問いかけられ、タナトスは汗ばんだ顔で治に言った。

「戻ってください！」

しかし、治はしばらく考えてから、タナトスに言った。

「ちょうど手先が一人ほしいなあと思っていたんだけど。」

「とにかく戻ってください！王様の命です。」

「この機会を逃したら統一は出来ません。」

「は、はあ？」

「今、匈奴の中では仲直りの動きが出ていると聞きました。事は一刻を争います。どうか一緒に乗ってください。」

「いいえ！」

タナトスは言うが、治はタナトスの腕をくいぐい引つ張る。

「今戻ったら、匈奴の間の分裂は実現できません。」

「一日くらい、」

「一日でもだめです。一日でも遅れたら、手を結ばれてしまいます。」

「

「は、はっ、とにかく戻って、」

「とにかく、俺は行きますと、王に伝えてください。」

治はそう言い、従者へアイコンタクトをする。従者は黙って馬を走らす。

「ま、待ってください!」

「なら、一緒に乗ってください。」

治が言うと、タナトスは馬を乗り捨てて馬車に飛び乗る。

「はああああ・・・。」

タナトスは荒い息をつき、それから治に言った。

「お戻りください!」

「戻らない。」

「王の命でございます!」

「それでも戻らない。」

「何で一日がそんなに大切なんですか!」

「事は一刻を争っています!とにかく行くしかありません!」

「そ、そんな・・・。」

タナトスはそう言い、あきれた顔をして外の景色を眺める。外はすでに荒地となっていた。

第44話 第9節「もともと地上に道はない 人が歩いて道にならないのだ」

あと6話で最終話です！

王子公式サイト：<http://s2.whss.biz/kmys/novel/ouzi/>

黒猫公式サイト：

<http://s2.whss.biz/kmys/novel/blackcat/>

KMYの小説公式サイト：<http://s2.whss.biz/kmys/novel/>

第45話 第9節「もともと地上に道はない 人が歩いて道にならないのだ」

「おじいちゃん、あそぼ!」

まだ2歳の治は、和室にいるおじいさんに声をかける。

「ああ、ああ、」

おじいさんも笑顔で、こっちへこいの仕草をすると、治も喜んでおじいさんの方へかけよる。

「たかーい、たかーい・・・」

おじいさんは、治に高い高いをする。治もしばらく笑っているうちに、たんずの上に絵が写真のように飾られているのに気づいた。

「あのえの女の人、だあれ?」

治がおじいさんに尋ねると、おじいさんは言った。

「おばあさんだよ。」

「おばあさん、あえるの?」

「あえない。」

「しんだの。」

治が尋ねると、おじいさんは首を横に振る。

「死んでないよ。まだどこかで生きている・・・。」

「どこで?」

「さあな・・・。」

おじいさんはそう言い、宙を見る。

「でも、ここからは行けない、とおーいとおーいところにある。」

「とおーいとおーいところ?」

治が言うと、おじいさんはうなずいた。

「治様?」

タナトスが、すっかり寝てしまった治を揺り起こす。

「おじいさん!」

治が起き上がり、びっくりして大きな声で言うと、タナトスも一瞬

びぐつとなつた。

「到着しました。」

「もう、着いたんだ……。」

ここは匈奴の首都である。治は、隣に座っているタナトスに言った。

「では、打ち合わせとおりに。」

「は、はあ……。」

タナトスは、これからする事よりも、モルデス45世に叱られないかの心配をしていた。木乃伊取りが木乃伊になるとはこのことかと、微妙な事を考えていた。

「では、ここから寒くなりますよ。ここに衣服がありますから。」

治は馬車の奥から毛皮の衣服を二着取りだす。タナトスは驚いた。

「なぜ二人分……。」

「もう一着ありますよ。これは従者の分で、」

「だからなぜ二人分……。」

「もしも破れた時に必要だからです。」

「そんなに危険なのですか？」

「予想は出来ません。」

治はそれだけ言い、景色を眺める。冷たい風が馬車を通り過ぎる。

一方、モルデス国本土では、モルデス45世の葬儀が行われていた。重臣たちは、モルデス46世となる喪主が決まらぬまま、葬儀を決定したのである。

ハルスとヴィーナスも葬儀に出席していた。ハルスは涙を流しながら、ヴィーナスは微妙な気持ちを持ちながら、モルデス45世の遺影を眺めていた。

「なんでこんな時にオサムがないのよ！」

ハルスは涙を流し、泣き声を上げた。ヴィーナスはさらに複雑な感覚を覚えた。

すっかり三人そろって毛皮の衣服を着て、馬車は匈奴の首都セイトへ到着した。

セイトは大都市であった。多くの人々にぎわい、そして雪の白があちこちにあった。道の真ん中には雪は積もっていなく土がむき出しであったが、両側に雪がたくさん付いていた。

「わぁ……。」

治は、歩いて市場を見ながら声を上げた。タナトスはあきれながら前を見ていた。治はタナトスに言った。

「さて、これから俺の言う事に従ってほしいのです。」

治はそう言い、そして近くの酒場を見つけ、タナトスを手寄せする。

「本当にあんな思い切った事をするのですか？」

タナトスは酒場の中で、酒を飲みながら、向かい側で水を飲んでいる治に尋ねる。治は黙ってうなずく。

「そうですか……。」

タナトスは、腹を決めたように唇をかんだ。治は続ける。

「匈奴同士で多くのグループが小競り合いを起こしそれを仲介しようとしている匈奴本国を逆手に利用し、全てのグループをばらばらにしてしまうのです。」

「それで、情報はどこから？」

「明日ここで和平の会議があるのは、匈奴中で専らの噂でしょう。伝い伝わってここまでやってきたのです。」

「はぁ……。で、でも、これだけでガタガタに崩れるとはどうも……。」

「蟻の穴から堤防崩れるという諺はご存知ですか？」

「……。」

タナトスには正直確信はなかった。しかし治は、そのようなタナトスの表情を無視するかのように、タナトスの手を握る。

「酔ってはいけません……。事が終わるまでの酒は控えてください。」

「あ、ああ・・・。」

半信半疑のタナトスは、黙ってうなづく。

ミライは、かの国を捨て、隣国ウィルダム国へ仕官していた。ミライの提案により、ウィルダム国はミライと王を総大将とした討伐軍を出し、多くの隣国を滅ぼした。数日の間で多くの国を滅ぼし、その動きはまさに電光石火であった。ミライはその功により、大將軍に封せられ、小勢力の群衆の鎮圧の最高責任者を任された。

しかしそれにウィルダム国の家臣は猛反対した。いきなり滅亡した隣国の將軍がここに仕官してウィルダム国を極端に大きくし、いずれは領地を割いて反乱を起こすつもりではないか、と。しかしウィルダム国王は、ウィルダム国が大きくなることには変わらないと一蹴し、任命を強行した。

第45話 第9節「もともと地上に道はない 人が歩いても道にならないのだ」

<http://s2.whss.biz/kmys/novel/index.html>

にて、小説投稿のスケジュールを発表しています。
絶対見ないでくださいね。

第46話 第9節「もともと地上に道はない 人が歩いて道にならないのだ」

ハルスは、部屋の窓から外の景色を眺めていた。

彼女にとつては、モルデス46世が誰になるか、興味はなかった。ただただ治が帰ってくれば、それでいいのである。それ以外は何も求めていないのである。それは、同室で掃除をしているヴィーナスも同様であつた。

ヴィーナスは思い切つてハルスに尋ねる。

「ハルス。」

「何よ。」

ハルスはそれだけいい、再び窓の方を見る。

「あのね、」

「帰れば。」

ハルスは外を見たまま返事する。

ウィルダム国では、ミライを受け入れるべきか受け入れざるべきか、改めて議論が沸きあがつていた。ミライを大將軍に任命する際は、王の一蹴で強制的に任命されたのだが、やはり国がここまで大きくなると、ミライを置くべきか不安になるのであつた。全ての家臣が、感情的に議論した。感情的な議論の結論はたかが知れたものであり、残留派と追放派で国が真っ二つになつてしまい、ついに決裂しほとんどの家臣たちは家に帰り戦いの準備を始めた。

治とタナトスは、匈奴の部落長の1人であるトンリの馬車を待つていた。

「見えてきました！」

タナトスが言うと、治もやぶから出る。二人ともみすばらしいなりをしており、段々こちらへ近づいてくる馬車を止めた。

「道をあけよ。」

馬車に乗っているトンリが、二人に言う。しかし二人は顔を見合わせ、頭を下げて言った。

「この先は工事中でございます。」

ちようどこのあたりはやぶが広がっており、少し前が工事中でも分らないほどであった。道もかろうじて通っているほどの狭さであった。

「工事中か・・・、しょうがない。」

「少し長くなりますが、この道に戻ってくださいますよう・・・。」

「うむ、しかし、これからは分岐点に立つように。」

「はい。」

二人は一礼して、嘘のばれないようにきた道を引き返すトンリの馬車の後ろについて行った。

一方、匈奴では、仲直りの宴会がこれより始まろうとしていた。

上座に座っている匈奴の元帥が立ち上がり、やってきた匈奴の部落長たちを見回した。

「ん？トンリがまだ来ていないのだから？」

元帥が尋ねるが、部落長たちは、お互いの顔を見合わせる。

「そうか・・・、全員がそろわないと仲直りも意味がない。少し待とう。」

元帥はそう言い、改めて上座に座りなおした。

「分岐点だ。」

トンリはそう言い、馬車を止め、傍らの二人に声をかける。

「これからは分岐点に立って注意するものだぞ。」

「はい。」

二人が頭を下げると、トンリの馬車はそのままずっと、もう一つの道へ入っていった。

「遅い！」

「食事も冷めてしまう!」

「というかもう冷めている!」

すでに多くの部落長たちがいきり立っていた。

「落ち着け、落ち着け……。」

元帥が慌てて事態収拾を図る。しかし、部落長たちは、いらいらしているが故に言い争いを始めた。

「速く走れ!」

トンリが従者に怒鳴る。

「これが限界でございます。」

「ええい!」

トンリはいらした顔であった。

トンリは、1時間ほど遅刻して、会場についた。

トンリが会場に入るなり、多くの部落長から「遅い」の大喝采を受けた。

「いや、これは工事中で、」

「工事?」

部落長たちの目が一瞬光った。部落長たちは一斉に立ち上がる。

「このあたりに工事など一切ない!」

「でも確かに工事で、」

「嘘をつけ!」

部落長たちはついに取っ組み合いを始めた。いきり立っているのか、トンリ以外の部落長にも八つ当たりをするやつがいて、その場は修羅場と化した。事態を鎮静しようとした元帥は殴殺され、多くの部落長たちも殴殺された。

「これでわれわれの役目は終わりです。」

治とタナトスは、馬車に乗ってモルデス国への帰途へついていた。
「とにかく、モルデス王様にお会いして、」

タナトスが、いい加減という顔で治に言う。

「まだその話ですか。」

治は少し笑い、そしてまだ外の景色を見た。

「俺・・・、なんか、前にもこんな事をやっていたような気がするんですよ。」

「えっ？」

タナトスが言うが、治はもう耳を貸さなかった。流れ行く外の景色を眺めているのみの治の目から、涙が流れているのにタナトスは気づいていなかった。

「俺の本当の名は・・・、オサム・ル・ド・スイグラン・・・。」

治は外の景色を見ながら、ぼそりと言った。

「はい？」

タナトスが治に尋ねる。治は、後ろからの声に気づき、外を見たまま言った。

「俺のおじいさんが冗談半分で言ってたんだよ、俺の名前がオサム・ル・ド・スイグランだって・・・。」

「スイグラン？」

その名を聞いた時、タナトスは目の色を変えた。

第46話 第9節「もともと地上に道はない 人が歩いて道にならないのだ」

最終話まであと4話！

次である第47話から、最終節に入ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5006b/>

王子

2010年10月9日02時15分発行